

生きる力を育むE S D実践カリキュラムの開発に関する研究（最終報告）

国立教育政策研究所の「学校におけるE S Dに関する研究」の最終まとめで提案された「E S Dの視点を生かした授業づくり」の視点表による教科や領域等の単元へのE S Dの視点導入やE S Dカレンダーによる総合的な学習の時間を中心とした年間計画の作成により、学校におけるE S Dの視点の円滑な導入を目指した。E S Dの視点をカリキュラムに導入することにより、学校全体が活性化され、児童生徒の学びが深まる上に、新たな学びに対する意欲も向上することが確認された。

＜検索用キーワード＞ E S D 持続発展教育 生きる力 環境教育
E S Dカレンダー 総合的な学習の時間 教科横断 カリキュラム

共同研究者

環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフ・コーディネーター 新海 洋子（平成22、23、24年度）

研究会委員

あま市立甚目寺小学校教諭

佐々木 茂（平成23、24年度）

東浦町立緒川小学校教諭

原 伊津子（平成23、24年度）

一宮市立葉栗中学校教諭

宇佐美 徹（平成24年度）

岡崎市立新香山中学校教諭

山内 貴弘（平成23、24年度）

県立愛知商業高等学校教諭

梶原 英彦（平成24年度）

県立刈谷高等学校教諭

渡邊 芳隆（平成24年度）

県立豊田東高等学校教諭

小瀧 逸子（平成23、24年度）

総合教育センター研究部長（現県立一宮南高等学校 校長）井中 宏史（平成22、23年度）

総合教育センター経営研究室長 山口 明則（平成22、23、24年度）

総合教育センター研究指導主事（現豊川市立小坂井東小学校 教諭）坂田 貴仙（平成22年度）

総合教育センター研究指導主事 佐々木佐知子（平成22、23、24年度）

総合教育センター研究指導主事 佐治 宏昭（平成23、24年度）

総合教育センター教科研究室長 櫛田 敏宏（平成22、23、24年度主務者）

1 はじめに

E S D（Education for Sustainable Development：持続発展教育《「持続可能な開発のための教育」とも呼ぶ》）は、持続可能な社会を主体的に担う人づくりとして、2002年の国連持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）で、「国連持続可能な開発のための教育の10年」（2005年開始）が提唱され、国際的に広まってきた活動である。我が国では、2006年にE S D関係省庁連絡会議でE S D国内実施計画が策定され、2008年に出された教育振興基本計画で重要な理念の一つとして位置付けられ、新学習指導要領（小・中学校2008年、高等学校2009年公示）にも持続可能な社会構築の観点が盛り込まれた。

文部科学省からは、ユネスコスクールを推進拠点として学校にE S Dを広めようという方針が出され、各県にユネスコスクールに関する窓口が設定され、徐々に登録校が増えている。また、国立教育

政策研究所においても学校におけるE S Dについて実践研究がなされ、報告書が出された。

このように、E S Dが学校に広まる流れはできてきたが、まだ多くの学校に浸透しているとは言い難い。その要因としては、E S Dの概念の分かりにくさや授業やカリキュラムへの導入の難しさ、多忙な学校に新たな教育課題を持ち込むことへの抵抗感などがあると考えられる。そこで、本研究では、E S Dを理解する分かりやすい考え方や、E S Dの授業やカリキュラムへの導入方法を解明し、提案することとする。その際、特定の個人に仕事が集中することなく、学校全体でE S Dに取り組める方法を開発するように留意した。

2 研究の経過

当センターでは、平成20年度よりE S Dの学校教育の導入について、E S Dの実践に実績のある環境省中部環境パートナーシップオフィス（E P O中部）と連携して研究を進めている。

平成20, 21年度は、「環境教育の在り方に関する研究—持続可能な社会構築を目指して—」を行った。実態調査の結果、大部分の児童生徒は、将来の環境について憂慮し、自らも何か行動しなければならないと考えていることが判明した。その実態を踏まえて実践研究を行った結果、工夫をすれば、各教科の学習にE S Dの視点を取り入れることが可能であることや、各実践後の評価から、E S Dの視点を取り入れることで児童生徒が新たな学びに向けて意欲を高めるなどの効果が大きいことも分かった。1)

この研究では、各教科の学習にE S Dの視点を取り入れることを目標に行ったが、E S Dは総合的な学びであり、学校全体で取り組むことが重要ではないかということで、平成22, 23年度と「生きる力をはぐくむE S D実践カリキュラムの開発に関する研究」を行った。平成20, 21年度の研究成果を基に、学校レベルにおいて、E S Dの視点を取り入れた生きる力を育む実践カリキュラムを開発、検証した。この研究では、E S Dカレンダーやチェックシート型アプローチの利用により、各学校の現行のカリキュラムにE S Dの視点を取り入れることが可能であることが分かった。また、E S Dで求められる力は学習指導要領の目指す「生きる力」と大きく重なり、実践によって児童生徒の学びが深まり、次の学びに向けて意欲を高めるなどの効果が大きいことも分かった。2) 以上のような4年間の成果を基に、平成24年度の研究を進めていく。

3 研究の目的

学校におけるE S Dの円滑な導入方法を明確にする。そのために、E S Dの概念を明確にし、E S Dの授業や単元への導入、そしてカリキュラムへの導入方法を、実践を通して研究・開発する。最終的には、負担を最小限にした形で、学校全体でE S Dに取り組む方法をまとめ、その成果を普及させる。

4 研究の方法

総合的な学習の時間や環境教育などの実践において実績がある学校と協働して、E S Dの視点を取り入れたカリキュラムを開発し、実践を行い、その有効性を検証する。カリキュラムの開発や実践に当たっては、環境省中部環境パートナーシップオフィス（E P O中部）と連携して進めていく。文部科学省の「E S Dの目標、基本的な考え方、はぐくみたい力、学び方・教え方」3)や国立教育政策研究所の「学校におけるE S Dに関する研究」4), 5)に合致した実践とし、成果を広く発信する。

5 研究の内容

(1) ESDの概念の明確化

ア ESDとは

ESDの概念は、1980年の世界環境保全戦略で初めて取り上げられたが、2002年のヨハネスブルグサミットで日本政府とNGOが共同提案した「国連ESDの10年」(2005年から2014年)の決定で、世界中に知られるようになった。

従来型の開発は、物質的な豊かさをもたらす一方で、環境破壊、食料問題、人権侵害など多くの問題を生み出している。世界中の人々、将来世代の人々が、安心して生活できる社会にするためには、自然、経済を含む社会や人間性をバランスよく維持するなど、持続不可能な状況を克服する行動が必要になってくる。そのためには、さまざまな課題と自分とのつながりに気付き、行動できる意欲と能力、価値観、解決のために多くの人と協働する力などを育てることが重要である。そのための教育がESDである。

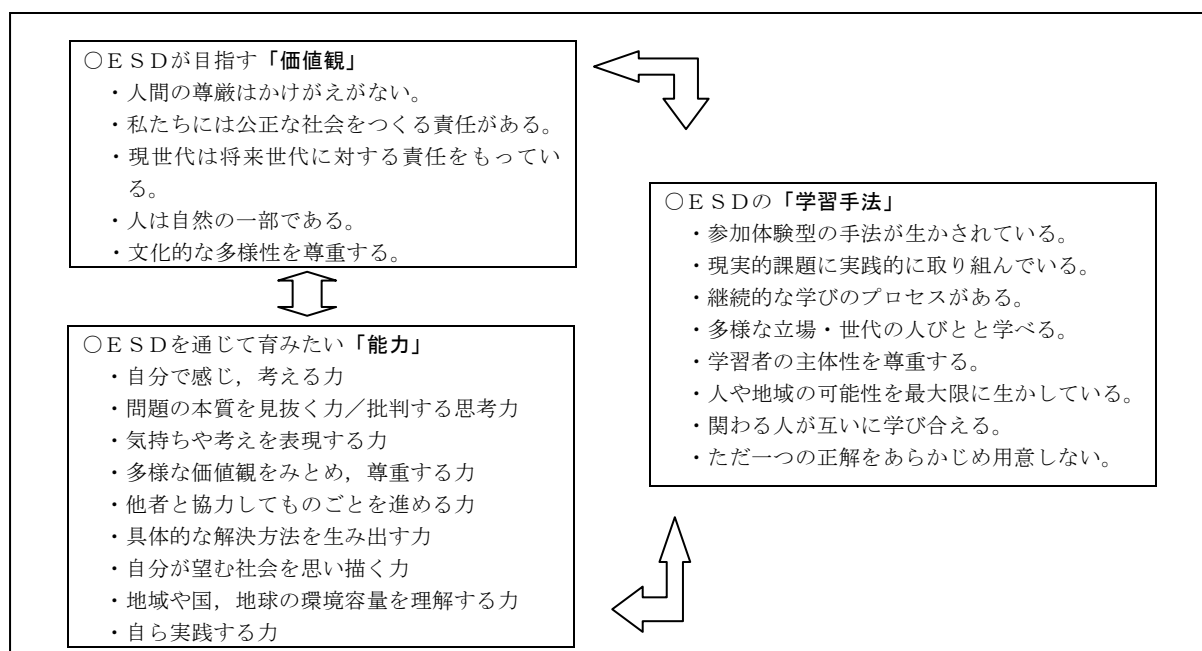
文部科学省は、ESDの目標として次の3点を挙げている。3)

- ・持続可能な発展のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること。
- ・すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること。
- ・環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと。

イ ESDの特徴

学校教育をはじめ、社会教育、企業教育などで、環境教育、多文化共生教育、ジェンダー教育、人権教育など、いろいろな社会問題に対する教育が行われている。これらは、すべてESDに関わる。どれも掘り下げると、育みたい力は、多面的なものの見方や問題解決能力、コミュニケーション能力であり、学習手法としては参加体験型、ワークショップ型、価値観としては共生や人間の尊厳がエッセンスとして表れる。これらが、ESDが目指す育みたい力や価値観である(図1参照)。

図1 ESDが目指す「価値観」、育みたい「能力」、「学習手法」



「未来をつくる『人』を育てよう」NP0 法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議 (ESD-J) 編 6) より

また、「E S D入門」(2012)では、E S Dについて次のように説明している。

「従来の環境教育や人権教育、多文化共生教育では、近年、相互に複雑に関連するようになってきた地球的諸課題を解決することができなくなり、相互に乗り入れをすることが必要になってきたという背景もある。環境問題を解決し、その発生を未然に防止することを目的に環境教育が始められ、基本的人権を守り、育てるために人権教育があるなど地球的課題教育はそれぞれに生まれた経緯や存在理由がある。そして、これらの教育が扱う問題は、全てが持続可能性に関わる問題であり、持続可能な社会を創造していくためには解決しなければならない問題である。とすれば、従来からのアプローチのみでなく、持続可能な社会構築といった視点から、他の教育課題と連携しながらアプローチをしていくことは極めて有効であると考えられる。例えば、従来の環境教育は、人と自然との関係を改善していくことが目的であり、人権教育は人と人、人と社会との関係を改善していくことが目的であった。これをトータル（統合的かつ総合的）に見ていこうというのがE S Dと言える」(一部改) 7)

(2) E S Dを学校全体に広める手だて

ア E S Dを学校全体で取り組むことの重要性

学校におけるE S Dは、人とのつながりや、実際の課題解決やそれに向けた行動という面を重視するならば、外部の人材・機関等と連携しやすい総合的な学習の時間への導入が適していると考えられる。また、総合的な学習の時間と各授業を関連させて展開すれば、更に学びが深まる。しかし、そのような授業展開をするためには、教科担当一人で行うことは難しい。学校全体でE S Dの視点を踏まえたカリキュラムを導入することが望まれる。

成田(2008)は、「教科・領域などの限界・境界を越えて、同僚・保護者・地域・専門機関などとの連携・協働がE S Dには必要である」8)と教科を越えた連携・協働の重要性を述べ、更に学校全体がE S Dに取り組み、その実践を持続・継承させることが重要であることを示している。成田(2009)また、及川(2011)は、「E S Dの学習活動の「量」よりも「質」を高め、「体系的・系統的」に全校体制で発達段階に応じた長期的な視野で指導していくことがE S Dには重要である」9), 10) と示している。

このように、学校全体で、持続的にE S Dに取り組むことの重要性がE S Dの研究者や実践者によって語られている。では、カリキュラムにE S Dの視点を取り入れるには、どのような手法があるだろうか。我々は、次の二つの手法に着目した。

(ア) E S Dの視点を生かした授業づくり

国立教育政策研究所では、E S Dに関して平成 20 年から研究準備を始め、平成 21 年度から 23 年度にかけて、「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究」を行っている。昨年度、本研究では、その中間報告書 4)に掲載されているチェックシート型アプローチによって、実践にE S Dの視点を取り入れる試みを行った。平成 24 年 3 月には国立教育政策研究所から研究最終報告書 5)が出され、今年度、本研究ではその中で提案されている「E S Dの視点を生かした授業づくり」も参考にして実践を進めた。

この最終報告書ではE S Dの視点に立った学習指導の目標を次のように設定している。

指導目標:「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

そして、そのための「持続可能な社会づくりの構成概念」(p. 9 資料 1・表 1)と、「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」(p. 10 資料 1・表 2), 「E S Dの視点に立った学習指導を進める上での留意事項」(p. 11 資料 1・表 3)が提示されている。また、E S Dの視点を生かした授業が、そうでない授業とどう違うのかということや、E S Dの視点を生かす際に配慮すべきことなど

について整理するために、指導者は、視点表（p. 12 資料 1・表 4）を作成するとよい。

この、国立教育政策研究所がまとめた「E S Dの視点を生かした授業づくり」の手法を用いると、各教科や領域等の単元案や授業指導案にE S Dの視点を取り入れやすい。

（イ）E S Dカレンダー（学年毎のE S D内容に関する各教科・領域の関連図）

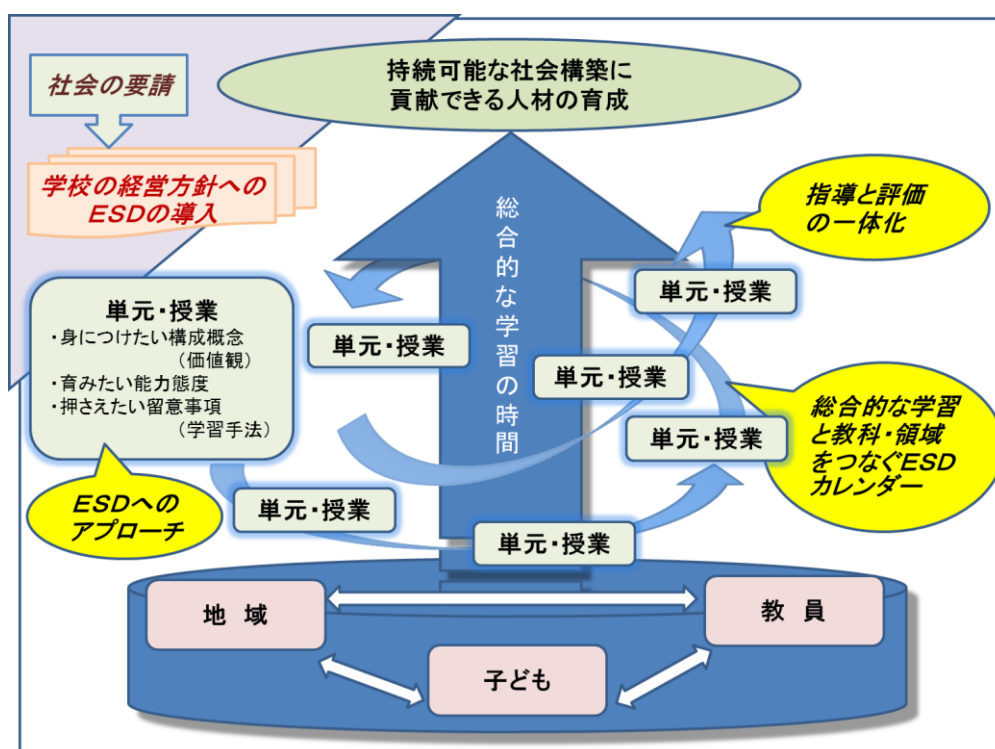
手島（2007，2011）が提唱した手法で、学年毎に、一年間の教育の中で、各教科，総合的な学習の時間，特別活動等がどのように結びついているのか，カレンダーに項目を立てて，その関連を分かりやすく結んだものである。学校教育全体でE S Dを進めていくためには，このような関連付けが重要と考え，考案された手法である。11) 更に手島は，単元のねらいや，問題解決的・探究的な学習過程に沿った学習活動や，地域人材・関係機関との連携などの情報を入れた指導計画として進化させていくことが求められていると述べている。12) 我々の実践についても，一部E S Dカレンダーを導入して年間計画を考案した。

今回，カリキュラムや実践にE S Dの視点を取り入れる手法として，「E S Dの視点を生かした授業づくり」と「E S Dカレンダーの作成」を各研究協力委員が行った。

イ 学校におけるE S Dの在り方

項目アでも述べたように，E S Dを学校に取り入れるには，E S Dの理念から言って，総合的な学習時間を軸とした教科横断型のカリキュラムを作ることが重要である。文部科学省ユネスコ国内委員会では，E S D推進拠点（ユネスコスクール）の大切なポイントとして，「E S Dを通じて育てたい資質や能力を明確にし，自分で，あるいは協働して，問題を見出し，解決を図っていく学習の過程を重視した教育課程を編成するよう努めること」「総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てるなど，指導内容を適切に定め，さらに，指導方法の工夫改善に努めること」を挙げている。13) これは，ユネスコスクールだけでなく，E S Dを学校として進めていく上で大切な視点である。教育課程にE S Dの視点を取り込むならば，やはり学校の経営方針にもE S Dの視点を入れていくべきである。これらをまとめたものが図 2 である。

図 2 学校におけるE S D構想図



また、重要なポイントとして、E S Dは一から始めるのではなく、既にあるそれぞれの学校の教育活動にE S Dの視点を入れていくということである。統一性のなかった、教科、総合的な学習の時間、特別活動などをE S Dという視点を入れることによって、「つなぐ」ことができる。この具体的な例は、実践例を見ていただきたい。さらに、E S Dでは「つなぐ」が重要なキーワードである。教科、領域等を「つなぐ」だけでなく、学校（教員、子ども）と地域、外部団体を「つなぐ」ことも重要であり、学校でE S Dを展開する場合、そのつながりは、活動の土台となってくる。

ウ E S Dの評価

評価については、単元・授業の評価とカリキュラム全体の評価がある。

単元・授業の評価は、現在の教科、総合的な学習の時間で行われている、目標に基づく評価規準の作成、評価という流れで行うことが妥当であろう。紹介する各学校の実践の中でも行われているので、参考にしていきたい。パフォーマンス評価を取り入れた学校もある。カリキュラム全体の評価は、今後の研究課題であるが、児童・生徒、保護者アンケートや学校評議員などの意見を基に総合的に評価することが重要と思われる。

(3) 各学校における実践概要

研究協力委員（小学校2名、中学校2名、高等学校3名）所属校において、カリキュラムにE S Dの視点を取り入れる実践を行った。

研究協力委員による実践は以下のとおりである。①から④の4校は、平成22年度からの実践校であり、昨年度から実践研究を継続している。また、⑤から⑦の3校は、今年度からの実践校である。

	概 略
①あま市立甚目寺小学校	ふるさと 甚目寺ー「かかわる、つたえる、つながる」学習や活動を重視するE S Dの取組ー 総合学習「ふるさと甚目寺」の学習に、「持続可能な社会づくりの構成概念」と「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」を取り入れ、教材を内容的・空間的・時間的につなげる、人や地域をつなげる、身に付けた能力・態度を行動につなげることを大切にしたい取組を実践し、検証した。
②東浦町立緒川小学校	個性化教育とE S Dー総合学習「生きる」をE S Dの視点で見直し、学校ぐるみで取り組むー 総合学習「生きる」をE S Dの視点で見直し、体験活動だけでなく探究的な学習になるように改善を進めた。その方針に沿って、各学年で単元開発や授業づくりを行った。今回は、6年生の国際理解と自国文化の理解について学習する単元「国際人になろう」にアートマイルプロジェクトを取り入れ、探究的な学びに改善した事例を中心に紹介する。
③岡崎市長新香山中学校	環境を見つめ、考え、働きかける生徒の育成ー環境学習を基盤としたE S Dの展開ー 既に導入されている「岡崎環境学習プログラム」にE S Dの視点を導入し、生徒が持続可能な社会をイメージし、自分の生き方を高めることを目指した。今回は、中学校2、3年生「持続可能な社会づくりのための共生を考えよう」の取組を中心として、E S D新香山プランを開発し、E S Dの視点を取り入れた探究的な学びを完成させた事例を紹介する。
④愛知県立豊田東高等学校	総合学科の特色を生かしたE S Dの取組ー生徒が夢を実現するためにー 3年間の学びの体系づくりである、『夢の実現』に向けてのキャリアガイダンス

	ス」「3年間の学びの流れ」についてE S Dの視点に立って整理し、見直しを行った。特色である「プラン別学習」や「総合発表会」「環境教育」「国際理解教育」「地域連携教育」などの取組がどのような能力や態度に結び付いているのか、国立教育政策研究所が示した視点表を用いて検証した。
⑤一宮市立葉栗中学校	伝統行事を見つめ、地域を考える生徒の育成ー祝い餅づくりを通したE S Dの取組ー 地域を巻き込んだ伝統的な行事である「祝い餅づくり」に、E S Dの視点を取り入れ、その目的や意義、卒業生や地域の人々の願いなどを生徒に伝え、地域や地域の良さを見つめ直す学習の場として捉え直すことによって、地域社会の良さを考える生徒の育成を目指した。
⑥愛知県立愛知商業高等学校	高等学校における地域をフィールドとした実践的マーケティング活動の展開ーE S Dの視点で見直したミツバチプロジェクトの取組ー 「課題研究」にE S Dの視点を入れることにより、取組を一層充実させ、生徒が自ら考え、行動し、解決していく態度と考え方を涵養 ^{かんよう} することを目指した。今回は、マーケティング研究「ミツバチプロジェクト」を実践として取り上げ、E S Dの視点で整理し、改善を図った。
⑦愛知県立刈谷高等学校	問題・課題解決能力を育むE S Dの実践ー総合的な学習の時間のE S D化を通してー 国際社会に貢献できる科学的リテラシーや国際的教養やコミュニケーション能力を備えた人材育成を目指してSSH事業を進めている。その特色として、総合的な学習の時間を「E S D」とし、現在世の中が抱えている課題・問題を発見し、その解決に向けて主体的に考えて考察することができる生徒の育成を目指した。

全ての学校において、E S Dの視点カリキュラムに取り入れることを意識して実践を進めることができた。今回の実践は、各研究協力委員だけで進めたものではなく、管理職をはじめ、学校全体で取り組んだ。多くの教員をつないで新しい実践を行うことは大変に難しいが、既にある枠組みにE S Dの視点を取り入れることは、工夫をすれば可能であることを示すことができた。

各校の実践について、どのような工夫で、どのようにE S Dの視点がカリキュラムに導入され、何が変わったかをまとめた表が p. 12, 13 の資料2である。

6 研究のまとめと今後の課題

深刻な環境問題や社会問題により持続が困難ではと考えられる現在の状況では、持続可能な社会へ構造を変えようと「行動する人」の存在が重要である。自然との共生や多様な立場が尊重できる価値観を備え、柔軟な問題解決能力をもち、よりよい社会づくりに協働できる人材の育成が望まれている。この人材の育成を担うのがE S Dである。

学校へE S Dの導入は、人とのつながりや、実際の課題解決やそれに向けた協働という面を重視するならば、先行研究や先行実践にもあるように、やはり地域と連携した生活科や総合的な学習の時間への導入が最も適していると考えられる。このことは、今回の7校の実践からも明らかになった。

また、今回は、特別支援学校による実践を行うことができなかったが、学校におけるE S Dで重視される「地域との共生、つながり」という概念は、共生社会を目指す特別支援教育においても重要な柱である。愛知県内でも、特別支援学校によるユネスコスクールへの申請が始まった。今後、特別支援学校においても積極的にE S Dの視点を取り入れたカリキュラム開発が期待される。

子どもたちの未来には、難題が山積している。それらの難題に協働して立ち向かう「生きる力」を子どもたちに身に付けさせることは、大人の大きな責務である。今後、各学校におけるE S Dの更なる実践が強く望まれる。

※参考文献

- 1) 「環境教育の在り方に関する研究－持続可能な社会構築を目指して－」愛知県総合教育センター研究紀要第99集 2010.3
- 2) 「生きる力をはぐくむE S D実践カリキュラム開発に関する研究」愛知県総合教育センター研究紀要第101集 2012.3
- 3) 「持続発展教育」文部科学省ユネスコ国内委員会 <http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm>
- 4) 「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究 中間報告」国立教育政策研究所 2010.9
- 5) 「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究 最終報告書」国立教育政策研究所 2012.3
- 6) 「未来をつくる『人』を育てよう」 持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）編 2006.12
- 7) 「持続可能な開発のための教育 E S D入門」阿部治・朝岡幸彦監修 筑波書房 2012.8.17
- 8) 「持続可能な開発のための教育（E S D）カリキュラムの開発の方法」成田喜一郎 環境教育学研究第17号 2008
- 9) 「E S D教材活用ガイド」 財団法人ユネスコ・アジア文化センター編 2009.3.19
- 10) 「学校におけるE S Dの推進とその展開事例」及川幸彦 季刊環境研究 No.163 2011.9
- 11) 「E S Dカレンダー（学年毎のE S D内容に関する各教科・領域の関連図）公開について」手島利夫 <http://aspnetwork.exblog.jp/5347152/>
- 12) 「N e w ! E S Dカレンダーのすすめ」手島利夫 江東区立八名川小学校 2011.6.3, 教育新聞 2011.6.23
- 13) 「ユネスコスクールガイドラインについて」文部科学省ユネスコ国内委員会 <http://www.mext.go.jp/unesco/004/1326014.htm> 2012.8.12

資料 1

指導目標、表 1～4 国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究〔最終報告書〕」より抜粋（一部改）

指導目標：「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

表 1 「持続可能な社会づくり」の構成概念（例）

人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念	I 多様性 いろいろある 【多様】	自然・文化・社会・経済は、起源・性質・状態などが異なる多種多様な事物（ものごと）から成り立ち、それらの中では多種多様な現象（出来事）が起きていること。 ※多様性を尊重し、事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切である。
	II 相互性 関わり合っている 【相互】	自然・文化・社会・経済は、互いに働き掛け合い、それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり、情報が伝達・流通したりしていること。 ※人は様々なシステムとつながりをもち、更にはその中で人と人が関わり合っていることを認識することが大切である。
	III 有限性 限りがある 【有限】	自然・文化・社会・経済は、有限の環境要因や資源（物質やエネルギー）に支えられながら、不可逆的に変化していること。 ※有限の資源を将来世代のために有効に使用していくことが求められ、有限の資源に支えられている社会の発展には限界があることを認識することが大切である。
人（集団・地域・社会・国など）の意志や行動に関する概念	IV 公平性 一人一人大切に 【公平】	持続可能な社会は、基本的な権利の保障や自然等からの恩恵の享受などが、地域や世代をわたって公平・公正・平等であることを基盤にしていること。 ※人権や生命が尊重され、他者を犠牲にすることなく、権利の保障や恩恵の享受が公平であることが必要であり、これらは地域や国を超え、世代をわたって保持されることが大切である。
	V 連携性 力を合わせて 【連携】	持続可能な社会は、多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し、互いに連携・協力することにより構築されること。 ※意見の異なる場合や利害が対立する場合などにおいても、その状況にしたがって順応したり、寛容な態度で調和を図ったりしながら、互いに協力して問題を解決していくことが大切である。
	VI 責任性 責任をもって 【責任】	持続可能な社会は、多様な主体が将来像に対する責任あるビジョンをもち、それに向かって変容・変革することにより構築されること。 ※現状を合理的・客観的に把握した上で意思決定し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンをもつことが大切である。

表2 ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）

① 批判的に考える力 《批判》	合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、物事を思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力。 ・他者の意見や情報を、よく検討・理解して取り入れる。 ・積極的・発展的に、よりよい解決策を考える。
② 未来像を予測して計画を立てる力 《未来》	過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、物事を計画する力。 ・見通しや目的意識をもって計画を立てる。 ・他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てる。
③ 多面的、総合的に考える力 《多面》	人・もの・こと・社会・自然などのつながり・関わり・広がり（システム）を理解し、それらを多面的、総合的に考える力。 ・廃棄物も見方によっては資源になると捉えることができる。 ・様々な物事を関連付けて考える。
④ コミュニケーションを行う力 《伝達》	自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力。 ・自分の考えをまとめて簡潔に伝えられる。 ・自分の考えに、他者の意見を取り入れる。
⑤ 他者と協力する態度 《協力》	他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同して物事を進めようとする態度。 ・相手の立場を考えて行動する。 ・仲間を励ましながらかチームで活躍する。
⑥ つながりを尊重する態度 《関連》	人・もの・こと・社会・自然などと自分のつながり・関わりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度。 ・自分が様々な物事とつながっていることに関心をもつ。 ・いろいろなもののお陰で自分がいることを実感する。
⑦ 進んで参加する態度 《参加》	集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を踏まえた上で、物事に自主的・主体的に参加しようとする態度。 ・自分の言ったことに責任を持ち、約束を守る。 ・進んで他者のために行動する。

表3 ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項

(1) 教材のつながり	教材や教科等の内容的な「つながり」、教室・学校と地域・社会・国・世界との空間的な「つながり」、過去・現在・未来といった時間的な「つながり」などを図りながら学習を進めていくことが必要である。
	取り上げた「構成概念」が、前後の学年においてどのような系統性や連続性があるのか（カリキュラム上の縦の「つながり」）や、その「構成概念」が、他教科等においてどのように扱われているのか（カリキュラム上の横の「つながり」）などを明らかにする。
(2) 人のつながり	児童生徒同士の「つながり」を取り入れた参加体験型の学習を展開したり、地域（身近な地域だけでなく、国内や国外、とりわけ発展途上国も含めて）との「つながり」を図りながら、多様な立場や世代の人々との「つながり」が体験できる場を用意したり、さらには、発達の段階に応じて、将来世代や過去世代との「つながり」も想像させたりするなどの工夫をしていくことが必要である。
	該当単元において、どのような人との「つながり」が学習活動として用意されているかを明らかにする。
(3) 能力・態度のつながり	各学校・地域の実情や児童生徒の実態に応じた課題を取り上げて、教科等における学習と活動との「つながり」や学校と家庭・地域社会との「つながり」を図りながら、継続的・実践的な「つながり」をもった指導を推進したり、現実的な問題解決との「つながり」になるように取り組んだりするなどの工夫をすることが必要である。
	他の教科等での育成はどうなっているのか（例えば、ある教科と他の教科との「つながり」、教科と総合的な学習の時間との「つながり」など）や育成した能力・態度が、どのように生活や地域で活用できるか（例えば、学校での学習と実社会・実生活との「つながり」）などを明らかにする。

表1、表2、表3で示された「構成概念」、「重視する能力・態度」、「留意事項」を基に以下のように単元の展開を考えていく。

- ① 単元の目標や内容・教材等を表1「構成概念」に基づいて、どのように捉えるか、また、単元の授業展開を通して、児童生徒にどのような表2「能力・態度」を育成したいかを考える。また、表3「留意事項（3つのつながり）」に基づいて、留意すべきことや、力点を置きたいことを考える。
- ② 単元の総括目標、四つの観点ごとの評価規準、主な学習活動・内容と教師の指導の概要、本時の目標展開などを考えるが、学習指導案では、表1「構成概念」や表2「能力・態度」と関連が深いところを明らかにする（太字体や斜字体で示したり、表中の【多様】、《批判》などの略号を使ったりすると分かりやすい）。
- ③ ESDの視点を生かした授業が、そうでない授業とどう違うのかということや、ESDの視点を生かす際に配慮すべきことなどについて整理するために、視点表（表4）を作成するとよい。

表4 ESDの視点表による整理

単元名「〇〇〇」 学習内容「◇◇◇◇」														
持続可能な社会づくりの構成概念							ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度							
I 多 様 性	II 相 互 性	III 有 限 性	IV 公 平 性	V 連 携 性	VI 責 任 性	VII 創 造 性	① 批 判 的 に 考 え る 力	② 計 未 画 来 を 像 立 を て 予 る 測 力 し て	③ 考 多 え 面 的 的 力 ・ 総 合 的 に	④ ン コ を ミ 行 ユ ウ ニ カ ケ ー シ ョ	⑤ 度 他 者 と 協 力 す る 態	⑥ る つ 態 な 度 が り を 尊 重 す	⑦ 度 進 ん で 参 加 す る 態	⑧ 自 己 制 御 能 力
【多様】 ☆	【相互】	【有限】 ○	【公平】	【連携】	【責任】	【創造】 ○	《批判》 ○	《未来》 ○	《多面》	《伝達》	《協力》	《関連》	《参加》 ○	《制御》

※表中の☆印，○印について：☆印は，元々学習指導要領にあるもので，○印は実践で追加したもの（ESDの視点として取り入れたもの）。このように授業改善の前後で印を付け，比較すると分かりやすい。

※表中の構成概念や能力・態度の要素については，学校の実態に合わせて付け加えたり，減らしたりしても良い。

資料2 各校の実践内容とその効果（変容）

学校名	実践内容	効果（変容）
甚目寺小学校	ふるさと 甚目寺 ー「かかわる、つたえる、つながる」学習や活動を重視するE S Dの取組ー ①学校教育全体をE S Dの視点に立った活動になるように、昨年度のE S D活動テーマをさらに見直す。 ②各学年のキーワード、1・2年「地域」、3年「福祉」、4年「環境」、5年「産業」、6年「歴史・文化」に基づいた活動テーマと学習・活動内容を決定する。 ③E S Dカレンダーを教材の内容的・空間的・時間的につなげることをさらに意識し、各学年の児童の実態に応じたものをつくっていく。また、昨年度つくっていたE S D関連指導計画と年間指導計画を一つに合わせ、新年間指導計画をつくる。新年間指導計画には重視する能力・態度の評価規準を入れる。 ④昨年度までの4つの育みたい力から重視する7つの能力・態度の変更に伴い、総合学習（ふるさと甚目寺）の評価規準の作成とE S Dの取組を学校全体・各学年で評価できるアンケートを作成し、実施する。	・「かかわる」とは、児童や学校が一方的に地域や地域の人と関わったり、関わってもらっている状態であり、「つたえる」とは、関わりから児童が学んだこと、学校が知らせたいことを地域や地域の人に伝えたり、情報発信したりすることである。そして、「つながる」とは「かかわる」や「つたえる」ことにより、一方的でない双方向的な関係ができることである。 ・年間指導計画とE S D関連指導計画を1本化し、さらに重視する能力・態度の観点と評価規準を含めた新しい年間指導計画をつくった。E S Dカレンダーを補完するものとして、これからも十分活用できるものになった。 ・事前アンケートを実施した結果、ふるさと甚目寺をすばらしい町、よい町だと思い、大切にしていきたいと思っている子どもが多い一方、何か考えたり、行動したりしたいと思う子どもが比較的少ないという、本校の子どもの実態が分かった。重視する能力・態度で学校全体として特に育みたい力を「進んで参加する態度」とした。
緒川小学校	個性化教育とE S D ー総合学習「生きる」をE S Dの視点で見直し、学校ぐるみで取り組むー ①これまでの総合学習「生きる」の各活動を「自然とのつながり」「社会とのつながり」「人とのつながり」の3つに整理する。 ②E S Dの視点で見直し、よりE S Dの方向性と合致するように学習活動を改善する。 ③よりE S Dの方向性と合致するように、関連する教科等の学習内容をカリキュラム上に位置付ける。 ④それぞれの活動に関わるE S Dの視点を書き加え、E S Dカレンダーとする。	・E S Dの実践を積み重ねることによって、授業や単元にE S Dの視点を導入する方法が分かってきた。昨年度実践した学年の事例を参考に、今年度は全学年でE S Dを取り入れた授業を行うことができ、学びが変わり、子どもが変わっていく姿をいくつも見る事ができた。 ・1年生の単元「おおきなあれ わたしのはな」では、意図的に一鉢にいくつかの種をまいて複数の苗が育つ状況をつくり、ある程度育った段階で「間引きをするか」という正答の定まらない問いを投げかけ、話し合わせた。子どもたちは自分なりに考え、「かわいそうだから間引きはしない」「大きな花を咲かせるために間引きをする」「間引きした苗は捨てるのではなく花壇に植える」といった意見を述べた。E S Dの可能性の広がりを感じた。
新香山中学校	環境を見つめ、考え、働きかける生徒の育成ー環境学習を基盤としたE S Dの展開ー ①地域教材を開発する。岡崎環境学習プログラムを基盤として、新香山の地域教材を取り入れたカリキュラムの創造をする。 ② <u>探究学習での教師支援の在り方を工夫する</u>。関わり合いの授業における「教師の仕掛けと支援」の在り方の実践的検証をする。 ③ <u>『E S D新香山プラン』を取り入れる</u>。E S D新香山プランを開発し、授業に取り入れる。	・環境学習そしてE S Dのキーワードは「探究」であることが実感できた。さらに、学びが深まるにつれて「世代を超えた倫理観」を学ぶ道徳的な授業の必要性が高まってきた。この実践を通して、学びのキーワードを「つながり」とした。さらに今後は、生徒の行動化のキーワードを「つづける」としていきたい。 ・新香山プランでは、E S Dの視点、能力・態度、留意点を関係付け、具体的な手だてとして表現し、活用することができた。 ・生徒たちは世代を超えた人々との公平感や平等感を深めることができた。未来社会の姿が少しずつ見えてきたのだろう。そして、未来をつくるのは自分たちの行動次第なのだとその責任を実感することができたのではないかと考える。

学校名	実践内容	効果（変容）
豊田東高等学校	総合学科の特色を生かしたＥＳＤの取組－生徒が夢を実現するために－ 3年間の学びの体系づくりである、『『夢の実現』に向けてのキャリアガイダンス』『3年間の学びの流れ』についてＥＳＤの視点に立って整理し、見直しを行う。 具体的には、1年生の科目選択、地域環境研究、2年生の異文化研究、異文化理解、修学旅行アンケート、3年生の中間報告会などを改善した。	見直した内容をＥＳＤの視点表で評価したところ、「構成概念」においても「重視する能力・態度」においても本校が目指す方向に沿っていることが分かった。これまでキャリア教育を中心に取り組んできた「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」は、新学習指導要領の柱である『生きる力』につながっており、ＥＳＤの理念にも通じる。今回の研究を通して、一つ一つの学習活動がＥＳＤにつながっていることを確信することができた。諸活動を通して生徒が身に付ける力、それはものの見方や考え方、積極性、コミュニケーション能力などであるが、これまで生徒が記したレポートや講演会後の感想などから、3年間にわたる学習の中で生徒たちの身に付いていることは明らかである。
葉栗中学校	伝統行事を見つめ、地域を考える生徒の育成－祝い餅づくりを通したＥＳＤの取組－ 地域を巻き込んだ伝統的な行事である「祝い餅づくり」を、田植えや餅つきなどの活動面を重視するだけでなく、ＥＳＤの視点を取り入れ、その目的や意義、卒業生や地域の人々の願いなどを生徒に伝え、地域や地域の良さを見つめ直す学習の場として捉え直すことによって、地域社会の良さを考える生徒の育成を目指した。	行事としての体験活動であった「祝い餅づくり」に、ＥＳＤの視点を取り入れることにより、様々な要素が絡み合い、地域理解の学習へとつながっていった。生徒は、調べさせたり、考えさせたりする活動を通して、地域のことに興味をもち、新たな発見をすることができた。体験を軸としたＥＳＤの展開については、地域社会に関する多くのテーマを設定することが可能であり、地域を理解し、再発見するのにたいへん有効であった。
愛知商業高等学校	高等学校における地域をフィールドとした実践的マーケティング活動の展開－ＥＳＤの視点で見直したミツバチプロジェクトの取組－ ＥＳＤは、様々な地域に暮らす様々な立場の人々によって、地域をはじめあらゆる場面で展開されるものであり、総合的に学び、実践することが大切である。本講座では、「環境」「経済」「社会」といった多面的な視点から問題を追究し、その問題に対して自ら学び、考え、具体的な行動を実践する商業を学ぶ生徒を育て、さらには様々な主体との協力によって、「環境」「経済」「社会」のバランスがとれた持続可能な社会の構築に貢献できる生徒を育成することを目指した。	現在の取組にＥＳＤの視点を少しでも取り入れることで新しい展開ができることや学びの深さに違いが出ることが分かった。また、ＥＳＤには基本的な考えとして、物事を総合的に見るのが大切であり、経済的な側面、社会的な側面、環境的な側面をバラバラに実行してもうまくいかず、三つを総合的に見ていくことが重要であるあることを学んだ。
刈谷高等学校	問題・課題解決能力を育むＥＳＤの実践－総合的な学習の時間のＥＳＤ化を通して－ 現在世の中が抱えている課題・問題を発見し、その解決に向けて主体的に考えて考察することができる生徒を育むことを目標に、ＥＳＤの視点を踏まえて総合的な学習の時間の計画を立案した。 具体的には、現場での実体験を生徒にさせ、そこから学習意欲や興味・関心、問題意識や新たな課題の発見をさせる試みをした。生徒に問題意識を喚起したり、価値観を揺さぶったりするような講演や実験・体験の機会を提供することで、課題を解決できないかと考えた。	概して良く調べ、良くまとめられた課題研究を行うことができた。ただし、情報活用に関してはインターネットによる情報検索が多く、情報リテラシーや研究におけるソースの扱い方も指導しなければいけない。また「課題探究力」において、評価規準を超える生徒が増えるような指導やカリキュラムの開発にも取り組む必要がある。

実践 1

ふるさと 甚目寺

－「かかわる，つたえる，つながる」学習や活動を重視する ESD の取組－

あま市立甚目寺小学校 侘美 茂

1 はじめに

ESD は、「持続可能な社会の担い手を育む教育」と言える。日本ユネスコ国内委員会は、ESD の必要性や概念について、「今，世界には，環境，貧困，人権，平和，開発など様々な問題がある。これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え，身近なところから取り組むことにより，それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと，そして，持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である」と説明している。1)

将来の見通しがつきにくい現代において，子どもたちに必要な力は，次代に向けて様々な問題を，多くの人と話し合い，すり合わせながら解決していく意欲や価値観，能力だと考える。これらの力を身近な問題を解決していく実体験の積み重ねによって，身に付けさせていきたい。本校では，ESD の大切にしている「価値観」「育みたい能力・態度」「学びの方法」を基本的視点として，総合学習「ふるさと甚目寺」（生活科・総合的な学習の時間）を中心に，今までの学習や活動の見直しと持続可能な取組にする努力を続けている。

本校の周りには，飛鳥時代に創建された甚目寺観音をはじめとする歴史的・文化的・伝統的な遺産が数多く存在する。この地域を「ふるさと甚目寺」としてつなげていくために，自分たちがこの地域で大切にしたいものに目を向け，人や地域に関わり，人から人へ伝え，人や地域とつながる「かかわる，つたえる，つながる」学習や活動を重視した取組を行っている。

2 研究の経過

本校は創立 140 周年の歴史をもつ学校であり，古くから地域との結び付きがある。生活科・総合的な学習の時間でも地域について調べたこと，体験したことを発表してきた。しかし，それは生活科・総合的な学習の時間だけのものとして，発表会に向けての取組という単発的な学習や活動になっていたところがあった。今までの取組の改善に向け，平成 22 年度に ESD の導入準備を始めた。まず研究を推進する教員が，校外研修に出かけた。平成 23 年度から ESD の考え方，視点を取り入れ，「人と人とのつながり，人と地域とのつながりを大切にする ESD の取組」を研究テーマとして，生活科・総合的な学習の時間をまとめ，総合学習「ふるさと甚目寺」とし，これまでの取組を見直し，整理を始めた。さらに，ESD・ユネスコスクール研修会に出かけ，ユネスコスクール加盟に向けての準備を始めた。平成 23 年度の研究については，以下のとおりである。

(1) 研究の目的

2 年生の生活科，「レッツゴー！町たんけん」では，地域のお店について学習する。出かけるお店は甚目寺観音の門前町として残る昔ながらの商店街の中のお店がほとんどである。どのようなお店があるか事前に調べ，実際にお店に出かける。お店は何を売っているのか，どのような仕事をしているか話を聞き，質問に答えてもらって帰ってくる。その後お礼の手紙を書いて届けるというのが例年の学習の流れである。お店の人と関わることはできるが，持続可能な社会を築くために，人と人とのつながり，人と地域とのつながりを大切にできたかと考えると，お店の人との関わりが深まらず，今まで

の学び方に疑問が出てきた。しかし、今までやってきたものを一からつくり直す必要はなく、従来の学び方を、教える側がE S Dの考え方、視点で見直し、創意工夫していけばよいと考える。

このような考えから、E S Dについて、学校全体の取組とE S Dの考え方、視点を取り入れた授業づくりについて実践し、検証することとした。

(2) 研究の方法

ア E S D活動テーマづくり

「つながろう人 つなげよう甚目寺 ーかかわる つたえる つながるー」

学校教育全体をE S Dの考え方、視点を取り入れた教育活動になるように、「全ての教育活動につながるキーワードをつくる」「人権を尊重する態度を育むことを柱とする」「学校教育目標を基にテーマを決め、目指す子ども像と育みたい力を設定する」「教科間でつながる教育活動を実践する」「人と人とのつながり、人と地域とのつながりを大切にする」の5つのポイントを設定し取り組んだ。

イ E S Dカレンダーと総合学習「ふるさと甚目寺」の指導計画および関連指導計画づくり

従来の人権教育年間指導計画や生活科・総合的な学習の時間の指導計画を「指導計画は、育みたい力を明確にしたねらいと学習過程、地域の人材・関係機関と連携したものを作成する」「総合学習『ふるさと甚目寺』と他の教科・活動とのつながりを明確にする」「実践時期などを考慮して、系統性や関連性を考える」「E S Dカレンダーの構成について、実践しながらよりよいものに修正していく」の4つのポイントで見直した。

ウ E S Dの考え方、視点で見直す授業づくり

総合学習「ふるさと甚目寺」を中心に、持続可能な社会を築くための力を育むために、持続可能な開発のための教育の10年推進会議（E S D－J）が出している文献を参考に、「五感を働かせることができる体験、校内外の両方の体験をつなげる」「子どもの主体性を尊重し、それぞれの発見・気づきを重視する」「子どもたちが、発見したり気付いたりしたことを表現する機会をもたせる」「地域のような立場、世代の人たちと学ぶ」「地域の人や自分たちが、この地域で残したいもの、守りたいものに目を向ける」の5つの学び方を設定した。

(3) 研究の成果

ア E S D活動テーマの設定とE S Dカレンダー・指導計画・関連指導計画の作成の成果

今までの研究主任を中心とした取組から、学校全体の取組として教師全員がE S Dの考え方、視点を理解するようになった。また、人権教育や生活科・総合的な学習の時間の指導計画を見直すことによって、教える側の考えが整理され、見通しをもってより計画的に指導できるようになった。そして、E S Dの考え方、視点が総合学習「ふるさと甚目寺」、教科・道徳、特別活動のどこにあるか、またそれぞれの関わりが分かった。さらに、発表会に向けた生活科・総合的な学習の時間になっていたのが、年間を通して取り組めるようになった。

イ 地域の資源、人材、関係機関の積極的な活用

人と人とのつながり、人と地域とのつながりを意識するようになって、人材や関係機関の活用を積極的に行うようになった。それとともに教師が地域をよく調べ、活用できる資源、人材を開拓するようになった。

ウ E S Dの考え方、視点で見直す授業づくりの成果

教える側が本物の体験をさせようと工夫することによって、子どもたちはすばらしい発見や気づきをするようになった。また、この発見や気づきは、学習する対象への興味・関心を更に高め、人や地

域に積極的につながろうとする子どもが出てきた。子どもたちに地域への愛着心が育まれてきたことを感じた。また、「レッツゴー！町たんけん」で学んだことを野菜栽培に生かしたり、野菜栽培を算数の学習につなげたりするなど、今まで気付かなかった学習や活動との関わりを意識する子どもが出てきた。

3 研究の目的

平成24年度は、国立教育政策研究所の「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究〔最終報告書〕」に基づいて、総合学習「ふるさと甚目寺」の学習や活動に、「持続可能な社会づくりの構成概念」と「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」を取り入れ、教材を内容的・空間的・時間的につなげること、人や地域をつなげること、身に付けた能力・態度を行動につなげることを大切にした学習指導をさらに進めるための取組を実践し、検証することとした。

4 研究の方法

(1) E S D活動テーマの見直し

学校教育全体をE S Dの視点に立った活動になるように、昨年度のE S D活動テーマをさらに見直す。見直しのポイントは、昨年度までの4つの育みたい力をE S Dの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度にする。

(2) 各学年の総合学習の活動テーマ・学習内容の決定

各学年のキーワード、1・2年「地域」、3年「福祉」、4年「環境」、5年「産業」、6年「歴史・文化」に基づいた活動テーマと学習・活動内容を決定する。

(3) E S Dカレンダーの見直しと新しい形式での年間指導計画づくり

昨年度のE S Dカレンダーを教材の内容的・空間的・時間的につなげることをさらに意識し、各学年の児童の実態に応じたものをつくっていく。また、昨年度つくっていたE S D関連指導計画と年間指導計画を一つに合わせ、新年間指導計画をつくる。新年間指導計画には重視する能力・態度の評価規準を入れる。

(4) 総合学習「ふるさと甚目寺」の評価とE S Dの学校評価のためのアンケートの作成と実施

昨年度までの4つの育みたい力から重視する7つの能力・態度の変更にともない、総合学習「ふるさと甚目寺」の評価規準の作成とE S Dの取組を学校全体・各学年で評価できるアンケートを作成し、実施する。

ア 7つの重視する能力・態度から各学年の学習や活動の内容や6年間を見通し、特に該当学年で指導する能力・態度を選択し、それを観点とした評価規準を作成する。総合学習「ふるさと甚目寺」の評価を総合的な学習の時間の評価として、新しい観点・評価規準で通知表、指導要録への記載を行う。

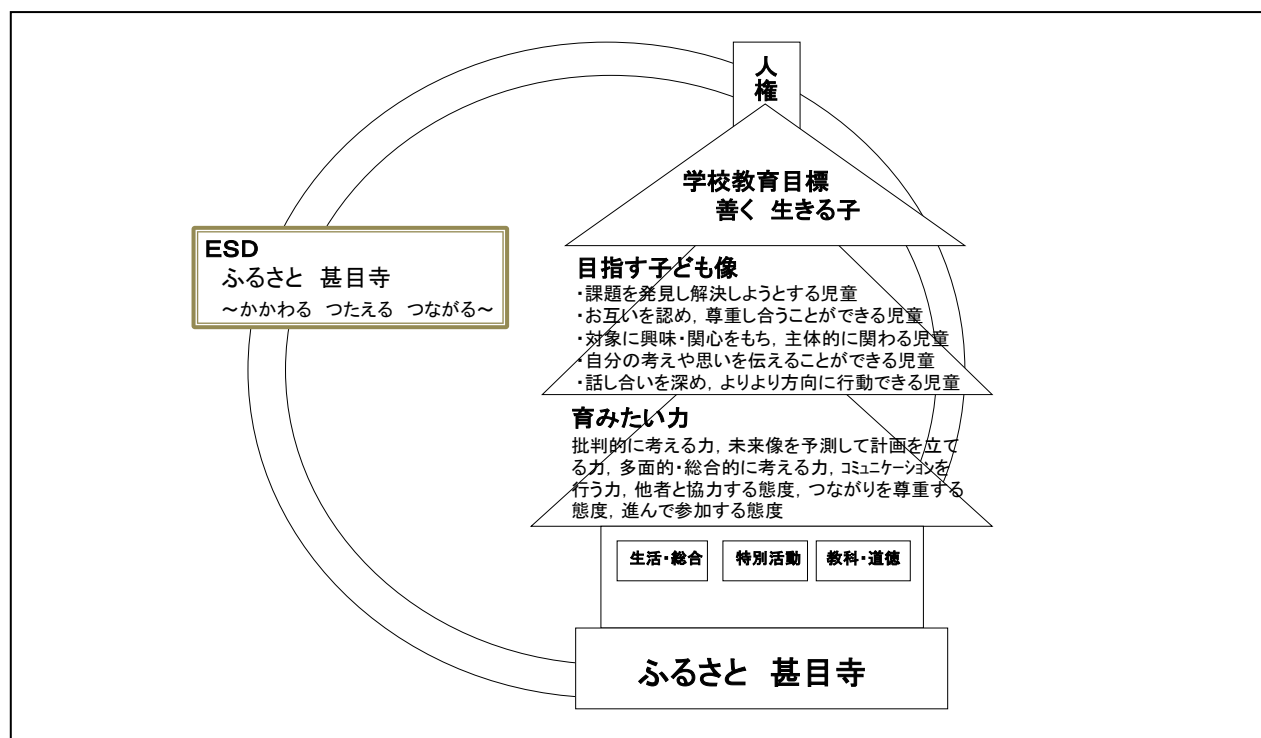
イ 学習や活動の事前事後のアンケートを作成し、実施した結果をE S Dの学校・学年全体の評価として、取組の改善につなげていくとともに、結果の蓄積によりE S Dの長期的評価とする。

5 研究の内容

(1) E S D活動テーマの見直し

昨年度までの4つの育みたい力、「問題力」・「関係力」・「表現力」・「行動力」を7つの重視する能力・

態度「批判的に考える力」・「未来像を予測して計画を立てる力」・「多面的・総合的に考える力」・「コミュニケーションを行う力」・「他者と協力する態度」・「つながりを尊重する態度」・「進んで参加する態度」に変更した。



(2) 各学年の活動テーマと学習内容の決定

各学年の活動テーマと学習や活動について、持続可能な社会づくりを捉える構成概念を明確にし、本校で重視する能力・態度を設定した。本校では、構成概念の「Ⅱ相互性」と「Ⅴ連携性」を学校全体の、「Ⅵ責任性」を高学年の共通な要素として設定した。また、重視する能力・態度は、6年間で育みたい能力・態度として「⑦進んで参加する態度」を、低学年では「④コミュニケーションを行う力」と「⑤他者と協力する態度」を、高学年では「③多面的・総合的に考える力」と「⑥つながりを尊重する態度」を設定した。

学 年	各学年の 活動テーマ	主な単元名	構成概念						重視する能力・態度						
			I	II	III	IV	V	VI	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	みんな なかよし	①いちねんせいになったよ ②さあみんなのでかけよう ③あきて気持ちがいいね ④わくわくふゆがやってきた ⑤たのしかったね1年かん ⑥ぐんぐんのびろ		○	○		○	○				○	○		○
2	この町大すき ！ぼくたち町 のたんけんた い	①レッツゴー町たんけん ②もっと知りたいな町のこと ③こんなすてきな町なんだ ④ぐんぐんのびろ・げんきにそだて	○	○			○					○	○	○	○

3	人にやさしい 町づくり 福祉	①福祉って何だろう ②福祉ボランティアについて学ぼう ③自分たちにできることをしよう ④お年寄りから学ぼう		○		○	○	○				○	○	○	○
4	環境に やさしい 町づくり 環境	①生活を見つめ直そう！ゴミ・水調査隊 ②ストップ温暖化！甚小グリーンカーテン ③甚目寺エコチャレンジャー		○	○		○	○			○	○		○	○
5	われら 産業調査隊 産業	①甚目寺の伝統産業を調べよう ②甚目寺の主な産業を知ろう ③甚目寺の産業を知ろう ④甚目寺の産業を応援しよう	○	○			○	○	○		○			○	○
6	われら 歴史・文化 調査隊 歴史・文化	①甚目寺の歴史・文化を知ろう ②甚目寺の歴史・文化をまとめよう ③われら甚目寺ボランティア隊		○	○		○	○		○	○			○	○
項目の合計			3	6	2	2	6	4	1	1	3	4	3	5	6

【構成概念】

- I 多様性 II 相互性
III 有限性 IV 公平性
V 連携性 VI 責任性

【重視する能力・態度】

- ①批判的に考える力 ②未来像を予測して計画を立てる力
③多面的・総合的に考える力 ④コミュニケーションを行う力
⑤他者と協力する態度 ⑥つながりを尊重する態度
⑦進んで参加する態度

(3) ESDカレンダーの見直しと総合学習の新しい形式での年間指導計画づくり

本校のESDカレンダーには、人権教育の内容も一部含まれている。本校の人権教育のねらいは、児童が、自分自身を含めた全ての人は、かけがえのない大切な存在であることを知り、相手の気持ちを思いやって行動しようという心を高めることである。

このねらいを実現するために、他者とのつながりを深める手だてとして、異学年・ペア学年を中心とした交流活動の充実に努めるとともに、望ましい人間関係づくりを目指して、ソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウンターを取り入れた交流活動に取り組んでいる。また昨年度より、自分の意見や気持ちをその場にふさわしい表現でできるようなアサーショントレーニングや人に伝わりやすい話し方ができるように、ハッピートークトレーニング（コミュニケーション技術を身に付けるトレーニング）も行うようになった。このような取組により、児童の自尊感情が高まったり、相手のことも思いやった表現ができたりするなど、自分も相手も大切にすることができる児童の育成につながっている。

ESDにおいても、次代に向けて様々な問題を、多く人と話し合い、すり合わせながら解決していく過程で、お互いに認め合い、権利を尊重しながら、つながり合おうとする人権尊重の実践力が大切である。ESDカレンダー内で人権教育の内容と生活科・総合的な学習の時間の内容とが、直接つながっていても、ESDを進めるにあたって、必要な人権教育の内容として示してある。

(4) 総合学習「ふるさと甚目寺」の評価規準の作成とE S Dの学校評価のためのアンケートの作成と実施

ア 各学年の重視する能力・態度の観点と評価規準

本校の総合学習「ふるさと甚目寺」の評価について、今年度より下の表のように評価規準を作成し、重視する能力・態度を評価観点とする児童に育みたい力を文章表記した。

第1学年「みんな、なかよし！」(74時間)				
【ねらい】	○学校や地域を探索する活動を通して、自分と身近な人々、社会、自然とのつながりに気づき、愛着をもつ。 ○栽培活動を通して、身近な植物に興味・関心をもち、植物を通して地域との関わりをもつ。			
【重視する能力・態度】	④コミュニケーションを行う力	⑤他者と協力する態度	⑦進んで参加する態度	
【評価規準】	・学校や校庭の探索では、出会った先生や地域の人に進んで挨拶をすることができる。	・友達と仲良く探索することができる。 ・思いやりの気持ちをもって、友達と協力しながら、栽培活動に取り組むことができる。	・季節の草花の栽培活動を通して、進んで地域や地域の人たちと関わろうとすることができる。	
第2学年「この町大好き！ぼくたち町のたんけんたい」(38時間)				
【ねらい】	○地元のお店街のお店や町の中をたんけんするなどの活動を通して、人と人とのつながりや人と地域とのつながりに気づき、地域への愛着心を育む。 ○野菜の栽培を通して、校外で体験したこととのつながりに気づく。			
【重視する能力・態度】	④コミュニケーションを行う力	⑤他者と協力する態度	⑥つながりを尊重する態度	⑦進んで参加する態度
【評価規準】	・探検先の人に、質問したいことをはっきり伝え、聞き取ったことを簡潔にまとめることができる。	・探検では、グループで協力し、相手の立場を考えて行動することができる。 ・町探検で気づいた町のよさや人々と関わることの楽しさを、グループで助け合って発表することができる。	・季節を通しての町の変化が分かり、自分たちの生活との関わりや自分の町のよさに気づく。	・グループ学習では、進んで自分の意見を出し、最後まで責任をもって取り組むことができる。 ・自分たちの町が良さに気づき、町の催しなどに進んで参加しようとする。
第3学年「人にやさしい町づくり」(38時間)				
【ねらい】	○自分が生活する町の福祉に目を向け、福祉のよさに気づき関わろうとする。 ○様々な体験活動や実践を通して立場の異なるものへの接し方や大切さに気づく。 ○見学や体験を通して、自分ができることを進んで考えて、実践する。			
【重視する能力・態度】	④コミュニケーションを行う力	⑤他者と協力する態度	⑥つながりを尊重する態度	⑦進んで参加する態度
【評価規準】	・施設見学や福祉実践教室で、自分の考えを伝えたり、他者の意見を聞いたりすることができる。	・相手の立場になって考えて行動し、友達と協力して喜び、交流しようとする。	・福祉と自分とのつながりや関わりに関心をもち、進んで学ぼうとする。	・見学や体験を通して、人にやさしい町作りのために、自分ができることは何かを考え実践しようとする。
第4学年「環境にやさしい町づくり」(50時間)				
【ねらい】	○自分の身近な環境や、町の環境に関心をもち、関わろうとする。 ○自然や環境、人がつながっていることを知り、環境に対して自分なりの課題を見つけ活動する。 ○他者の気持ちや考えを尊重することの大切さに気づく。 ○地域の人々との関わりを考え、自分の生活を工夫していく。			
【重視する能力・態度】	③多面的・総合的に考える力	④コミュニケーションを行う力	⑥つながりを尊重する態度	⑦進んで参加する態度
【評価規準】	・自然や環境、人がつながり、関わり合っていることを理解し、課題に対して様々な視点からとらえ、関連付けて考えることができる。	・他の児童と協力して活動し、相手の気持ちや考えを尊重しながら、自分の考えを簡潔に伝えることができる。	・自然や環境、人とのつながりや関わりに関心をもち、それを大切にすることができる。	・環境に関する活動に進んで参加し、よりよい環境にしていけるための方法を考え、実践しようとする。
第5学年「われら産業調査隊」(60時間)				
【ねらい】	○商店・工場・農家などに出かけ、それぞれの仕事を調べることを通して地域の産業を知り、それをまことしく・発信するとともに、働くという人間の営みに対する理解を深め、自分も社会の一員として生きようとする気持ちを育てる。			
【重視する能力・態度】	①批判的に考える力	③多面的・総合的に考える力	⑥つながりを尊重する態度	⑦進んで参加する態度
【評価規準】	・自分達が住んでいる地域の産業を調べることを通して、自分に必要な情報を検討・整理し、考えを深めながら地域の産業について考えることができる。	・自分達が住んでいる地域の産業を調べることを通して、それらを自分・地域・社会など様々な視点からとらえ、関連付けて考えることができる。	・自分達が住んでいる地域の産業を調べることを通して、地域の産業のおかげで、自分の生活があることを実感することができる。	・自分達が住んでいる地域の産業を調べることを通して、地域の産業のために、自分達が貢献できることを進んで考えようとしている。
第6学年「われら歴史・文化調査隊」(70時間)				
【ねらい】	○「ふるさと甚目寺」に残る史跡や伝統芸能などに触れることで、甚目寺の歴史の深さや価値を実感し、郷土への愛着を高める。 ○甚目寺の歴史や文化をより深く知ったことを発表会や地域ボランティア体験を通して発信し、ふるさと甚目寺が、自分にとって大切な郷土だということに気づく。			
【重視する能力・態度】	②未来像を予測して計画を立てる力	③多面的・総合的に考える力	⑥つながりを尊重する態度	⑦進んで参加する態度
【評価規準】	・甚目寺の歴史や文化を知るために、事前に知りたいことをまとめて、計画的に活動のための準備をすることができる。	・甚目寺の歴史や文化が引き継がれていることを理解し、その様々な視点から関連付けて考え、まとめることができる。	・お互いの考えを尊重し合いながら活動することができる。 また、甚目寺の歴史や文化が今の時代に受け継がれていることを感じることができる。	・甚目寺に住む一人として、体験したことを活かして甚目寺のためにできることを考え、実行に移そうと努力することができる。

イ 事前事後アンケート

E S D（総合的な学習時間）事前アンケート

3・4・5・6年 男・女

下の1から3の文を読んで、あてはまるア～エに、○をつけてください。

1 甚目寺をすばらしい町、よい町だと思いますか。

ア 思う イ 少し思う ウ あまり思わない エ 思わない

2 甚目寺を自分の「ふるさと」として、大切にしたいと思いますか。

ア 思う イ 少し思う ウ あまり思わない エ 思わない

3 甚目寺の現在や未来のために、何か考えたり、行動したりしたいと思いますか。

ア 思う イ 少し思う ウ あまり思わない エ 思わない

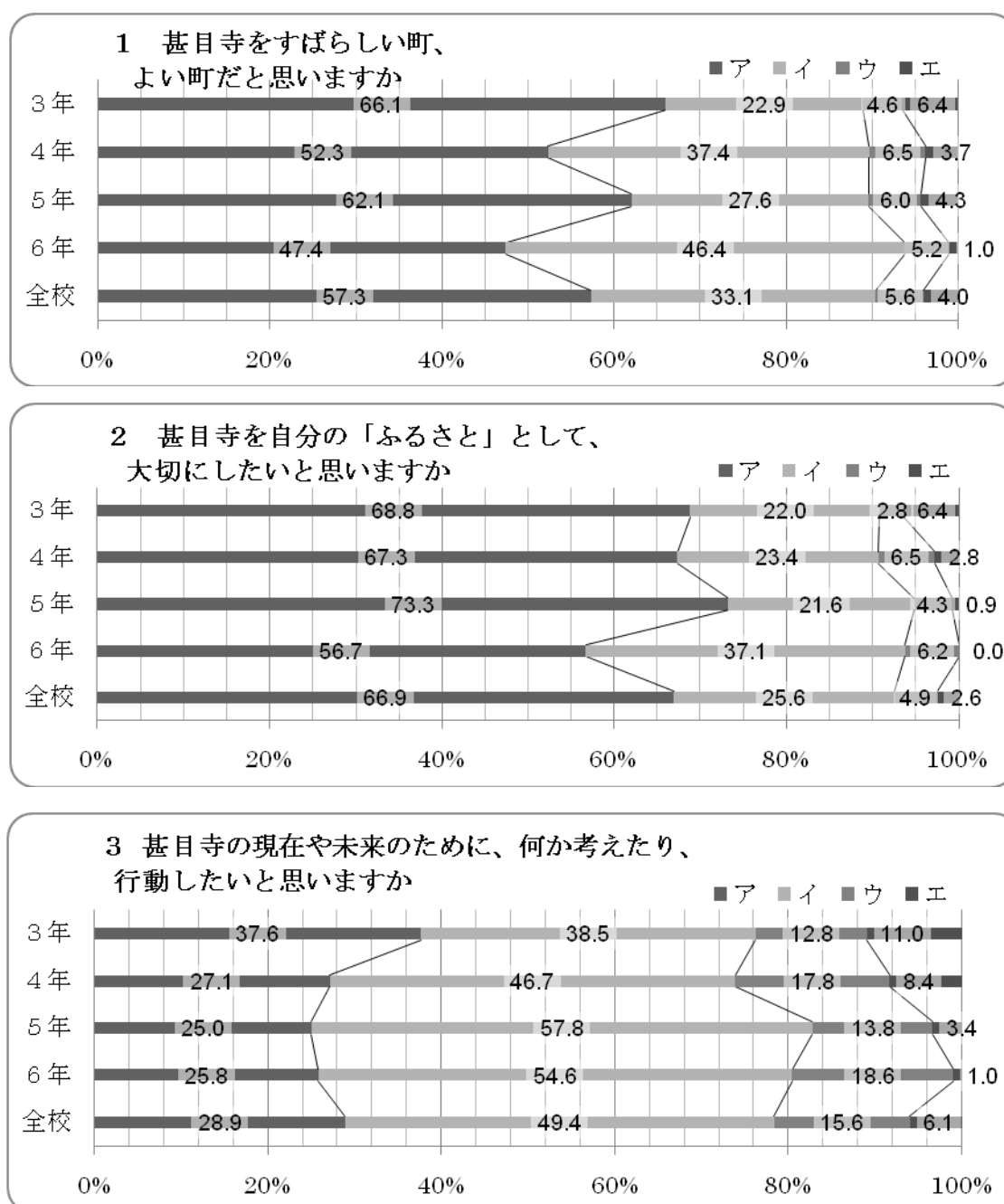
※ 「ふるさと」とは、生まれたり、育ったりした土地と考えてください。

事前アンケートは、本校のE S D活動テーマ「ふるさと甚目寺」と学校全体で重視する能力・態度「⑦進んで参加する態度」を確認したり、評価したりできる内容で作成した。実施学年はアンケートの内容が理解可能と考えられる3年生以上を対象とした。

事後アンケートは、各学年の学習内容が終了したら、事前アンケートの内容に各学年のねらい、

重視する能力・態度を確認したり，評価したりできる内容を付け加えて実施する予定である。

【事前アンケートの結果】



5 各学年の主な実践内容

(1) 第1学年の実践「みんな、なかよし」

ア 「いちねんせいになったよ」・「さあ！みんなでかけよう」・「ぐんぐんのびろ」の取組
 自分のことを学級の友だちや先生に知ってもらうために、「どうぞよろしく」の学習で簡単な自己紹介の練習をし，4月最初の授業公開で友だちや保護者の前で発表会をした。5月には2年生が計画した「なかよくしよう会」で，2年生と名刺交換をしながら自己紹介をした。学校探検では，2年生に校内を案内してもらい，校内で出会った先生たちへのあいさつや各部屋に出入りする時のルールを学んだ。この体験を生かし，1年生だけでの学校探検から校庭探検へと，少しずつ世界を広げてい

くことになった。

6月に入り、学校周りの探検に出かけた。歴史ある古い町並みや商店街、田畑が一面に広がる風景、新しい家やマンションが建ち並び、国道や高速道路が通っている様子を見て、自分たちが住んでいるところが変化に富んだ「特色のある地域」であることを理解できた。振り返りカードには、「歴史がある甚目寺に住んでいてうれしいです」と感想を書く児童もいた。

7月には「えがおのアサガオ」運動として、児童が育てているアサガオの一部をプランターへ植え替えて、甚目寺駅や甚目寺観音、甚目寺会館に飾っていただいた。1年生ができる地域との関わりを考え、アサガオを飾ることで地域の人が笑顔になってくれたらと、取り組んだ。



アサガオをもってきました

イ 今後の取組

校区探検の時、「トイレ休憩」でお世話になった保育園を再度訪問し、年長児対象に「小学校の生活」を知らせる紙芝居を行う。また、「えがおのアサガオ」運動に引き続き、季節ごとの花をプランターに植え替えて、地域へ届ける。伝承遊びのゲストティーチャーとして、地域の人（シルバーボランティア）を招く予定である。

(2) 第2学年の実践「この町大好き！ぼくたち町のたんけんたい」

ア「レッツゴー！町たんけん」の取組

昔から甚目寺観音の東にある商店街や甚目寺駅周辺を、どんな店があるか、店ごとの違いや置いてある品物の種類などをみんなで見て回った。お店の人から「今年も探検に来てね」と声をかけられ、「ぼく、〇〇のお店に行きたい」とグループ探検への意欲をもつことができた。

グループ別に、行きたい店や聞きたいことなどを話し合った。事前に、あいさつなど場に応じた行動や人への接し方、質問の仕方を練習した。探検では、質問をすることによって店の人と話をしたり、肥料屋では一輪車を使って肥料を運ぶ体験をしたりして、十分に交流を図ることができた。また、保護者の付き添いボランティアに多くの協力が得られ、24のグループに一人ずつ付き添って進めることができた。そのため、聞き取りが的確にでき、子どもたちの新しい発見も多かった。

探検の後、親切にしてもらった店の人にお礼の手紙を書いた。それを、探検したグループごとに届けた。店の人がその場で封筒を開いて手紙を読み上げ、「この手紙を書いてくれたのは君か、ありがとう」と直接声をかけてもらって感激していた。

イ 今後の取組

秋・冬の町探検では、季節の移り変わりを感じたり、公共施設を見に行ったりする。そして、町探検をふり返って、発表会をする。また、町の施設や商店街のすてきなところをポスターに描いて、それを掲示してもらい宣伝する予定である。

(3) 第3学年の実践「人にやさしい町づくり」

ア「福祉ってなんだろ」・「福祉ボランティアについて学ぼう」の取組

「福祉」を知るためにワークシートを使って考えを書き込み、話し合いを行ったり、総合福祉会館を見学したりした。詩「世界に一つだけの花」や「わたしと小鳥とすずと」を使って心に残ったことを書いたり、どうして違っているのかを話し合ったりした。総合福祉会館の見学では、お年寄りや体の不自由な人のためにいろいろな工夫がされていることを発見した。これらのことから、一人一人に

違いがあり、その違いを認め合うことが大切なのだとことを知った。また、「福祉」ということを知らなかった児童も、「みんなが幸せになることが福祉なんだ」と理解することができた。

福祉実践教室では、「車いす」「手話」「点字」体験を行った。うまくやれるだろうと思って取り組んだ車いす体験では、「自分の手で動かすことも大変だったけれど、段差をうまく押してあげるのも難しかった」という声が聞かれた。手話では、手でやるだけでなく、口形でも意味が伝わるので声に出してやることや目を見てやるのが大切なことを知った。体験を終えた児童は、「練習をして、耳の聞こえない人と話をしてみたい」という感想を書いていた。点字では、指先を使うことに慣れないこともあるが、「読むのは難しい」「全然分からない」というのが、最初の感想であった。しかし、点字を打つことになると、「点だけで意味が分かるの、すごいね」と興味をもって取り組むことができた。



車いす体験

イ 今後の取組

地域の中のバリアフリー化の状態を調べて、「こんな所にこんな工夫がされているんだ」ということを知って、その後「こんな所には、こんな工夫があればいいなあ」ということを考え、発表する。またデイサービスセンターへ行き、お年寄りと交流を図る。相手の立場になって、楽しんでもらえるように自分たちにできることを考えて訪問する。

(4) 第4学年の実践「環境にやさしい町づくり」

ア 「生活を見つめ直そう！ごみ・水調査隊」・「ストップ温暖化！甚小グリーンカーテン」の取組

社会科のごみ調べ、水調べをもとにした学習と、理科でのヘチマの栽培をもとに、学習を深めた。ごみの学習では、地域のごみ処理工場である五条川工場を見学し、ごみの処理だけでなく、さらにごみをリサイクルする方法や、環境を大切にしたい工場の仕組みについて学んだ。また、水調べでは、下水処理場の方を講師に招き、下水処理場の仕組みについて学んだ。



下水道の学習会

一方、ヘチマの栽培をもとにした学習では、ヘチマを観察していく中で、「グリーンカーテンになるかもしれないよ」という子どもたちの声も聞かれた。そこで、グリーンカーテンでよく使われるゴーヤを用いて、グリーンカーテンづくりを行うこととした。グリーンカーテンをつくることでどんな効果があるのかを詳しく知るために、環境共生住宅に詳しい方を講師に招き、学習会を行った。学習会後にネットを2階から張ってグリーンカーテンづくりを行った。日々の観察の中で虫たちがゴーヤの花に寄ってくることに興味をもつ子どもたちも出てきた。



環境共生住宅の学習会

イ 今後の取組

学校で毎月行っているアルミ缶・ペットボトルキャップ回収や、地域の河川の水質、グリーンカーテンでの温暖化防止への効果をまとめながら、地域とのつながりをエコ活動のちらしづくりや環境家計簿にチャレンジしていくことでつくっていく。

(5) 第5学年の実践「われら産業調査隊」

ア 「甚目寺の伝統産業を知ろう」「甚目寺の産業を知ろう」の取組

甚目寺の伝統産業である刷毛について、刷毛組合の方に出前授業をしていただいた。刷毛産業が外国製品の台頭により厳しい状況にあること、甚目寺の刷毛は日本を代表する漆職人や寿司職人などの名工たちの仕事を支えていることも教えていただいた。



菓子屋を取材

刷毛産業を学んだ後、甚目寺の主な産業について、あま市役所の方に出前授業をしていただいた。そして、地元企業の工場、商店街の商店、JAや甚目寺特産の小松菜を栽培する農家に取材に出かけた。取材活動を通して、児童は、見て、感じて、関わるという貴重な体験をするとともに、働く方の苦労や喜びを肌で感じ取ることができた。

イ 今後の取組

今後は、甚目寺の産業について学んだことをまとめることを通して、人や地域とのつながりに気付かせ、ふるさと甚目寺への愛着心を育むことを考えている。甚目寺観音で定期的に行われている「手づくり朝市」に出店し、甚目寺特産の「方領大根」や「小松菜」の販売を予定している。

(5) 第6学年の実践「われら歴史・文化調査隊」

ア 「見て、聞いて、触れて、甚目寺① ～甚目寺の歴史・文化を知ろう～」の取組

出前授業で甚目寺の史実、遺跡、偉人についての概略を学び、歴史・文化学習への導入を図った。2回目の出前授業では、古墳時代から飛鳥時代の遺跡について学んだ。S字甕かめといわれる台つき甕かめが日本最古の炊飯器だったことを知ったり、須恵器に触れたりすることで、甚目寺周辺の遺跡についてより興味をもったりすることができた。



甚目寺説教源氏節を体験

人形芝居サークル「もくもく座」による、伝統芸能「甚目寺説教源氏節」を鑑賞した。公演終了後、人形や三味線を実際に触らせてもらったりした。また、現在源氏節の形をとどめているのは全国で2カ所しかないということ学んだ。

市内に残る伝統工芸「七宝焼」を体験した。甚目寺観音に写生に行き、その絵をもとに、一人10cmの正方形のパーツを集めて一枚の絵に仕上げた。



七宝焼

ふるさとの歴史・文化について学習をより深めるために、「甚目寺観音」・「萱津神社・香の物祭り」・「鎌倉街道沿いのお寺」・「遺跡」・「ハンセン病と小笠原博士」・「甚目寺説教源氏節」の中からテーマを一つ選択し、夏休みに取材を行った。

イ 今後の取組

郷土資料を活用したり、史跡を訪れたりして調べた内容を、見る人に甚目寺のよさが伝わるように工夫して発表する。また、より多くの人に知ってもらうために、学んだことを生かしてパンフレットやポスター作りを行っていく。

地域清掃や甚目寺観音の伝統行事に進んで参加するなど、地域と積極性に関わる活動を行っていく。そして、このような活動の中で、地域の歴史の深さや価値を実感し、「ふるさと甚目寺」を大切に思う気持ちを深めさせたいと考えている。

6 研究の成果と課題

今年度、学校全体でE S Dの研究に取り組めるように体制を整え、教職員のE S Dへの理解がさらに深まり、実践内容が充実してきた。単発の学習や活動ではなく、学んだことを踏まえて、地域を見つめ直すことで、自分の考えや意見をもち、進んで地域や地域の人と「かかわり」、思いや考えを「つたえよう」とし、自分のふるさととしてこの地域を「つなげていこう」とする児童が多くなった。

(1) 「ふるさと 甚目寺」をテーマに、「かかわる、つたえる、つなげる」をキーワードとした取組の成果

「かかわる、つたえる、つなげる」という本校のE S Dの取組に関するキーワードについて、次のように考えている。「かかわる」とは、児童や学校が一方的に地域や地域の人と関わったり、関わってもらっている状態であり、「つたえる」とは、関わりから児童が学んだこと、学校が知らせたいことを地域や地域の人に伝えたり、情報発信したりすることである。そして、「つなげる」とは「かかわる」や「つたえる」ことにより、一方的でない双方向的な関係ができることである。P.31 資料「平成 23・24 年度E S Dの取組による人や地域との関係の広がり」は、本校の2年間の取組で、地域や地域の人との関係がどこまで広がったかを示すもので、E S Dに取り組む以前より確実に地域や地域の人とのつながりが広がってきた。

(2) 新年間指導計画づくり、重視する能力・態度を観点とした評価規準の作成とその成果

平成 23 年度は、指導計画として年間指導計画とE S D関連指導計画の2つを作成していた。今年度はこれらを1本化し、さらに重視する能力・態度の観点と評価規準を含めた新しい年間指導計画をつくった。E S Dカレンダーを補完するものとして、これからも十分活用できるものになった。また、重視する能力・態度の中で、特に育みたい力を学校全体や児童の発達段階に合わせ、低学年、高学年で設定し、評価規準を作成したことは、指導のポイントがより明確になった。

(3) E S Dの学校評価のためのアンケートの結果より

今回の調査で、事前アンケートを実施した結果、ふるさと甚目寺をすばらしい町、よい町だと思い、大切にしていきたいと思っている子どもが多い一方、何か考えたり、行動したりしたいと思う子どもが比較的少ないという、本校の子どもの実態が分かった。重視する能力・態度で学校全体として特に育みたい力を「⑦進んで参加する態度」とした理由は、ここにある。今後も毎年度、事前事後のアンケートを続け、アンケート結果も踏まえた次年度のE S Dへの取組の改善につなげていきたい。

(4) 課題とおわりに

E S Dの取組はまだ発展の途上であり、これからも地域の中にE S Dに取り組む教材を見つける努力が必要である。学年によっては、学習・活動内容から地域や地域の人とつながる教材を見つけることが難しい場合がある（内容的に1, 3, 4年生）。子どもの考えや意見、地域の人々の願いを聞きながら、学習活動の展開例を作っていきたい。今後、年間を通した取組が、アンケート結果にどのように出てくるか、変容の様子を分析し、E S Dカレンダー・年間指導計画・授業づくりの改善に生かしていく必要がある。また、小学校6年間を通して、本校が重視している「進んで参加する児童」をどのように育てていくか、学校全体で取り組み、年度ごとでゼロからスタートするのではなく、培った力を積み上げていけるようにすることが大事であると考えます。

本校は、E S Dの推進拠点である「ユネスコスクール」に10月初旬に申請した。加盟までは、もう少しばかり時間がかかるが、E S Dの取組がユネスコスクールの加盟によってさらに充実したものになっていくようにしたい。

※参考文献

- 1) 「持続発展教育」文部科学省ユネスコ国内委員会 <http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm>

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
教科・道徳	(国語) どうぞよろしく (図工) すきなものをあに (音楽) うたでなかよしになろう (道徳) ①思いやり・親切 ②生命の尊重 ③向上心 個性の伸長 わたしのあさがお せみがうまれたよ しらせたいなみせたいな どうぶつさんだいすき なにになるのかな どんぐりさんのおうち くりのき かるたをつくらう いのちのいれもの おみせやさんごっこしよう ふしぎだな いいこといっぱい1年生 そろそろはるですよ											
生活・総合	テーマについて かんがえよう 1ねんせいりになったよ さあ みんなでかけよう なつがきたよ げんきにそだて みんなみんな大すきだよ 発表会 でんしょうあそび ほいくえんにほうもん みんななかよし あきって気持ちがいいね わくわくふゆがやってきた たのしかったね1年かん ぐんぐんのびろ(あさがお) ぐんぐんのびろ(あきのしよくぶつ)											
特別活動	(異学年) なかよくしよう会 いきものランドの見学 運動会五入れ表現運動 (ペア学年) なかよし給食 なかよしプール 歌声集会 (児童会) 1年生を迎える会 基小まつり 縄リビック 6年生を送る会 基小なかよし宣言 アルミ缶・ペットボトルキャップ集め											

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「みんな、なかよし！」(74時間)											
【ねらい】	○学校や地域を探索する活動を通して、自分と身近な人々、社会、自然とのつながりに気づき、愛着をもつ。 ○栽培活動を通して、身近な植物に興味・関心をもち、植物を通して地域との関わりをもつ。										
【構成概念】	Ⅰ 多様性 Ⅱ 相互性 Ⅳ 公平性 V 連携性										
【重視する能力・態度】	④コミュニケーションを行う力			⑤他者と協力する態度				⑦進んで参加する態度			
【評価規準】	・学校や校区の探索では、出会った先生や地域の人に進んで挨拶をすることができる。			・友達と仲良く探索することができる。 ・思いやりの気持ちをもって、友達と協力しながら、栽培活動に取り組むことができる。				・季節の花の栽培活動を通して、進んで地域や地域の人たちと関わろうとすることができる。			
単元名「いちねんせいになったよ」(15時間)			単元名「さあ！ みんなででかけよう」(8時間)			単元名「あきって気持ちがいいね」(16時間)			単元名「たのしかったね1年かん」(13時間)		
【ねらい】 ・学校という新しい環境のなかで、身近な人やものに積極的にかかわり、安全で楽しく過ごすことができる。 【学習活動】 ①がっこうのいちにちをしりたいな(2時間) ・1年生になった喜びや期待を話し合う。 ②ともだちをいっしょにつくらう！(2時間) ・自己紹介したり、ゲームをしたりする。 ③がっこうにはなにがあるのかな(2時間) ・2年生と学校探索をする。 ④がこうたんけんしゅっぱつ(3時間) ・自分たちだけで学校探索をする。 ⑤どんなはつけんがあったかな(1時間) ・見つけたことを話し合う。 ⑥わたしたちはつけんをしようか(3時間) 【地域人材・関係機関】			【ねらい】 ・安全に気をつけて、地域へ出かけに行き、みんなで探検しながら、人や自然と触れ合うことができる。また、春の季節を感じるすることができる。 【学習活動】 ①がっこうのまわりをたんけんしよう(6時間) ・探検の計画を立てる。 ②みんなの西コースを探索する。 ・学校の東コースを探索する。 ③たのしかったことをつたえよう(2時間) 【地域人材・関係機関】 ①商店街 ②基目寺駅 ③基目寺観音 ④聖徳保育園			【ねらい】 ・遊び場や野原などで散歩したり遊んだりするなかで、季節が秋に変化してきたことに気付くとともに、葉や実などの自然物を使ってみんなで楽しく遊ぶことができる。 【学習活動】 ①どんなあきが見つかるかな(2時間) ・秋探しの計画を立てる。 ②みんなであそぼう(6時間) ・秋を探したり、遊んだりする。 ③あきをたのしもう(2時間) ・自然物を利用した遊び道具などを使って秋を楽しむ。 ④見つけたあきをつたえあおう(2時間) ・五感を通して見つけた季節の変化を発表し合う。 ⑤こんなあき見つけたよ つくったよ(4時間) ・今までの作品を使って、基小タイム発表会を楽しむ。 【地域人材・関係機関】 ①東山動物園②基目寺観音			【ねらい】 ・この1年間に様々な思い出ができたことや、自分や友だちがともに成長したことに気づき、進級する喜びや希望をもつことができる。 【学習活動】 ①おもいだしてみよう(3時間) ・1年間をふり振り返り、紙芝居を作る。 ②いっしょにできるようになったね(2時間) ・自分たちが成長したことを確かめる。 ③あたらしい1年生がやってくるよ(6時間) ・新1年生を迎える準備をする。 ・紙芝居をもって、保育園を訪問する。 ④さあもうすぐ2年生だ！(2時間) ・春をさがそう 【地域人材・関係機関】 ①聖徳保育園		
単元名「わくわくふゆがやってきた」(10時間)											
単元名「ぐんぐんのびろ！(花栽培)」(12時間)											
【ねらい】 ・身近な植物に興味・関心をもち、それらに生命があることに気付くとともに、植物を大切にすることができるようになる。											
【学習活動】 ①ぐんぐんのびろ(4時間) ・種を観察する。 ・アサガオの種まきをする。 ・成長の様子を観察する。 ・地域に育てた花を贈る。 【地域人材・関係機関】 ①基目寺駅 ②基目寺会館 ③基目寺観音						【学習活動】 ②ぐんぐんのびろ(8時間) ・アサガオの種を収穫して、利用の仕方を考える。 ・チューリップの球根を観察し、植える。 ・ハンジの苗を植える。 ・地域に育てた花を贈る。 ・自分との関わりを振り返る。 【地域人材・関係機関】 ①基目寺駅 ②基目寺会館 ③基目寺観音					

平成24年度ESDカレンダー

第 2 学 年

あま市立基目寺小学校

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
教科・道徳 (国語) (音楽)(図工) (道徳) ①思いやり・親切 ②生命の尊重 ③向上心 個性の伸長	今週の ニュース	かんさつ名人 になろう	スイミー	うれしい ことば			お手紙	友だちのこ と知りたいな	わたしは おねえさん	みんなで 決めよう	スーホの 白い馬	たのしかったよ 二年生
	メッセージ							リースをつくらう				
		ぼくは 二年生	あじさい の町	森の ともだち		ぼくのたん じょう日	おばあさん ができたよ	たいふう のよる		白いつ		小人と 青虫
生活・総合	テーマにつ いてかんが えよう	この町大すき！ぼくたち町のたんけんたい										みんな大きく なったよね
		レッツゴー！町たんけん	もっとしりたいな！町のこと						こんなすてきな町なんだ！			
	ともだちいっぱい なかよくしようね								発表会			
			ぐんぐんのびろ 野菜①	げんきにそだて	ぐんぐんのびろ 野菜②				ぐんぐんのびろ 野菜③			
特別活動 (学級) (異学年) (ペア学年) (児童会)	あいさつ名人 になろう	あいさつ名人に なろう(バージョン アップ)	どうぞ！ ありがとう！		上手な ごめんなさい		めざせ！ マナー名人！	まきもどして、 ドンマイ		ナイスフォロー		
	なかよく しよう会 (1年)		生き物ランド (1年)		運動会 玉入れ、表現運動 (1年)		生活科発表会 (1年)					
			なかよし給食	コリントゲーム で遊ぼう		ドッジボールを しよう		歌声集会				
	1年生を 迎える会		基小まつり							縄跳びピック	6年生 を送る会	
	基小なかよし宣言 アルミ缶・ペットボトルキャップ集め											

生 活 科

第 2 学年指導計画

あま市立基目寺小学校

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
「この町大すき！ぼくたち町のたんけんたい」(38時間)																	
【ねらい】	○地域の商店街のお店や町の中を探索し、町の自然、人々、社会、公共物などに関心をもつ。 ○町の人と触れ合うことによって、人と人とのつながりや地域とのつながりに気づき、地域への親しみや愛着をもつ。																
【構成概念】	Ⅰ 多様性 Ⅱ 相互性 Ⅴ 連携性																
【重視する能力・態度】	④コミュニケーションを行う力			⑤他者と協力する態度			⑥つながりを尊重する態度			⑦進んで参加する態度							
【評価規準】	・探検先の人々に、質問したいことをはっきり伝え、聞き取ったことを簡潔にまとめることができる。			・探検では、グループで協力し、相手の立場を考えて行動することができる。 ・町探検で気づいた町のよさや人々とかかわることの楽しさを、グループで助け合って発表することができる。			・季節を通しての町の変化が分かり、自分たちの生活との関わりや自分たちの町のよさに気付く。			・グループ学習では、進んで自分の意見を出し、最後まで責任をもって取り組むことができる。 ・自分たちの町のよさに気づき、町の催しなどに進んで参加しようとする。							
単元名「レッツゴー！町たんけん」(16時間)				単元名「もっとしりたいな！町のこと」(10時間)				単元名「こんなすてきな町なんだ！」(12時間)									
【ねらい】 ・自分たちの住む町を探索し、町の自然、地域で生活したり働いたりしている人々、商店街などに関心をもち、愛着をもつことができる。 【学習活動】 ①さあ！作戦会議(3時間) ・町の中で行きたいところを話し合う。 ②町をたんけんしよう(8時間) ・校区を歩いて春を見つけながら、探検したい場所をさがす。 ・探検したい場所を発表する。 ・探検場所の商店街のお店を話し合いで決める。 ・商店街のお店を探索する。 ③町たんけんのまとめしよう(5時間) ・商店街のお店についてまとめる。 ・お礼の手紙をどける。 【地域人材・関係機関】 ①商店街 ②駅 ③新聞屋 ④保護者				【ねらい】 ・秋の町の自然や人々、社会・公共施設に関心をもち、調べたり、体験したり、関わったりする活動を通して、町のよさやここに住む人々の温かさに気づき、新たな親しみや愛着をもつことができる。 【学習活動】 ①町の中でもっと知りたい場所を話し合う(2時間) ②町の公共施設を知らう(2時間) ・給食センターを見学する。 ・中央公民館、福祉センター、総合体育館へ行く。 ③秋を見つけに行こう(2時間) ・ブロードを歩きながら、秋を見つける。 ・町の人に聞いてみる。 ④まとめしよう(4時間) 【地域人材・関係機関】 ①商店街 ②公共施設 ③ブロード				【ねらい】 ・町の施設や商店街のすてきなところを発表したり、PR活動をしたりすることを通して、自分たちの町のよさに改めて気づき、町への愛着を広げたり深めたりすることができる。 【学習活動】 ①「レッツゴー！町たんけん」と「もっとしりたいな！町のこと」の活動をふり返ってみよう(2時間) ②商店街のお店のPRポスターをつくらう(3時間) ③発表会しよう(7時間) ・発表のしかたを考え、準備する。 ・発表の練習をする。 ・発表会を開く。 【地域人材・関係機関】 ①商店街 ②保護者				【ねらい】 ・これまでの成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち、これから自信をもって意欲的に生活できるようにする。 【学習活動】 ①できるようになったことを教えよう(2時間) ②自分たんけんしゅっぱつしよう(4時間) ・小さい頃のことを知る方法を話し合う。 ・小さい頃のことを調べる。 ・家の人にインタビュー、写真、思い出の品 ③自分ものがたりをまとめよう(4時間) ・自分の記録をワークシートにまとめ、本にする。 ・できた本を、みんなで読み合う。 ④おれいの気もちをつたえよう(3時間) ・お世話になった人々たちへの感謝の会を計画する。 ・お礼の会をする。 ⑤あしたにむかってすんでいこう(1時間) 【地域人材・関係機関】 ①保護者					
単元名「ぐんぐんのびろ！」「げんきにそだて」(28時間)																	
【ねらい】 ○身近な植物や生き物を栽培したり飼ったりしながら、その成長の様子に関心と親しみをもつ。 ○植物や生き物も自分たちと同じように生命をもっていることに気づき、大切にしようとする。																	
【学習活動】 ①生きものたんけんに しゅっぱつだ！(3時間) ②もっと知りたいな、かってみたい(3時間) ③いのちを見つけたよ(1時間) ・獣医さんと一緒にウサギとふれ合う。 ④教えてあげたいわ(4時間) ・生きものランドに、1年生を招待しよう 【地域人材・関係機関】 ①愛知獣医師会						【学習活動】 ①どんな夏野菜を育てよう？(2時間) ②名人に教えてもらおう(1時間) ③いろいろな夏野菜を育てよう(2時間) ④大きくなったお(3時間) ⑤さつまいもパーティーしよう(4時間) 【地域人材・関係機関】 ①豊かな食と農の伝導者						【学習活動】 ①冬でも育つ野菜があるんだ(2時間) ・農の伝導者に聞く。 ②いろいろな冬野菜を育てよう(2時間) ③基目寺の特産野菜について知ろう(1時間) 【地域人材・関係機関】 ①豊かな食と農の伝導者					

平成24年度ESDカレンダー

第3学年

あま市立基目寺小学校

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
教科・道徳	(国語) (社会) (体育) (道徳) ①思いやり・親切 ②生命の尊重 ③向上心 ④個性の伸長											
生活・総合	人によさしい町づくり お年寄りから学ぼう① 自分たちができることをしよう 発表会 お年寄りから学ぼう②											
特別活動	(異学年) (ペア学年) (児童会)											

総合的な学習の時間

第3学年指導計画

あま市立基目寺小学校

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「人によさしい町づくり」(38時間) 【ねらい】 ○自分が生活する町の福祉に目を向け、福祉のよさに気付く関わりとする。 ○様々な体験活動や実践を通して立場の異なるものへの接し方や大切に気付く。 ○見学や体験を通して、自分ができることを進んで考えて、実践する。 【構成概念】 Ⅱ 相互性 Ⅳ 公平性 Ⅴ 連携性 Ⅵ 責任制 【重視する能力・態度】 ④コミュニケーションを行う力 【評価規準】 ・施設見学や福祉実践教室で、自分の考えを伝えたり、他者の意見を聞いたりすることができる。												
単元名「福祉ってなんだろう」(20時間) 【ねらい】 自分が生活する身近な地域の人々との関わりに関心を向け、主な公共施設などの場所と働きなどを観察・調査し、地域のよさに気付く、愛着をもつ。 【学習活動】 ①施設の見学に出かけたとき、出会った人に挨拶をしたり、話しかけたりする。 ②見学から、施設設備や工夫について、気付いたことを話し合う。 ③ワークシートを使って、福祉について話し合う。 ④パンフレットを使って、総合福祉会館、公民館の見学で調べたことを、みんなに知らせたいことを中心にガイドマップにまとめる。 ⑤施設見学をまとめたガイドマップを使って、学年・クラスで発表する。 ⑥お年寄りから、語り「基目寺カッポレ」を教えてもらい、運動会できいしよに語る。 ⑦教えてもらった、施設の人やお年寄りにお礼の手紙を書く。 【地域人材・関係機関】 総合福祉会館、総合体育館、公民館(職員の方々)												
単元名「福祉ボランティアについて学ぼう～福祉実践教室」(6時間) 【ねらい】 車椅子、手話、点字などの体験を通して、福祉に対する興味、関心をもつ。 【学習活動】 ①車椅子、手話、点字など福祉に携わる人々の役割や仕事について知る。 ②テーマについて、福祉実践教室で体験学習する。 ③それぞれの体験や体が不自由な人についての質問を考える。 ④福祉実践教室で学んだことを、ノートなどにまとめ、今後の学習の資料にする。 ⑤異なる体験学習をした友達と情報交換をする。 ⑥体験学習で学んだことを友達同士で練習する。 ⑦福祉実践教室の講師にお礼の手紙を書く。 【地域人材・関係機関】 福祉実践教室講師												
単元名「自分たちができることをしよう」(24時間) 【ねらい】 福祉に関連した公共施設、福祉に携わる人々の役割や仕事を知ったり、車椅子、手話、点字などの体験をしたりして学んだことを生かして、自分たちができることを実践しようとする。 【学習活動】 ①体験したり、学んだことから自分の学習テーマを見つける。 ②福祉実践教室で学んだことをもとに本やインターネットなどの資料を用いて調べ学習を進める。 ③自分たちの身の周りのバリアフリーについて調べる。 ④調べたことを、模造紙や原稿用紙にまとめる。 ⑤調べたことをポスターセッションや劇化したもの、ペープサートなどに仕上げ、基小タイム発表会で発表する。 ⑥体験や調べたことをもとに、デイサービスセンターを訪ね、お年寄りや体が不自由な方々と交流をもつ。 【地域人材・関係機関】 デイサービスセンター												
単元名「お年寄りから学ぼう」(8時間) 【ねらい】 昔の道具や、それらを使っていたころのくらしの様子を調べ、体験活動を通して過去の生活における人々の知恵や工夫、知育の人々の生活の変化に関心をもつ。 昔使った道具や遊びや学校生活について、お年寄りにインタビューをする。 【学習活動】 ①ゲストティーチャーを招いて、昔の生活について話を聞く。 ②インタビューやゲストティーチャーから聞いたことをもとに、昔使った道具・遊び・学校生活について、インターネットや図書館で詳しく調べる。 ③グループごとに調べたことをくらしの変化が分かるように、新聞や模造紙にまとめ、クラス、学年・保護者への発表の準備をする。 ④グループごとに、昔使った道具・遊び・学校生活について調べたことを発表する。 ⑤学習を通して、ものを大切にしたり、家族のつながりを大切にできたことを感じ、今のくらしを見つめなおす。 【地域人材・関係機関】 ゲストティーチャー												

平成24年度ESDカレンダー												第 4 学 年		あま市立基目寺小学校	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
教科・道徳															
	(国語)	調べたことを報告 する文章を書こう													
	(社会)	健康なくらしをささえる ごみのしよりと活用 くらしと水													
	(理科)	あたたかくなると 暑くなると ずすしくなると 寒くなると													
	(体育)	民ようを おどろう													
(道徳・人権)	①思いやり・親切 ②生命の尊重 ③向上心 個性の伸長	落ちていた きつぷ	力持ちの 新助さん			エンカウンター	ヒキガエル とロバ		心の花たば	カンボジアの 子どもたちへ	もしもあのとき				
生活・総合	環境にやさしい町づくり														
	テーマについて 考え、活動を決 めよう	生活を見つめ直そう！ゴミ・水調査隊 ストップ温暖化！基小グリーンカーテン 環境にやさしい町！ 基目寺エコチャレンジヤー！													
特別活動	(異学年)	運動会 表現運動													
	(ペア学年)	なかよしレー ボール大会 仲良し 給食 コリトケム 大会 トッパ 大会 歌声集会													
(児童会)	1年生を 迎える会	基小まつり									縄ワビク	6年生を 送る会			
基小なかよし宣言 アルミ缶・ペットボトルキャップ集め															

総合的な学習の時間												第 4 学 年 指 導 計 画		あま市立基目寺小学校					
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月								
「環境にやさしい町づくり」(50時間)																			
【ねらい】	○自分の身近な環境や、町の環境に関心をもち、関わろうとする。 ○自然や環境、人がつながっていることを知り、環境に対して自分なりの課題を見付け活動する。 ○他者の気持ちや考えを尊重することの大切さに気づき、自分の考えを伝える。 ○地域の人々との関わりを考え、自分の生活を工夫していく。																		
【構成概念】	Ⅱ 相互性 Ⅲ 有限性 V 連携性 VI 責任性																		
【重視する能力・態度】	③多面的、総合的に考える力				④コミュニケーションを行う力				⑥つながりを尊重する態度				⑦進んで参加する態度						
【評価規準】	・自然や環境、人がつながり、関わり合っていることを理解し、課題に対して様々な視点からとらえ、関連付けて考えることができる。				・他の児童と協力して活動し、相手の気持ちや考えを尊重しながら、自分の考えを簡潔に伝えることができる。				・自然や環境、人とのつながり・関わりに関心をもち、それらに大切にすることができる。				・環境に関する活動に進んで参加し、よりよい環境にしていけるための方法を考え、実践しようとする。						
単元名「生活を見つめ直そう！ゴミ・水調査隊」 (15時間)					単元名「ストップ温暖化！基小グリーンカーテン」 (15時間)					単元名「環境にやさしい町・ 基目寺エコチャレンジヤー！」(20時間)					単元名「1/2成人式をしよう」(10時間)				
【ねらい】 ・ごみ問題について考え、ごみを減量するために自分たちにできることを考え実践する。水問題について考え、水を大切にしていけるために自分たちができることを考え実践する。 下水道出前講座に参加し、下水道の仕組みや役割に対する理解を深め、日常生活をとりまく水環境をより身近に感じ、水の大切さ、汚れを減らす工夫について学ぶ。 【学習活動】 ①ゴミ調べをしよう(3時間) ・家庭から出るごみの量や種類を調べよう。 ②ごみ新聞をまとめよう(4時間) ・五条川工場の見学で分かったことをまとめよう。 ③水調べをしよう(3時間) ・家や学校での水の使われ方について調べよう。 ④下水道について調べよう(5時間) ・下水道出前授業に参加して、下水道の仕組みを知ろう。 ・分かったことをまとめよう。 【地域人材・関係機関】 ①五条川工場 ②大治浄水場 ③愛知県建設部下水道課					【ねらい】 ・グリーンカーテンの出前授業に参加し、グリーンカーテンに対する理解を深め、進んで取り組んでみようとする気持ちを高める。 【学習活動】 ①グリーンカーテンって何？(3時間) ・グリーンカーテンについて調べよう。 ②グリーンカーテンの準備をしよう。(4時間) ・苗の植え方 ・苗の種類 ・必要なものや育て方 ③苗を植えよう。(2時間) ・ゴーヤ、ヘチマ、夏ツタ ④専門家の方に話を聞こう(2時間) ・育て方、グリーンカーテンの意義 ⑤世話をしよう(1時間) ⑥グリーンカーテンの効果について(3時間) ・気温の測定 ・地域への呼びかけ 話し合い活動 【地域人材・関係機関】 ①農協 ②グリーンカーテン専門家					【ねらい】 ・身の回りの環境に関心をもち、それぞれが課題をもつ。自分たちの住む基目寺地区の自然環境、社会環境を知り、環境をよりよいものにしていく気持ちを高める。 【学習活動】 ①テーマを決めよう(2時間) ・これまでの学習を振り返って、追究する内容を決め、計画を立てよう。 ②調べよう、実践しよう(5時間) ・自分のテーマに合わせて、さらに調べたり、実践したりする。 ③発表会の準備をしよう(5時間) ・調べたことをどのように発表するとよいと考え、発表の準備を行う。 ④発表会をし、意見を交流させよう(3時間) ・お互いの研究を見比べ、意見や考えを交流させよう。 ⑤地域の方々伝えよう。(5時間) ・地域の方々伝える準備をし、研究の成果を発表する。 【地域人材・関係機関】 河川環境美園、保護者、異学年、これまでにお世話になった講師野方や関係機関					【ねらい】 ・今までの自分の成長の様子を調べたり、将来の夢を考えたりする活動を通して、保護者への気持ちや前向きに生きていく意欲を高めていく。 【学習活動】 ①自分の小さい頃の様子を調べよう。(2時間) ・保護者、保育園・幼稚園の先生にインタビューをして、自分の成長の様子を調べよう。 ②ドリームマップを作る(4時間) ・ドリームマップをつくる。 ・調べたことをもとに、自分史を作ったり、1/2成人式に向けて発表の準備を行ったりする。 ③1/2成人式 ・保護者を招待して、自分の夢や感謝の気持ちを伝える。 【地域人材・関係機関】 ドリームマップ講師、保護者				

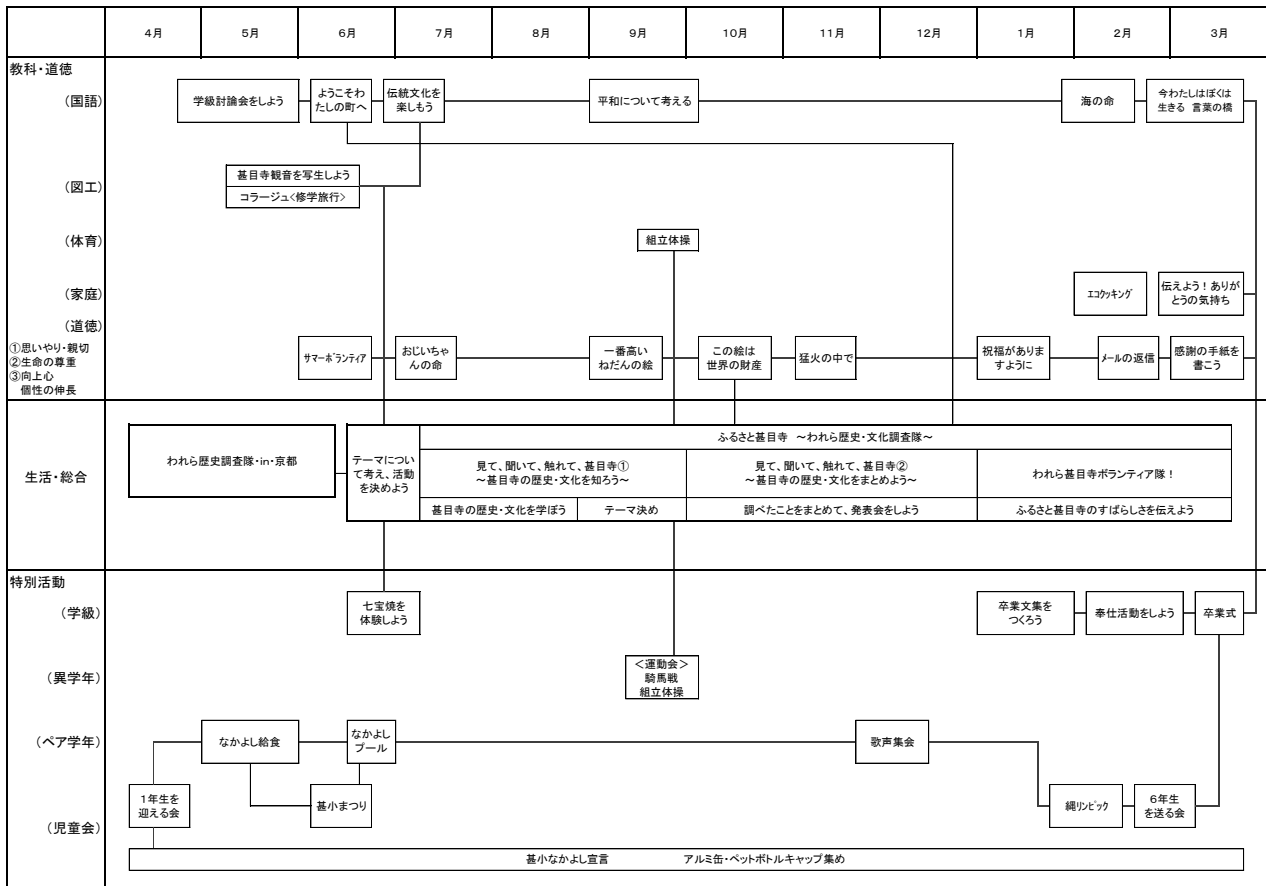
ESDカレンダー				第5学年										あま市立基目寺小学校	
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
教科・道徳		(国語)	活動報告をする文章を書く			自分の考えをまとめて討論しよう			大違いさんとうがん	千年の釘に いどむ	自分の考えを明確にしながら読もう		わらぐつの中 の神様		
		(社会)	米作りのさかなな地域			水産業のさかなな地域		自動車工業のさかなな地域		自然を守る運動					
		(理科)	植物の発芽と成長		魚のたんじょう		人のたんじょう								
		(家庭)	見つめよう家庭生活						おいしい毎日の食事		物を生かして住みやすく				
		(体育)	体ほぐし運動		マット運動		ソフトバレーボール		組立体操		ティーボール		バスケットボール・サッカー		
		(道徳) ①思いやり・親切 ②生命の尊重 ③向上心 個性の伸長	犬とわたしの 十の約束		勇太の宿題		クラスの宝物		女性指導者た ん生		アルバムの中 のほく		おばあさん、 待ってね。		
生活・総合		野外活動の研究		ふるさと基目寺											
		旭高原調査隊		くらしに目を向けよう		われら産業調査隊				基目寺から発信					
						テーマ決め		調べ学習・まとめ		発表会		近隣地域→愛知県→日本各地		伝統産業を守る町	
特別活動						社会見学		出前授業		地元へ根付く昔からの産業 → 日本各地の伝統産業					
						運動会 騎馬戦 組立体操		卒業式							
		読み聞かせ① 「ともだち」		歌声 集會		読み聞かせ② 「思いやり」		歌声集會		読み聞かせ④ 「思いを伝える」					
		1年生を 迎える会		基小まつり				読み聞かせ③ 「思いやり②」		綱引ドック		6年生 を送る会			
		基小なかよし宣言 アルミ缶・ペットボトルキャップ集め													

総合的な学習の時間

第 5 学 年 指 導 計 画

あま市立基目寺小学校

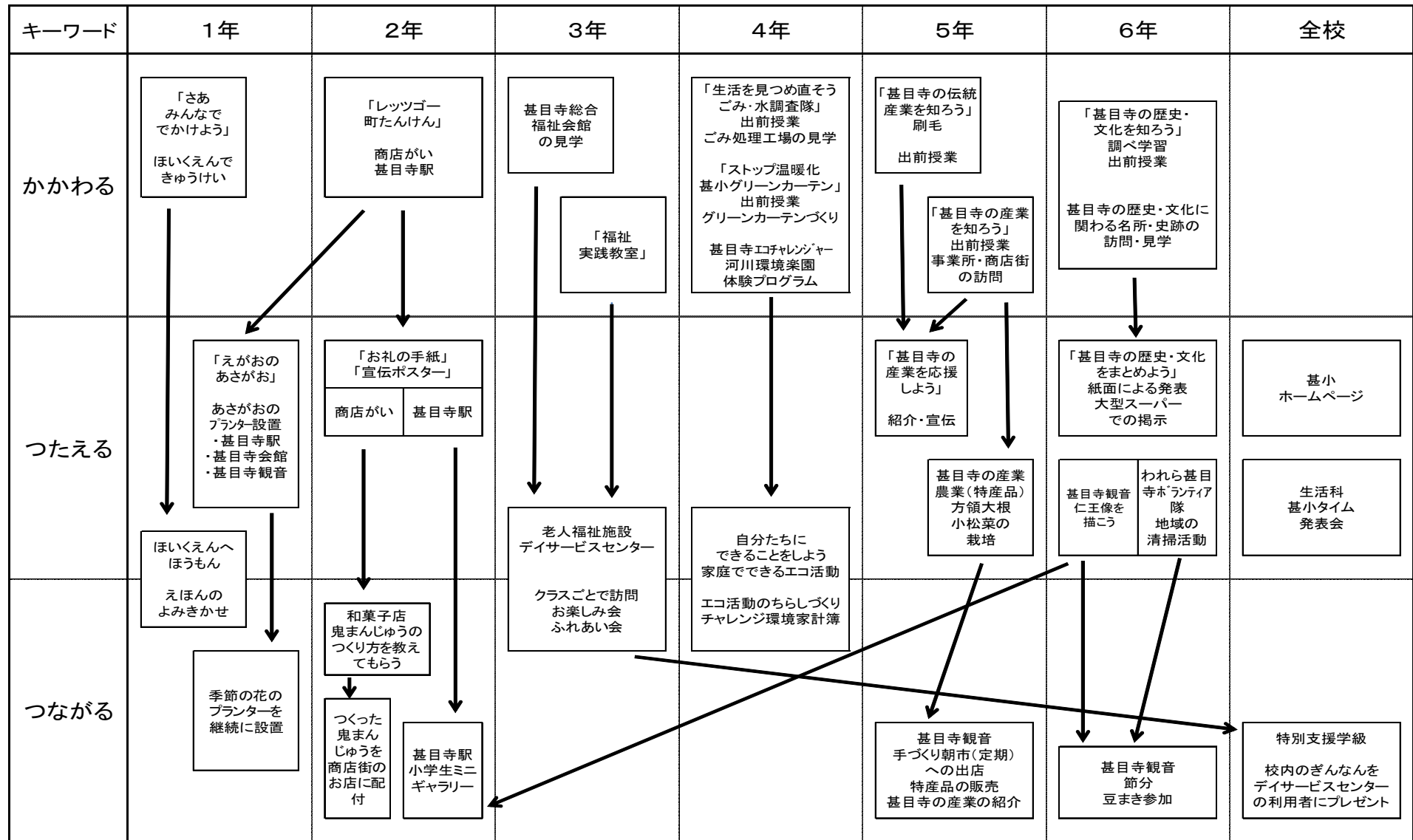
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「われら産業調査隊」(60時間)											
【ねらい】	○商店・工場・農家などに出かけ、それぞれの仕事を調べることを通して地域の産業を知り、それをまとめて発信するとともに、働くという人間の営みに対する理解を深め、自分も社会の一員として生きようとする気持ちを育てる。										
【構成概念】	Ⅰ 多様性 Ⅱ 相互性 Ⅳ 公平性 Ⅴ 連携性 Ⅵ 責任制										
【重視する能力・態度】	①批判的に考える力			③多面的、総合的に考える力			⑥つながりを尊重する態度			⑦進んで参加する態度	
【評価規準】	・自分たちが住んでいる地域の産業を調べることを通して、自分に必要な情報を検討・整理し、考えを深めながら地域の産業について考えることができる。			・自分たちが住んでいる地域の産業を調べることを通して、それらを自分・地域・社会など様々な視点からとらえ、関連付けて考えることができる。			・自分たちが住んでいる地域の産業を調べることを通して、地域の産業のおかげで、自分の生活があることを実感することができる。			・自分たちが住んでいる地域の産業を調べることを通して、地域の産業のために、自分たちが貢献できることを進んで考えようとしている。	
単元名「われら産業調査隊」 ～基目寺の伝統産業を調べよう～ (7時間)		単元名「われら産業調査隊」 ～基目寺の主な産業を知ろう～ (7時間)		単元名「われら産業調査隊」 ～基目寺の産業を知ろう～ (30時間)				単元名単元名「われら産業調査隊」 ～基目寺の産業を応援しよう～ (16時間)			
【ねらい】 ・自分たちが住んでいる地域の伝統産業を知ることで、地域の産業に興味をもち、地域を愛する心をもつ。 【学習活動】 ①基目寺の伝統産業である刷毛について調べよう。(2時間) ・4年生で学習した「刷毛」産業について振り返る。 ②刷毛組合の方の話を聞く。(出前授業)(1時間) ・刷毛の歴史について ・作る行程について ・刷毛の種類について ・これからの刷毛産業について ③刷毛産業についてのまとめをしよう。(4時間) ・聞いたこと、調べたことを今後の学習の資料にする。 【地域人材・関係機関】 ○刷毛組合(刷毛会館)		【ねらい】 ・自分たちが住んでいる地域の主な産業を知ることにより、地域の産業に興味をもち、さらに深く調べようとする意欲を高める。 【学習活動】 ①基目寺の主な産業について調べよう。(2時間) ・4年生までに学習した基目寺の産業を振り返る。 ②あま市役所産業振興課の方の話を聞く。(出前授業)(1時間) ・産業について ・工業について ・商業について ・今後の産業について ③基目寺の産業についてのまとめをしよう。(4時間) ・聞いたこと、調べたことをまとめる。 ・基目寺の主な産業のまとめをもとにより深く調べたいことをまとめる。 【地域人材・関係機関】 ○あま市役所産業振興課		【ねらい】 ・自分たちが住んでいる地域の産業を調べる活動を通して、地域に生きる人々とふれ合い、地域への愛着をより一層深めるとともに、よりよい郷土にしていこうとする意欲をもつことができる。 【学習活動】 ①基目寺の産業の中で深く調べたいことについて話し合う。(4時間) ・グループごとに取材先を決める。 ・取材で聞きたいこと、見てきたいことをまとめる。 ②取材に行こう。(2時間) ・グループに分かれて取材活動を行う。 ③取材をもとに調べよう。(6時間) ・取材してきたことをもとに、グループで話し合い、インターネット、本、パンフレットなどを活用して調べ学習を進める。 ④まとめ方・発表の仕方を考えよう。(14時間) ・発表の仕方を考える。 ・発表する。 ⑤見つめ直す。(4時間) ・発表会後、学習の振り返りの中で、自分たちが産業の発展のために何ができるのか考える。 【地域人材・関係機関】 ○地元の工業(アイ工業・佐藤工業・石光工業) ○地元の商業(商店街:とくら・樹文・龍鳳堂・米勇・馬場鮮魚店・伊藤書店) ○地元の農業(小松菜農家・ホウレンソウ農家) ○農協 ○基目寺商工会 ○あま市役所				【ねらい】 ・地域の産業のよさを再確認するとともに自分たちの住む地域を誇りに思い、地域の一員として、地域の産業のために自分たちが貢献できることは何かを具体的に考え、地域に働きかけることができる。 【学習活動】 ①これまでの取り組みをふり振り返り、地域の産業の発展のために自分たちに何ができるかを考える。(2時間) ・これまでの取り組みを振り返る。 ・地域の産業の発展のために自分たちにできることを考える。 ②地域の産業の発展のために自分たちが地域に貢献できることを行動に表し、地域に働きかけよう。(8時間) ・計画を立てる ・行動に表していく。 ・地域の市に参加する。 ③地域における自らの生き方を考える。(6時間) ・自らの生き方を考える 【地域人材・関係機関】 ①市公共施設 ②商店街 ③基目寺観音「手づくり市」			



4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ふるさと基目寺 ～われら歴史・文化調査隊～（70時間）											
【ねらい】	○「ふるさと基目寺」に残る史跡や伝統芸能などにふれることで、基目寺の歴史の深さや価値を実感し、郷土への愛着を高める。 ○基目寺の歴史や文化をより深く知ったことを発表会や地域ボランティア体験を通して発信し、ふるさと基目寺が、自分にとって大切な郷土だということに気付く。										
【構成概念】	Ⅱ 相互性 Ⅲ 有限性 Ⅴ 連携性 Ⅵ 責任性										
【重視する能力・態度】	② 未来像を予測して計画を立てる力 ③ 多面的・総合的に考える力 ⑥ つながりを尊重する態度 ⑦ 進んで参加する態度										
【評価規準】	・基目寺の歴史や文化を知るために、事前に知りたいことをまとめて、計画的に活動の準備をすることができる。 ・基目寺の歴史や文化が引き継がれていることを理解し、その様々な視点から関連付けて考え、まとめることができる。 ・お互いの考えを尊重し合いながら活動することができる。また、基目寺の歴史や文化が今の時代に受け継がれていることを感じることができる。 ・基目寺に住む一人として、体験したことを生かして基目寺のためにできることを考え、実行に移そうと努力することができる。										
単元名「われら歴史調査隊・in・京都」(10時間)			単元名「見て、聞いて、触れて、基目寺① ～基目寺の歴史・文化を知ろう～」(15時間)			単元名「見て、聞いて、触れて、基目寺② ～基目寺の歴史・文化をまともよう～」(30時間)			単元名「われら基目寺ボランティア隊！」(15時間)		
【ねらい】 自分たちが立てた京都分散計画に従い、地域ボランティアの方の説明を聞きながら、京都の町を巡ることを通じて京都の歴史に関心をもつ。			【ねらい】 自分たちが住んでいる地域にまつわる歴史的、文化的遺産の存在を知ることにより、地域の歴史に興味をもち、さらに深く調べようとする意欲を高める。			【ねらい】 「ふるさと基目寺」に残る史跡や伝統芸能などにふれ、基目寺の歴史の深さや価値を実感し、郷土への愛着を高める。			【ねらい】 地域に伝わる伝統行事への参加体験を通して、「ふるさと基目寺」のよさを再確認し、そこに住む一人としての自覚と誇りを高めるとともに、ふるさとを大切に思う気持ちを育てる。		
【学習活動】 ①見学したい場所を決めよう(2時間) ・京都にはどのような歴史的遺産や文化的遺産があるのかを知り、訪れたい場所を決定する。 ②見学したい場所について調べよう(4時間) ・インターネットや、本、パンフレットなどを使って、訪問先について調べる。 ③バスの乗り方や見学先の回り方を話し合おう(2時間) ・効率よく見学するためには、どのように回るとよいかグループで話し合う。 ④見学後、俳句や短歌にして発表しよう(1時間) ・見学してきたことをもとに俳句や短歌を作る。 ⑤シルバークロニクルにお礼の手紙を書こう(1時間) ・お世話になった方々にお礼の手紙を書いて送る。			【学習活動】 ①基目寺の歴史・文化について学ぼう(5時間) ・基目寺地域の歴史的、文化的遺産について浅井先生の講義を聞き概要を知る。 ②調査表やハンセン南についての出前授業を聞く。 ③テーマを決めて、より深く調べよう(3時間) ・民俗資料館や、基目寺観音、寛津神社などに出向いて、興味をもったことについて、調べ学習を進める。 ④調べたことをまとめて発表しよう(3時間) ・調べたことを、ノートなどにまとめ、今後の学習の資料にする。 ⑤まとめたことの情報交換をしよう(4時間) ・自分が興味をもった内容について友達に発信したり、友達の情報を知ったりと情報交換をする。 ・調べた情報をテーマ別グループ学習に生かす。			【学習活動】 ①調べたことをもとにテーマを設定しよう(2時間) ・地域別の行事について、調べたことをもとに学習テーマを設定する。 ②発表の方法を考えて、準備しよう(18時間) ・同じテーマをもつグループで、情報を整理・活用し、相手によく伝わるようなまとめ方・発表の方法を考える。 ・写真・図・スライドなどの効果的な活用を考える。 ③発表会をしよう(4時間) ・発表会の準備、練習を行い、保護者に向けて調べたことを発表する。 ④基目寺に思返しできることを考えよう(6時間) ・発表会後、学習のふりかえりをする中で、自分たちが住む町のために何ができるかを考える。			【学習活動】 ①地域の行事を知り、詳しく調べよう(3時間) ・基目寺観音の部分や初観音の行事について詳しく調べ、自分たちがどのような形で参加出来るかを考え、計画を立てる。 ②「ふるさと基目寺」でまとめたことを発信しよう(10時間) ・「ふるさと基目寺」について調べたことを地域や地域外に発信する方法を考える。 ・基目寺観音や行事について、特に自分が地域や地域外に発信したいことを、分かりやすくまとめる。 ・基目寺観音の部分、初観音の日に地域ガイドボランティア活動をする。 ・保護者に発信した内容をポスターとしてまとめ直し、庁舎や公民館など基目寺の主な施設の協力を得て発信する。 ③「あま市ものしり検定」に挑戦しよう(2時間) ・あま市ものしり検定についての講義を聞く。		
【地域人材・関係機関】 ○京都スカイ観光(シルバークロニクル) ○JTB			【地域人材・関係機関】 ○あま市教育委員会 ○あま市歴史民俗資料館 ○もくもく(源氏鶏) ○寛津神社 ○円周寺住職			【地域人材・関係機関】 ○あま市教育委員会 ○あま市歴史民俗資料館 ○もくもく(源氏鶏) ○寛津神社 ○法華院 ○円周寺住職			【地域人材・関係機関】 ○あま市教育委員会 ○あま市歴史民俗資料館 ○もくもく(源氏鶏) ○ふれあい入居センター ○寛津神社 ○法華院 ○基目寺観音 ○あま庁舎		

平成23・24年度 ESDの取組による人や地域との関係の広がり

あま市立甚目寺小学校



実践2

個性化教育とE S D

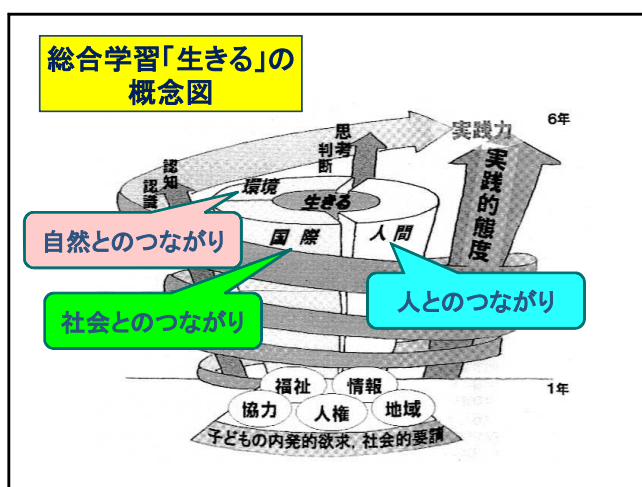
—総合学習「生きる」をE S Dの視点で見直し、学校ぐるみで取り組む—

東浦町立緒川小学校 原 伊津子

1 はじめに

本校は、校舎内にオープン・スペースをもつ学校（オープン・スクール）として、今年で35年目を迎えた。これまで、一貫して「学習の主体者は子どもである」と捉え、個別化・個性化教育の研究・実践を積み重ねてきた。総合学習の実践歴も長く、「総合的な学習の時間」が創設される以前から、「生きる」を1年から6年までの共通主題とし、1・2年生は、生活科の目標や内容を取り込みつつ、3年生以上の総合的な学習の時間との関連を考えながら、総合学習「生きる」として6年間の継続的な実践を行ってきた。

総合学習の長い実践を支えてきたのは、地域のゲストティーチャーによる継続的な支援であると言



える。しかし、長年にわたる実践で同じような学習が繰り返されることによって、ゲストティーチャーの支援を当たり前のもので受け止めるようになり、体験活動がそれだけで終わるような学習になってしまうこともあった。

そんな折に、本校は「E S D」と出合った。そして、総合学習「生きる」の現状をE S Dの視点で見直し、体験だけでなく自分たちで考え、問題を解決し、探究的な学習になるように改善しながら、E S Dの研究・実践に取り組み始めた。

2 研究の経過

(1) 平成22年度（1年目）…E S Dについて理解し、研究方法を探る。

ほとんどの職員には「E S D」はなじみが薄い概念であったので、まずはE S Dを理解しようと講師の先生を招いて学習会を行った。また、代表者が校外の研修会に参加し、研究先進校を視察した。事後には学んだことを校内で全職員に報告し、共通理解を図った。そして、先進校の実践事例を参考にして本校に合ったE S Dの導入方法を探っていた。

E S D実践校のほとんどは、「E S Dは新しく何かを始めるというものではない。今までの学習活動を見直したり、少し手を加えたりするだけで実践できる」と述べている。そこで、本校でも現在の各学年の「年間指導計画」と「総合学習のカリキュラム」を見直して、総合及び関連する教科の中でE S Dの考え方が生かされる単元を探し、「E S Dカレンダー」にまとめることにした。

総合学習「生きる」における各学年の活動

学年	活動の方向性	キーワード
1	学年を「くに」ととらえ、四季の行事を踏まえた活動をする。	【くにの一年】
2	自分自身を踏まえて、地域の自然や人々に触れる活動をする。	【探検】
3	地域に根ざした方々から学ぶ活動をする。	【交流】
4	身の回りの社会生活など、暮らしに関わる活動をする。	【暮らし】
5	動植物、人間の生命に関わる活動をする。	【いのち】
6	さまざまな人の生き方から学ぶ活動をする。	【生き方】

(2) 平成23年度（2年目）…研究方法に従って実践し、検証する。

各学年でE S Dカレンダーを作成した。その際、具体的に単元の学習活動をE S Dの視点で見直そうとしていくと、本校の課題であった「体験だけの活動」が「探究的な学習」に変わるために、

①活動内容が「自分事」になるような「仕掛け」をする

②「仕掛け」を切り口に、答えが多様で正答の定まらない問いを投げかけて話し合いをさせる

③学習の成果を表現する場のもち方を工夫することによって、自分の生活に発展させていくといった方向性が見えてきた。

これらの方向性に沿ってE S Dを取り入れた授業づくりを行い、以下の単元で実践した。

ア 5年「お米を育てて植物の命を学ぼう」（自然とのつながり・体験型活動・地域連携・主体的な思考や行動・現実的課題に取り組む）

学校の田んぼでの米作りに加えて、バケツを使った一人一鉢の米作りに取り組み、農薬の使用や農家が抱える問題について話し合い、自分たちにできることを実行した。子どもたちは、米作りを「自分事」と捉えて愛着をもって育て、米作りに関わるいろいろな問題について真剣に考え、話し合うことができた。また収穫したお米に生命を感じている様子も見られた。



成長した一人一鉢のバケツ稲

イ 1年「にこにこ大きくせん『お手つだいめい人になろう』」（人とのつながり・社会とのつながり・主体的な思考や行動・自己肯定感）

お母さんやおばあさんに弟子入りしてお手伝いの技を磨いた。子どもたちは、熟練した技にあこがれ、お手伝いが上手になりたいと願って懸命に練習をした。そして、上達したお手伝いを家族の前で堂々と披露した。「お手伝い名人認定証」を受け取り、家族に抱きしめてもらった子どもたちは、どの子も笑顔で、達成感、満足感を味わっている様子がうかがえた。お手伝いはその後も継続して行い、家族のために役立っている自分を感じ、自己肯定感を高めていった。



「お手伝い名人認定証」をもらう

ウ 2年「あんなに小さかったのに」（人とのつながり・生命尊重・多様性の尊重・自己肯定感）

自分の小さい頃の出来事やそのときの家族の気持ちを調べ、学級の友達と伝え合った。また、家族からだけでなく、父、母、祖母、助産師の立場の人からも赤ちゃんが生まれたときの様子や気持ちを聞いたり、実際に赤ちゃんを抱いて触れ合ったりした。子どもたちは、自分を育ててくれた人の思いに気づき、見守られ、愛されていることを実感し、自己肯定感を高めていった。



赤ちゃんと握手をして触れ合う

エ 5年「人のいのちについて考えよう」（人とのつながり・生命尊重・多様な立場の人と学ぶ）

東日本大震災やそこから派生した事故や災害について、被災地で支援活動を行った自衛隊の方、理学療法士の方、ボランティアの方などから直接、話を聞いた。子どもたちは、図書資料やインターネットでの調べでは得られない学習をすることができた。そして、がれきの処理の問題について話し合ったり、被害に遭われた「いのち」について考えて命の大切さや尊さに気付いたり、望ましい未来を描いたりすることができた。



自衛隊の方から話を聞く

また、E S Dの推進拠点である「ユネスコスクール」に加盟申請し、平成23年11月29日に県内公立小中学校で初めて承認された。

2年間の研究によってE S Dについての理解が深まり、授業やカリキュラムをE S Dの視点で見直し改善することができるようになってきた。同時に、子どもたちの学びが変わり、次の学びへの意欲が高まっていく姿も多く見られた。しかし、基になるカリキュラムがあるだけに、十分に改善できないまま学習を進めてしまった学年もあり、学校全体での取組とは言えなかった。



校内に飾られた
ユネスコスクールのプレート

3 研究の目的

昨年度に引き続き、総合学習「生きる」をE S Dの視点で見直し、体験活動だけでなく探究的な学習になるように改善を進める。そのために、各学年で単元開発や授業づくりを行う。さらに、6年間を見通し、発達段階に応じて体系的・系統的に研究・実践していくことによって、学校全体で持続的にE S Dに取り組む方法を模索していく。

4 研究の方法

(1) E S Dの視点で見直した総合学習「生きる」のカリキュラム（E S Dカレンダー）づくり

総合学習「生きる」を中心に、教科との関連を意識しながら年間計画を立て、それぞれの学習活動にE S Dの視点を位置付ける。

- ①これまでの総合学習「生きる」の各活動を「自然とのつながり」「社会とのつながり」「人とのつながり」の3つに整理する。
- ②E S Dの視点で見直し、よりE S Dの方向性と合致するように学習活動を改善する。
- ③よりE S Dの方向性と合致するように、関連する教科等の学習内容をカリキュラム上に位置付ける。
- ④それぞれの活動に関わるE S Dの視点を書き加え、E S Dカレンダーとする。

(2) ESDの視点を生かした授業づくり

国立教育政策研究所の「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究 最終報告」に示された「ESDの視点を生かした授業づくり」を参考にして、実践の分析と改善を行う。

- ①従来の実践の「持続可能な社会づくりの構成概念」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」について、「ESDの視点表」を用いて分析する。
- ②本実践がESDの視点を生かした授業になるように、「ESDの視点表」を用いて改善点を明確にする。
- ③本実践における教材のつながり、人のつながり、能力・態度のつながりを「ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項」としてまとめる。

以上のような方法で、各学年で実践を始めた。その中で、6年の総合を中心とした合科的単元「国際人になろう」の実践について紹介する。

5 研究の内容

本校の6年の総合学習「生きる」のキーワードは「生き方」である。国際理解や自国文化の理解等に関わる体験学習を通して、地域の人々や社会で活躍している人々を見つめながらさまざまな生き方を知り、自分も社会の一員として生きようとする実践力を育むことをねらいとしている。

国際理解と自国文化の理解について学習する単元「国際人になろう」では、図書資料やインターネットでの調べ学習に加えて、民族博物館「リトルワールド」での見学や体験を通して、外国の生活や文化についての理解を深めていくという展開で学習を進めていた。「参加体験型」の学習にはなっているものの、実際に外国人に会ったり交流したりする活動は取り入れておらず、ESDの視点としては不十分で改善の余地が残されていた。

この単元と、6年総合学習の年間計画を、以下のように改善した。

(1) ESDカレンダーづくりによるカリキュラムの見直し

今年度、新たに国際交流の学習として、ジャパンアートマイル（JAM）が主催する「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」3)に取り組むことにした。このプロジェクトは、JAMに紹介してもらった海外のパートナー校とインターネットを使って交流し、共通のテーマで協働学習した後に、半分ずつ絵を描いて1枚の壁画（1.5m×3.6mの大型絵画）を完成させ、お互いに鑑賞し合うものである。国際理解教育を教育現場で実現する有効なツールとして高い評価を受け、日本全国、そして世界に広がっている。

この取組によって、交流相手を通して生の異文化に接し、相手を理解する（異文化理解）とともに、自分たちの地域や文化を調べて伝えることで、自分たちのよさを再確認する（自国文化理解）こともできると考えられる。また、自己紹介や壁画の共同制作を通して、自分の思いを表現したり伝えたりする力（コミュニケーション能力）を伸ばすことも期待できる。

このようなカリキュラムの見直しをして、ESDカレンダーを作成した。以下に、6年のESDカレンダーを示す。

ESDの視点	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	活動を考え、テーマを決めよう② 主体的な思考										
自然とのつながり											
社会とのつながり					国際人になろう⑧ 修学旅行を創ろう						
人とのつながり	国際人になろう⑦ 外国の生活や文化について調べよう 異文化を知る ALTにインタビュー リトルワールド訪問 国際理解 多様性尊重				分散研修 体験型活動・自国文化理解 国際人になろうⅡ アートマイルプロジェクトに取り組み、韓国の小学校と国際交流をしよう 自己紹介・テーマ交流・構図決め・壁画制作・鑑賞 自国文化理解・異文化理解・他者と協力・コミュニケーション 自叙伝を書こう② 最後の学習を創ろう⑭ 誕生から家族・人・社会とのつながりを見つめ直す 家族への感謝 生命尊重・自己肯定感 恩師・保護者への感謝の会 愛校作業・感謝のプレゼント 最後の学習での呼びかけ 家族・支えてくれた人への感謝 主体的な思考・望ましい未来を描く						
教科等との関連	<道徳> 広い心で世界の人々と 日本の文化に誇りをもつ	<家庭> くふうしよう！季節に合うくらし 気候に合わせたくらしの工夫	<社会> 日本とつながりの深い国々 異なる文化や習慣を理解する 異文化理解	<社会> 国際連合と日本人の役割 国際社会の平和と発展 国際貢献	<社会> 新しい国づくりをめざす 天皇を中心とする政治の仕組み 自国文化理解	<外国語活動> Let's go to Italy. 思いが伝わるように表現する コミュニケーション	<国語> 随筆を書こう 経験したことについて考えをまとめて書く				

(2) ESDの視点を生かした授業づくり

ア 従来の実践

(ア) 単元の目標

異文化に視野を広げ、世界には日本と違ったさまざまな文化や民族があることを知る。また、自分たちとは異なる文化を尊重する態度を養うことで、自国文化のすばらしさに改めて気付く、興味を深める。

(イ) ESDの視点表を用いた実践授業分析

従来本単元では、家庭科の学習「気候に合わせたくらしの工夫」から世界の国々の暮らしに目を向けさせてきた。図書資料やインターネットで世界の建物や衣装などを調べ、民族博物館「リトルワールド」で見学や体験をして、世界にはさまざまな文化があることを学ぶことによって（「多様性」※1）それらがどんな条件と関連しているのかを考える力を育てたいと考えてきた。（「多面的・総合的に考える力」※2）

また、世界の国々と日本を比較し、それぞれのよさに気付く、互いにに関わり合っていることを学ぶことによって（「相互性」※3）自分も世界の人々とながらいて、国際人としてそのつながりを大切にする態度を育てることを目標としてきた。（「つながりを尊重する態度」※4）（表1）

【表1：従来の実践の分析】

単元名「国際人になろう」 学習内容 世界にはさまざまな文化や民族があることを知り、異文化を尊重する態度を養う。														
持続可能な社会づくりの構成概念							ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度							
I 多 様 性	II 相 互 性	III 有 限 性	IV 公 平 性	V 連 携 性	VI 責 任 性	VII そ の 他	① 批 判 的 に 考 え る 力	② 計 画 を 立 て る 力	③ 考 え る 力 ・ 総 合 的 に	④ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	⑤ 他 者 と 協 力 す る 態 度	⑥ つ な が り を 尊 重 す る 態 度	⑦ 進 ん で 参 加 す る 態 度	⑧ そ の 他
【多様】 ※1	【相互】 ※3	【有限】	【公平】	【連携】	【責任】	【他】	《批判》	《未来》	《多面》 ※2	《伝達》	《協力》	《関連》 ※4	《参加》	《他》

イ ESDの視点を生かした授業づくり

(ア) ESDの視点表による改善点の明確化

本実践においては、外国との交流として韓国の小学生との「アートマイルプロジェクト」に取り組む。ここにおける、ESDの視点とは、p.38表2に示す通り、「連携性」「責任性」の概念を獲得するとともに、「未来像を予測して計画を立てる力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」を育てることを狙うものである。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

改善点A

構成概念V連携性・・・「アートマイルプロジェクト」の相手国について理解し、交流を深めながら互いに協力して一つの作品を創り上げる。

改善点B

構成概念Ⅵ責任性・・・相手国と日本のつながりを知ることから、我が国の国際社会の中での立場に気付き、望ましい将来像を描きながら、今自分たちにできることを考える。

【E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度】

改善点C

能力・態度⑤ 他者と協力する態度・・・相手国に絵画を届けるという目標をもって活動することを通して、自国の仲間と協力して作品を創り上げる態度を育てることができると考える。

改善点D

能力・態度④ コミュニケーションを行う力・・・絵画を通して互いに自分の国の文化を知らせ合うとともに、自分たちの思いを絵に込めて表現したり、相手国の人たちの気持ちを受け止めようとしたりする力を育てることができると考える。

改善点E

能力・態度② 未来像を予測して計画を立てる力・・・相手国について理解し、どのように受け取るかを想像しながら、自分たちが望む未来像を描く力を育てることができると考える。

【表2：よりE S Dの視点に即した実践に改善するための検討】

単元名「国際人になろう」 学習内容 世界にはさまざまな文化や民族があることを知り、異文化を尊重する態度を養う。							E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度							
持続可能な社会づくりの構成概念							①批判的に考える力	②未来像を立てる予測力	③多面的力・総合的に考える力	④コミュニケーション力	⑤他者と協力する態度	⑥つながりを尊重する態度	⑦進んで参加する態度	⑧その他
I 多 様 性	II 相 互 性	III 有 限 性	IV 公 平 性	V 連 携 性	VI 責 任 性	VII そ の 他	《批判》	《未来》	《多面》	《伝達》	《協力》	《関連》	《参加》	《他》
※1	※3			改善点A	改善点B			改善点E	※2	改善点D	改善点C	※4		

(イ) 留意事項について

①教材のつながり

導入では、家庭科で学習した「季節に合わせたくらしの工夫」を「世界の気候に合わせたくらしの工夫」につなげて世界へと目を向けさせる。また、世界の国々について調べたり体験したり制作したりしたことを、社会科「日本とつながりの深い国々」「国際連合と日本人の役割」の学習につなげることによって、実感を伴った理解ができると考えられる。

②人のつながり

言語での相互理解が難しい外国の人たちと、「アートマイルプロジェクト」を通して絵画で交流する。また、作品を仕上げるために自国の仲間と協力して活動する。

③能力・態度のつながり

本単元の学習を通して、広く世界に目を向け、日本の役割や自分たちにできることを考え、実践しようとする意欲と態度を育てることができると考える。

ウ 授業の実践

(ア) 単元の目標

異文化に視野を広げ、世界には日本と違ったさまざまな文化や民族があることを知る。また、韓国との「アートマイルプロジェクト」に取り組むことによって、生の異文化に接して相手を理解したり、自国文化を伝えることで自分たちのよさを再確認したり、自分たちの思いを絵に表し、相手に伝えたりすることができる。

(イ) 単元の計画（全38時間）

次	時間	学習活動	主として関わる E S Dの構成概念	具体的な活動内容 (E S Dの重視する能力・態度)	評価の観点 ・評価規準
1	3	異文化について調べ、テーマを決めよう		・世界には、気候に合わせて建物や衣装などに、さまざまな暮らしの工夫があることを知る。 ・A L Tに日本に来て文化の違いで驚いたことや、感じたことをインタビューする。	【認知・認識】 ・学習の見通しをもち、意欲的に取り組もうとする。
2	8	外国の文化を紹介するパンフレットを作ろう		・図書資料やインターネットを活用し、異文化の暮らし方の工夫を調べる。 ・外国の文化を紹介するパンフレットを制作する。	【思考・判断】 ・外国の文化に関する情報を集め、判断して、分かりやすくまとめる。
3	6	リトルワールドを訪問し、暮らしの工夫を体験しながら調べよう	多様性 (世界にはさまざまな文化があることを知る)【※1】 相互性 (互いに関わり合っていることを知る)【※3】	・文化の違いがどんな条件と関連しているのかを考える(多面的、総合的に考える力)【※2】 ・自分も世界の人々とつながっていて、国際人としてそのつながりを大切にしようとする(「つながりを尊重する態度)【※4】	【思考・判断】 ・外国の文化について比べたりつなげたりして考え、自分の感想をもつ。
4	9	アートマイルプロジェクトの相手校(韓国)と交流をしよう		・自己紹介カードを交換する。 ・学校紹介のコマーシャルを制作し、交換する。 ・韓国について学習する。	【実践的態度】 ・主体的に発信したり、相手から学ぼうとしたりする。
5	9	壁画の構図を決め、日本側の部分を制作しよう	連携性 (互いに協力して一つの作品を創り上げる)【改善点A】	・自国の仲間たちと協力して作品を創り上げる(他者と協力する態度)【改善点C】 ・自分たちの思いを絵に込めて表現したり、相手国の人たちの気持ちを受け止めようとしたりする(コミュニケーションを行う力)【改善点D】	【実践的態度】 ・壁画の制作に仲間と協同的に取り組む。

6	3	完成作品を鑑賞し、活動を振り返ろう	責任性 (望ましい将来像を描きながら、今自分たちにできることを考える)【改善点B】	・自分たちが望む未来像を描く(未来像を予測して計画を立てる力)【改善点E】	【実践的態度】 ・完成した壁画から相手の思いを推察し、望ましい未来像を描く。
---	---	-------------------	--	---------------------------------------	---

(ウ) 実践記録

①「アートマイルプロジェクト」の相手校と交流をしよう

「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」に参加を申し込み、交流の相手として韓国のムンベク小学校の6年生を紹介してもらった。

まず、ムンベク小学校の6年生が手紙を送ってくれた。子どもたちは、一人一通届いた手紙をうれしそうに開き、英語・ハングル・ひらがなの交じった文章を読み、友達同士で楽しそうに見せ合っていた。内容を全て理解することはできなかったが、同じ6年生が英語やひらがなを書けることに驚いていた。



韓国から届いた手紙を読む

その後、一人一人が自己紹介の手紙を書いて韓国に送った。外国語活動で学習した「I like～」のような簡単な英文を書いたり、インターネットでハングルのあいさつ文を調べたりした子どももいて、「英語やハングルで返事を書きたい」という思いが伝わってきた。また、韓国の国旗を調べ、日本の国旗と並べて描いたり、両国の子どもが握手をしている絵を描いたりする子どももいた。



学校紹介の映像を見合う

次に、グループに分かれて学校紹介の映像を制作した。子どもたちは、校内の風景や学習の様子をナレーション付きで撮影した。学校生活を劇にして撮影するグループもあり、台本を英語にするために、海外出張の経験のある父親や英語塾の先生に手伝ってもらっていた。

映像が出来上がった段階で、学級内発表会を行った。お互いに学校紹介を見合い、感想を伝えたり改善点を出し合ったりした。同時に、緒川小のよさを再確認することもできた。その後、改善点を修正し、完成した映像を韓国に送った。

韓国からも同じように学校紹介の映像が届いた。

②韓国について学習しよう

ちょうどこの頃、竹島をめぐる領土問題が表面化し、連日、新聞やテレビで報道された。小学生といえど、これから韓国と交流していくのに、この問題を避けて通ることはできない。そこで、竹島の問題を分かりやすく解説したテレビ番組を視聴させ、感想を書かせた。島を分け合う、資源を分け合う、どちらかが譲る、お互いが納得するまで話し合うなど、子どもたちなりに考えた解決策が出されたが、どの子どもにも共通していたのは、戦争にならないように平和的に解決したいという点だった。

③壁画の構図を決め、日本側の部分を制作しよう

韓国についての学習をした上で、壁画のテーマを学年で話し合い、「将来の夢」にしたいということになった。このことをムンベク小学校に伝えたところ、賛成してくれた。

さらに、壁画のテーマに沿って韓国のことを調べた。その上で、壁画の構図についてアイディアを出し合い、話し合っ、大まかな構図の案をまとめた。

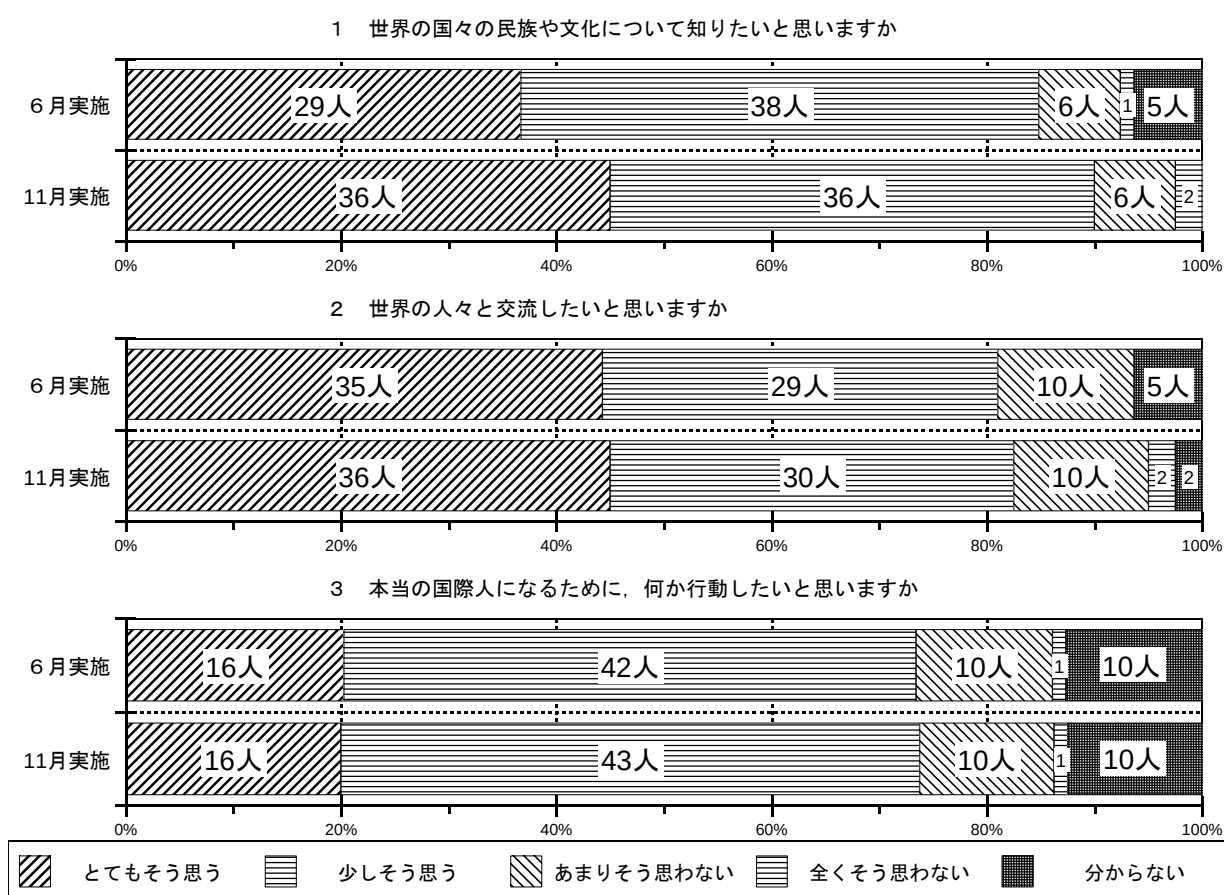
これをムンベク小学校に送って了解してもらえれば、今後、12月に壁画の半分を本校が描いて送り、1月にムンベク小学校が半分を描いて完成する。そして、3月には完成した壁画が緒川小に送られてくる予定である。

(3) 評価

E S Dを取り入れたことによる子どもたちの意識の変容を評価するために、学習の前半（6月）と後半（11月）に3つの項目でアンケートを行った。結果は以下の通りである。

E S Dに関するアンケート結果

[第6学年児童79名（6月）、80名（11月）に実施]



1と2からは、「知りたい」「交流したい」という回答が若干増えていることと、「分からない」という回答が減っていることが読み取れる。3では、「行動したい」という意識に学習前半と後半でほとんど変化が見られなかった。

後半のアンケートを実施した11月は、まだ単元の途中で、メインの活動である壁画制作にも取りかかっていなかった。そんな状況でも「分からない」が減っていることから、ここまでの学習で子どもたちが感じたり考えたりして、自分の意志をもつようになったとも考えられる。しかし、「何か行動する」となると具体的に思い浮かべることができず、変容がなかったということも言える。学習の中に、「課題解決のために行動している」と思える活動を仕組むことが必要であった。

そんな中でも、「どのような行動をしたいか」との問いに対する記述では、「困っている外国人がいたら『自分だったら』と考えて行動したい」「お互いのことを知り、みんなで助け合う」「相手の

国を理解し、尊重し合い、支え合っていこうと思う」といった意見もあり、E S Dの歩みを一歩進めることができたのではないかと思います。

アンケートを通して、単年度の実践だけでなく、6年間の継続した取組の必要性を改めて感じるとともに、評価によって明らかになったことを授業改善に生かしていきたいと思った。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) E S Dの視点を生かした授業づくり

E S Dの実践を積み重ねることによって、授業や単元にE S Dの視点を導入する方法が分かってきた。昨年度実践した学年の事例を参考に、今年度は全学年でE S Dを取り入れた授業を行うことができ、学びが変わり、子どもが変わっていく姿をいくつも見ることもできた。

1年の単元「おおきなあれ わたしのはな」では、一人一鉢で種から花を育てる活動に取り組んだ。発芽した花の苗に自分で名前を付けて呼んだり、世話の仕方をみんなで話し合ったりすることで、栽培を「自分事」と捉え、愛着をもって育てることができた。また、意図的に一鉢にいくつかの種を蒔いて複数の苗が育つ状況をつくり、ある程度育った段階で「1本を大きく育てるために、間引きをするかどうか」という正答の定まらない問いを投げかけ、話し合わせた。低学年でこのような話し合いをするのは難しいのではないかと考えていたが、子どもたちは自分なりに考え、「苗がかわいそうだから間引きはしない」「大きな花を咲かせるために間引きをする」「間引きした苗は捨てるのではなく学校の花壇に植える」といった意見を述べた。E S Dの可能性の広がりを感じた。

(2) ユネスコスクールの利点

「ユネスコスクールになると何かいいことはあるのか」という質問をよく受ける。

6年の実践「アートマイルプロジェクト」は、昨年度のユネスコスクール交流会で実践発表を聞き、今年度、ユネスコスクールのウェブページで紹介されていたのに目を留めて、参加を申し込んだ。E S Dやユネスコスクールとの関わりがなかったら、気付くこともなかったであろう。

関わり、つながることで、子どもたちの学びが深まるとともに、大人も学び、自分の世界を広げていくことになる。そして、それを子どもに返していく。そんな営みの繰り返しの先に、持続可能な社会が見えてくるのかもしれない。

(3) 今後の課題

「学校ぐるみでE S Dを」との目標に向かって、全学年で実践はしたが、まだ学校全体で系統的に取り組んでいるとは言い難い。1時間の授業、1つの単元の実践を蓄積していくことによって、学校全体のE S Dをつなげていく。その上で、6年間をかけて持続可能な社会をつくる担い手を育てていきたい。

※参考文献

- 1) 「New! E S Dカレンダーのすすめ」江東区立八名川小学校 2011. 6. 3
- 2) 「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究 最終報告書」国立教育政策研究所 2012. 3
- 3) 「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト（International Intercultural Mural Exchange）」ジャパンアートマイル＜JAM＞ <http://www.artmile.jp/>

- 43 -

ESDの視点	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	活動を考え、テーマを決めよう② 主体的な思考										
自然とのつながり	やさいをそだてようⅠ⑫ ガイダンス・苗植・観察栽培活動				やさいをそだてようⅡ⑤ サツマイモの収穫・冬野菜の苗植栽培活動・体験型活動				やさいをそだてようⅢ⑧ 冬野菜の収穫体験型活動		
社会とのつながり	お川のまちをたんけんしようⅠ⑮				お川のまちをたんけんしようⅡ⑳				ゆうびんきょくをひらこう④		
人とのつながり	ガイダンス・コース決め プレ探検・まとめ 体験型活動・地域連携				ガイダンス・本探検・発表会・まとめ 体験型活動・地域連携・多様な立場の人と学ぶ フェスティバルをつくろう⑦ ガイダンス・コーナー 主体的な行動・やり遂げたときの充実感 関わる人が互いに学び合える あんなに小さかったのに⑥ 自分の誕生 生命尊重				郵便活動 体験型活動 あんなに小さかったのに⑩ 自分の成長を振り返る・まとめ 生命尊重・多様性の尊重		
教科等との関連	<国語> だいじなことをおとさずに話したり聞いたりしよう プレ探検発表会 関わる人が互いに学び合える				<国語> しょうかい文をかこう 新聞作り <音楽> おまつりの音楽 太鼓の音色 やりズム <道徳> 大すき緒川おせわになった人へ 郷土に愛着をもつ 本探検発表会 関わる人が互いに学び合える <国語> 図書館のひみつをさがろう						

ESDの視点	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	活動を考え、テーマを決めよう③ テーマの話し合い 主体的な思考										
自然とのつながり											
社会とのつながり	おじいさん、おばあさんから学ぼう 東楽会の人たちとなかよくなろうの会をしよう⑤ おばあさん 昔の遊びを作ろう⑭				おじいさん、おばあさんから学ぼう 昔のくらしを体験しよう⑧ 体験したことを生活に生かそう⑥				おじいさん おばあさんから学ぼう 戦争のころの話を聞こう④	おじいさん おばあさんから学ぼう ありがとうの会を開こう⑮	
人とのつながり	昔の話を聞く 多様な世代の人と学ぶ 体験型活動・地域連携 昔の遊び作り (竹馬・竹ぼっくり・竹笛 竹てっぽう・竹とんぼ)				昔のくらし体験 (すいとん・おにまんじゅう・七輪・縄ない・五右衛門風呂) 多様な世代の人と学ぶ 体験型活動・地域連携 フェスティバルを創ろう⑫ シンボル・コーナー 子どもの主体的な思考 やり遂げたときの充実感				戦争のころの話を聞く 多様な世代の人と学ぶ	東楽会の人たちに感謝する会 子どもの主体的な思考や行動 やり遂げたときの充実感	
教科等との関連	<国語> 手紙を書こう お礼の手紙				<社会> 昔の道具と人びとのくらし 地域の人々の知恵や願い 地域連携	<社会> 昔からつたわる行事 地域に残る文化財や年中行事 地域の文化財			<国語> 物語の感想をまとめよう (ちいちゃんのかげおくり) 戦争に関する物語 平和教育	<道徳> お年寄りに感謝しよう	

ESDの視点	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	テーマを決めて、活動内容を考えよう② 主体的な思考										
自然とのつながり	環境問題について考えよう 自分にもできるエコ活動を考えよう⑤ 調べ学習 環境教育・主体的な行動 やり遂げたときの充実感		環境問題について考えよう 自分にもできるエコ活動をしよう⑤ 緑のカーテン作り 環境教育・主体的な行動 やり遂げたときの充実感								
社会とのつながり	環境問題について考えよう 環境問題について知ろう⑩ 校外学習 地球環境教室 環境教育・体験型活動・地域連携				環境問題について考えよう 学年でできるエコ活動をしよう⑥ 地域のごみ清掃，エコ・モニュメント作り 環境教育・体験型活動・地域連携						
人とのつながり					環境問題について考えよう 環境に関する自由研究発表会② 個人活動のまとめ 環境教育		環境問題について考えよう 環境をテーマにフェスティバルをつくろう⑭ コーナー モニュメント 環境教育・主体的な行動 関わる人が互いに学び合える		1/2成人式に向けて10年の人生をふりかえる⑥ 自分の人生に関わった人 主体的な行動		1/2成人式をつくろう⑮ (環境に関連) どんな大人になりたいか 主体的な行動 関わる人が互いに学び合える
									1年間の学習のまとめ② 相互発表 関わる人が互いに学び合える		
教科等との関連	<社会> ごみのしまつと活用 ごみ処理に関わる対策や事業		<社会> 命とくらしをささえる水 飲料水の確保に関わる対策や事業		<理科> 春と植物 夏と生き物 植物を育てる		<国語> 調べて発表しよう 自由研究発表会 関わる人が互いに学び合える				

ESDの視点	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	活動を考え、テーマを決めよう② 主体的な思考										
自然とのつながり	羊の世話をし動物の命を学ぼう② 飼育活動・体験型活動				お米を育てて植物の命を学ぼう⑨				お米を育てて植物の命を学ぼう（振り返り）①		
社会とのつながり	東楽会の方から学ぼう会① 代かき・田植え・一人一鉢の米作り（東楽会の方から学ぶ） 栽培活動・体験型活動・地域連携 主体的な思考や行動 多様な世代の人と学ぶ				鳥対策・稲刈り・稲こき（東楽会の方から学ぶ） 栽培活動・体験型活動・地域連携 主体的な思考や行動 多様な世代の人と学ぶ				東楽会の方への感謝（収穫した米でおにぎりをにぎり、味噌汁とおひたしも合わせて、お礼の会に招待する） 東楽会の方へのお礼の会② 多様な世代の人と学ぶ・地域連携		
人とのつながり	命のエネルギーのつかい方を考えよう③ 命について語る会②（外部講師） 命のつかい方を話し合おう① 林間学校を創ろう⑪（命のつかい方実践Ⅰ） 自主運営キャンプ・「食」を見つめ直す 主体的な行動・つながり重視 やり遂げたときの充実感				自分の命のエネルギーのつかい方を探ろう④ オープン・タイム（命のつかい方実践Ⅱ） 主体的な行動 やり遂げたときの充実感 福祉実践教室② 多様性尊重				自分の命のエネルギーのつかい方を確かめよう⑤ 自分の命のつかい方実践Ⅳと発表⑤ 6年生を送る会（命のつかい方実践Ⅴ）③ 生命尊重・多様性尊重 自己肯定感		
教科等との関連	<家庭科> ごはんと味噌汁をつくろう <理科> 発芽と成長 <社会> 米作りのさかんな地域				<道徳> 畏敬の念をもとう <社会> 米作りのさかんな地域 <国語> 自分の考えをまとめて討論をしよう						

実践3 環境を見つめ、考え、働きかける生徒の育成

—環境学習を基盤としたE S Dの展開—

岡崎市立新香山中学校 山内 貴弘

1 はじめに

「セバンスズキさんのような人になりたい。12歳と私よりも3つも年が下なのにきちんと世界のことを考えている。今、私の身の回りに世界のこと、未来の人たちのことを考えている人は恐らくいない。未来を作るのは、私たちなのに…」平成23年11月17日、3年1組道徳の授業後の感想。環境学習プログラムの理念である「知識、行動力、思考力」を身に付けた『地球人』育成の取り組みは、今年3年目を迎えた。



環境学習の授業風景

岡崎市では、平成22年度より岡崎市環境学習プログラムが実践導入されている。本校もこのプログラムを生徒の実態や地域の特徴に合わせ、実践検証を進めてきた。この取組を通して、少しずつ素直に自分を見つめ、未来や社会に目を向けることができるようになってきた。その中で行った「伝説のスピーチ」に学ぶ授業で、持続発展可能な社会をイメージすることができた。

本研究は、岡崎市環境学習プログラムとともに歩んだ「未来志向の生き方学習」の歩みである。

2 研究の目的

(1) 目指す生徒像

研究主題を受け、目指す生徒の姿を次のように示した。

- ・環境についての豊かな知識を身に付けた生徒
- ・環境を守るためにどうしたらよいか的確に考えることができる生徒
- ・自分の生活を振り返り、環境保全のために積極的に働きかける生徒

研究仮説

次のような仮説のもとに実践を行うことにした。

- ・生徒が環境に関する身近な問題を見つめ、世界で起きている環境変化や環境問題と結び付けて系統的に学習を行うことによって、次世代に引き継ぐことのできる社会のあり方をイメージし、自分にできることを考え、主体的に働きかけることができるようになるであろう。
- ・岡崎環境学習プログラムを地域の特長や生徒の実態に合わせて、E S Dの視点で分析、実践を重ねることによって、生徒は持続可能な社会をイメージし、自分の生き方を高めようと動き出すようになるであろう。

(2) 研究の方法

手だて① 地域教材を開発する。

岡崎環境学習プログラムを基盤として、新香山の地域教材を取り入れたカリキュラムを創造する。

手だて② 探究学習での教師支援のあり方を工夫する。

関わり合いの授業における「教師の仕掛けと支援」の在り方の実践的検証をする。

手だて③ 『E S D新香山プラン』を取り入れる。

E S D新香山プランを開発し、授業に取り入れる。

3 研究の内容

(1) 岡崎環境学習プログラム

「21 世紀は、環境の世紀」といわれるように地球の環境に対する危機感や保全の取組は、我が国のみならず、今や世界の潮流となっている。本市においても、そういった背景の中で「人間と環境の関わりについての正しい認識に立ち、2010 年に「自らの責任ある行動をもって、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる人材を育成すること」の育成をねらいとした「岡崎環境学習プログラム」を制作した。実践一年目となる昨年度は、市内 70 の小中学校での状況をまとめ、成果と課題を明らかにした。

本プログラムの特徴は、以下の 2 点である。

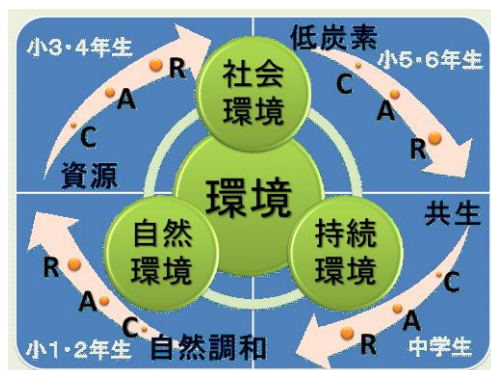
- ・義務教育 9 年間の学習内容、身に付けたい力に系統性がある。
- ・総合的な学習の時間、各教科とのクロスカリキュラムとして扱う。

さらに、学ぶべき環境は、自然環境はもとより、社会環境、そ

図 1 学習領域（目指す 4 つの社会）



図 2 学習分野と探究学習



※C: Catch (つかむ), A: Action (行動する), R: Reflection (振り返る)

して持続可能な社会作りのための環境（E S D）の 3 つを対象分野とした。これら 3 つの環境（学習分野）を視点に、子どもの発達段階を考慮に入れ、教育課程の見直しを図りながら 4 つの学習領域を定め（図 1）、年間 15 時間を基本とするプログラムを作成した（図 2）。

本プログラムは、すでに市内の各学校で独自に進められている地域カリキュラムを基盤として、学校の創意工夫を加え、地域や子どもの実態に合わせて学習展開の工夫がされるように柔軟な対応を求めている。また、単元終了後には、パフォーマンスを設定し、子どもたちの知識、思考力、行動・意志決定を取り出すよう設定されている。

(2) E S D 新香山プラン（手だて③）

I 「何を学ぶか」 E S D の 6 つの視点で環境学習を見直してみると学ぶべきキーワードが浮かび上がる。

	1 年「動物たちとの共生社会を考えよう」	2. 3 年「持続可能な社会づくりのための共生を考えよう」
S : solidarity 相互性	自分自身や自分の住む地域と自然、社会とのつながりを意識する。	つながり（人、社会、自然、未来）を意識して行動しようとする。
H : highly-diverse 多様性	生き物の立場で環境の変化を実感し、生物の役割や多様性の大切さを実感する。	様々な立場（消費者、生産者、地域住民、震災に遭った中学生）で考える。
I : incessancy 有限性	獣害の背景には森の変化があり、このままでは地球が維持できないことを実感する。	資源・エネルギーは有限であることを実感し、エコ活動の必要性を実感する。
N : non-discriminatory 公平性	生き物と人間との共生社会の必要性和折り合うことの難しさを実感する。	電力供給など、具体的な視点で持続可能な社会づくりのための方策を考える。
C : commitment 責任性	身近な自然の変化は人間の生活が関係しており、その責任を実感する。	世代を乗り越えた倫理観を大切にして、自分事としてとらえる。
A : Act in union 連携性	みんなで話し合い、取り組む必要があることを認識し、意欲を高める。	地域や社会全体で取り組む必要であることを認識し、意欲を高める。

II 「どのように学ぶか」 プログラムの身に付けたい力と E S D の 7 つの能力観点は、以下のように共有化することにした。

	CATCH	ACTION	REFLECTION
① 批判的に思考・判断する力	A 課題識別・設定能力		
② 未来像を予測して計画を立てる力	A 課題識別・設定能力		
③ 多面的・総合的に考える力	A 課題識別・設定能力		
④ コミュニケーションを行う力		B コミュニケーション能力	
⑤ 他者と協力する態度		C 自他の理解能力	E 環境社会設計能力
⑥ つながりを尊重する態度		D 活動環境整備能力	F E S D 実践力
⑦ 進んで参加する態度			F E S D 実践力

更にESDの7つの能力・態度の観点の探究のスパイラル（p. 49 図2）に合わせて並び替えてみる。

- ① 批判的に思考・判断する力
- ② 未来像を予測して計画を立てる力
- ③ 多面的・総合的に考える力
- ④ コミュニケーションを行う力
- ⑤ 他者と協力する態度
- ⑥ つながりを尊重する態度
- ⑦ 進んで参加する態度

III 「どうやって進めるか」

手だてと方法を「つながり」をキーワードにして指導案に明記するようにした。
例) 6つの視点と3つの留意点の関連表 「未来の日本と地球のために私たちができること～ECOアクションを振り返ろう～」より

視 点	つながり			活 動	手だてのキーワード
	教材	人	能力・態度		
S相互性					
H多様性	◎	◎		4, 5	「ゆうだい君の手紙」をゆさぶり資料として使用する。
I 有限性	○				未来志向で原子力発電を考えたとき、安全性が課題であることを押さえる。
N公平性					
C責任性	◎	○	◎	3	自分たちがこれまで行ってきたエコ活動で節電できるかどうか、体験をもとにした話し合いを構成する。
A連携性	○	◎	◎	5	持続可能な社会実現に向けて追究課題を設定する。

(3) 実践Ⅰ「中学校2年生の実践」

「持続可能な社会づくりのための共生を考えよう」

ア 企業の責任（CSR）に向かう 第5～7時
岡崎市環境学習プログラムの組み換えにより、1学期は職場体験学習を基盤に据えた学習を展開した。加えて社会見学で浜岡原子力発電所やヤマハ発動機を見学し、環境に対する多様な視点をもてるように体験活動を中心に構成した。さらに夏休みに実施した職場体験学習を通して、生徒たちは企業のエコを調べ、分かったことを学年集会で発表し、お互いの考えを共有した。「エアコンの温度設定が28度」「使わない部屋の電気は消す」「そうじなどで使用した水を使用しての植物への水やり」など、企業が取り組むエコは多数あり、生徒の中には「私も家のエアコンの温度設定を28℃にするようになりました」と話す生徒もいた。ここで、「どうして企業は利益追求とは関係のないエコの取り組みをするのか」に課題が焦点化されてきたので、単元前半のまとめとしてCSRを学ぶ時間を構想した。

注 CSR : corporate social responsibility 企業の社会的責任

イ 環境家計簿に会う 第8～13時

これまでの学習をCSRとしておさえるために、社会見学や職場体験学習の振り返りをする学年集会を設定し、ゲストティーチャー（GT）を招聘して、事業所のエコの取り組みについて話し合った。事業所ごとにエコの取り組みを発表しながら、企業が社会貢献をしている理由を考え、GTのお話でCSRをまとめた。さらに、二酸化炭素の排出削減のためには社会全体で取り組むことの大切さを実感することができた。
また、これまでの実践から環境問題を学んでいくと生徒の視点が世代を超えた未来へと広がっていくことが明らかになった。そこで、環境問題を学ぶことは社会とのつながり、未来とのつながりを意識して考えたり、行動したりしようとするESDのねらいと共通すると考え、ESDの視点や留意点を取り入れ、持続発展可能な社会をイメージできる学習になるようエコ活動の教材化に取り組んだ。今回の学習では環境家計簿



社会見学後のまとめ

の取り組みを通して、防災やエネルギーの視点からもエコ活動を考えることができるように、気仙沼市の中学校との環境家計簿の数値比較の場面を設定することにした。

ウ ECOアクションを深めよう！絆 第14～15時
10月になると、生徒たちは環境家計簿作りに取り組んだ。家庭で消費されている電気、ガス、水道などの具体的な使用量を知り、そこから今の自分にできるエコ活動（ECOアクション）を考え、実行してきた。第1回環境家計簿報告会では、グループや学級全体でその数値の比較を行ったり、順位付けをしたりして分析を試みたところ、各家庭の差が大きすぎたため、有効なエコ活動が浮かび上がらなかったため、課題として残った。

そこで、東日本大震災で被災した気仙沼市の環境学習や復興に挑む中学生の取り組みを学び、持続可能な視点で街づくりを考える時間を設けることにした。本校のように環境学習を実践している気仙沼市立唐桑中学校と交流し、環境家計簿の数値を比較する授業を行った。この交流では、被災の経験談も聞くことができ、持続可能な視点で社会を見直し、自らの生き方を見直すきっかけにすることをねらいとしている。そして、相手校の学級の雰囲気や生活の様子も感じながら授業を進めたいという思いから、テレビ会議の形で授業を構成することにした。唐桑中学校とのテレビ会議を行うに当たり、生徒が環境家計簿の数値やエコの取り組みに対して、自信をもって自分なりの意見を発表することができるよう、グループごとに意見交換する場面を設定した。また、気軽に話ができる人間関係を作るために、給食の時間や帰りの会、昼放課の時間など、授業以外の場面も使ってこまめに唐桑中学校と交流する場をもった。また、テレビ会議までに唐桑中学校の「環境家計簿」の数値や「お互いの生活で何が異なるのか」「相手校がどんな疑問をもつか」などを予想して、本時を迎えた。

導入で両校の環境家計簿を比較したところ「ガソリン代はなぜあんなに多いのかな。震災でバスとか動いていないのかも」「電気代はこちらの方が多い。福島原発が止まっている影響があるのかな」など、震災に触れるつぶやきが数多くあった。そこで、唐桑中学校に震災当時の様子を質問した。家が流される、仮設住宅での生活、2週間風呂に入れなかったという先生の話、ライフラインが止まり生活に困窮したなどの話を丁寧にしてくれた。これを機に生徒の表情ががらっと変わり、教室内がより真剣に唐桑中学校にECOアクションを提案しようとする力強い雰囲気になった。本校からは、「オリジナルエコバッグを作る」「エコ条約を結ぶ」などのアイデアが出され、唐桑中学校の生徒から同意する声があがった。交流によって、ともに歩んでいこうという意識が広まっていくのを感じた。

エ 未来の原子力発電を考えよう 第16～18時
3学期は、環境学習プログラムの2年生と3年生の橋渡しとして、1年間のエコの取り組みを振り返り、これからのエネルギー供給について考える授業を構想した。これまでの学習で、生徒たちは環境家計簿に関する学習を通して、電力がエネルギー消費の基盤にあり、環境に多大な影響を与えていることを実感した。さらに、唐桑中学校との交流から、防災



テレビ会議の様子



ECOアクションの提案



未来の原子力発電を考える討論

の視点で持続可能な社会づくりを考えることの大切さに気付きつつある。さらに、パフォーマンステストを

行ったり、1年間の活動を振り返ったりする中で、「エネルギーの未来」「持続可能社会をどう具体的にイメージするか」という新たな課題が浮かび上がってきた。そこで、発展学習として原子力発電の在り方を考える話し合いの授業を構想した。本学級の生徒たちは、6月に社会見学で静岡県浜岡原子力発電所を見学している。世間で原子力の安全性の問題が取りだされ、国内の原発が相次いで休止になるのは社会見学の2週間後である。見学時、生徒たちは二酸化炭素を排出しないエネルギーというイメージで原子力発電の特長を学んでいる。そうした情報を押さえている生徒たちが、持続可能な社会に必要なかという視点で価値判断



「ゆうだい君の手紙」を読んで

する授業として計画した。16, 17, 18時の小単位では、特に「H多様性」「C責任性」を大切に手だてを考えた。まず16時では、教科横断的に社会科の学習を取り入れ、日本と世界のエネルギー供給の実態や原子力発電と自然エネルギーによる発電の違いについて学習した。さらに、17時で学びが進むにつれて原発反対派と賛成派が対立してきたので、18時で討論会を行うことにした。18時の話し合いでは、生徒の意識をゆさぶる資料として「ゆうだい君の手紙」を提示することにした(p. 53 資料2)。多様な立場の考えの存在に気づき、総合的に判断する必要性を実感させるようにしたいと考えたからである。この学習を通し、生徒たちが「未来の日本や世代のために、今自分が意志決定することは何か。さらに今、行動することは何か」について真剣に考えることが自らの生き方を高めていこうとする姿勢につながり、さらに3年次の学習につながる動機付けとなると考えた。

授業では、最初に脱原発賛成派と反対派の代表生徒を一人ずつ指名し、基調提案をさせ、その後、少数派であった反対派の生徒から指名した。反対派は、人間の生活がエネルギー消費によって成り立っていることを根拠にして、原子力発電の必要性を述べた。それに対して賛成派から、放射能の危険性や節電の取り組みによって電力不足は回避できるなどの意見が出た(資料1)。

(資料1 第18時の展開)

段階	生徒の活動	教師の支援
問題 (1)	1 本時の学習課題を知る。 脱原発！あなたはどう考える？	・本時の学習課題を提示する。
活動 (40)	2 脱原発の問題提起(基調提案)をする。 賛成：安全性が確立されていない。 反対：ないと電力供給不足になる。 3 原子力発電についての自分の考えとその根拠をはっきりさせて、討論する。 反対派：安定供給 ・原発なしでは電力不足になる。 ・安定供給のために原発は必要。 ・地球温暖化の対策になる。 ・日本の技術力なら安全確保は可能だと思う。 賛成派：危険 ・繰り返される事故。 ・チェルノブイリ・スルーマイル島。 ・使用済み核燃料処理の問題。 ・40年で廃炉になれば、コスト安にならない。 4 「ゆうだい君の手紙」を読み、意見交流をする。	・賛成派と反対派の代表一人ずつ指名し、基調提案のように発言するよう指示する。 ・賛成派は、安全性というキーワードが浮かび上がる生徒を指名する。 ・反対派は、電力供給で必要という考えを基盤に据える。 ・賛成か反対かの立場をはっきりさせて話し合いに参加させるようにするが、迷っていたり、話を聞いて考えを変えたりした生徒がいないか常に問いかけながら進めていくようにする。 ・板書で対比が分かるように工夫して書く。 ・これまでの自分たちのエコ活動を振り返った意見が出たら、立ち止まり、話し合う(C責任性) ・電源別発電電力量や掲載されている新聞記事の内容、放射線の影響などにふれる意見が出たら、立ち止まり事実を確認する。 ・脱原発賛成派の考えを後押しするタイミングで「東電は人々のことを考えているかの記事」を提示する。(H多様性) ・「世の中ではどういう立場の人が脱原発反対派なのだろう」と問い返す。(H多様性) ・ゆうだい君の手紙を配布し、範読する。

	・今までは電気を使う人の立場で考えていたけれど、作る人たちの思いもあるんだな。 ・話し合うと書いてあったけど、もっといろいろな情報を得ながら判断をすることが必要だな。 ・とにかく分からないことが多い。 5 考えを深め、判断するためにどんな情報が必要なのか考える。 ・供給の情報 ・原発の近くに住む人の思い ・外国の取組、実情、意識	・自分の思いを記述させることなく、短くてもよいので感想をつなげていくように発問する。 ・思いの変化や今後の追究の視点となるキーワードを意見の中から拾い、板書する。(H多様性) ・「話し合う」というキーワードから何を話し合うべきかに視点を当てて考えるようにする。(A連携性) (C責任性) ・意見が出なかったら、近くの仲間と話し合う機会を設ける。 ・福島原発に近い東北の人がどう思っているか知りたいという意見が出たら、唐桑中学校の様子を知らせる。(H多様性) (A協調性)
整理 (9)	6 本時の自己評価をする。 ・「振り返りシート」に記入する。	・本時の話し合いを振り返り、どんな思いをもったか記述する。

資料 2

ゆうだい君の手紙 (一部省略)

突然ですが、僕のお父さんは東電の社員です。三月二十七日の毎日小学生新聞の一面に「東電は人々のことを考えているか」という見出しがありました。読んでみて、無責任だと思いました。

みなさんの中には、「言ってるとおりじゃないか。どこが無責任だ」と思う人はいると思います。たしかに、ほとんどは事実です。

・ ・ ・ ・ ・ (略) ・ ・ ・ ・ ・

原子力発電所をつくったのは誰でしょうか？もちろん東京電力です。では、原子力発電を作るきっかけを作ったのは誰でしょう。それは、日本人、いや世界中の人々です。なぜ、そう言えるかというとこう考えたからです。発電所を増やさなければならぬのは日本人が、おそくまでスーパを開けたり、ゲームをしたり、無駄に電気を使ったからです。

・ ・ ・ ・ ・ (略) ・ ・ ・ ・ ・

あえてもう一度書きます。ぼくはみんなが話し合うことが大切だと言いたいのです。そして、みんなでこの津波を乗り越えましょう。

教師のねらいは、原子力発電を通して自分たちのエコ活動の必要性を実感することであったので、賛成派の考えが広まった段階で、ゆさぶり資料として「東電の責任」という新聞記事、それに対して書かれた「ゆうだい君の手紙」を提示した。資料から、原発に関して多様な考えがあることを知り、C19、C20、C21の考えが出された。授業後の感想にも、「現実として原子力発電が停止に向かっている今こそ、自分たちは行動しなくてはならない」と書かれたものがあり、自分の生き方そのものを考え直している姿が見られた。



板書の様子

<授業記録 第18時>

T20: みんなの生活に電気ってそんなに必要。

C16: 昔の人は電気をそんなに使っていなかったの、電気は必要ないと思います。

T21: 本当に必要ないの。

C17: 昔は便利な家電もそんなになかったの、電気は必要なかったけど、今の私たちの生活には携帯など、必ず電気を使うから、電気を使わない生活なんて不可能だと思います。

C18: 現実的に電気のない生活は無理だけど、原子力も危険だし……。新エネルギーで将来は電気をなんとかしていきたい。

●東電の責任 ●ゆうだいくんの手紙

C19: 「原子力は危険、危険」って言うていたけど、僕は夜遅くまで起きて電気を使っているの、無責任だと思いました。

C20: テレビを見たりして電気を使うから、これからはみんなでエコを意識して生活するといい。

C21: みんなで今後原発をどうするかを話し合う場をもっとつくる。

(4) 実践Ⅱ「中学校3年生の実践」

ア 「低炭素社会を実現しよう」第23～24時

2年生では、地球温暖化の原因となっているCO₂排出量を、環境家計簿によって算出してきた。各家庭の電気や水道、ガスなどの明細表をとっておき、その使用量に係数をかけて行った。その他にも、1か月のガソリン使用量やごみの量まで調査しなくてはならなかったため、環境家計簿を完成させるまでに大変な手間がかかった。そこで、本年度は、電力だけに焦点を当てて調査することにした。また、原発再稼働問題や節電目標〇〇%などのニュースが毎日のように報道されていたため、生徒たちの電力に対する関心も高く、より自分事としてとらえることができると思ったからである。

さらに、今回は「エコ活動」を追究テーマとして設定した。節電意識が社会で高まっており、生徒たちも関心を示していた。「5%の節電ってできるのかな」「この夏は大変になりそうだな」という思いを掘り起こし、「自分たちのエコ活動について討論する」授業を構想した。そのためにクラスを3つの追究グループに分け、調査活動を開始した。

・各家庭の電力使用量を調べよう (エコチャレンジシートグループ)

今回は、電力使用量のみを調査するというので、毎日、各家庭の電気メーターの数値を記入するという方法をとった。この方法であれば、1か月の明細書も不必要であるし、その日の電力使用量その場で分かるという利点がある。そこで、クラス全家庭でエコチャレンジ前の5日間と、エコチャレンジ後の5日間の電力使用量のデータを取り、比較した。また、岡崎市のエコチャレンジノートを本校の職員全員が行い、そのデータも生徒たちが分析を行った(図3)。

クラスのエコチャレンジの結果 -2.6%

このままではいけないと思います。このクラスでも2.6%しか節電できていないので、日本中の人が取り組んだとしてもあまり変わらないと思います。
(エコチャレンジ集計後の生徒Cの感想)

・新エネルギーについて調査しよう (エネルギー調査隊)

原子力発電は、CO₂を排出しない発電として近年まで急速に増加しており、日本の総発電量に占める割合は大きかった。しかし、東日本大震災以降は、放射能の危険性をもつとして次々と運転を休止している。2年生の最後に、脱原発についてどう考えるかという授業を行った時には、多くの生徒が原発は今後も必要であると考えていた。そこで、原子力発電や新エネルギーと言われている太陽光発電、風力発電などを、メリット、デメリットに分けて調べることにした。そして、原子力発電については、どのような危険があるのか、再稼働に向けた安全対策は本当に大丈夫なのかという視点で、詳しく調べた。また、太陽光発電については、学区の新興住宅地に建つ家の屋根にはソーラーパネルが多く設置されていることから、聞き取り調査を行った生徒もいた。

緑陽台へ調査に行って、いろいろなことを知ることができてよかったです。太陽光発電は設置する費用は高いけど、10年ぐらいで設置費用分が返ってくるし、CO₂も出ないし、とてもいい発電方法だと思います。私の家にも付けたいです。でも、取り付け費用が高いらしいので心配です。

(「エネルギー調査隊」生徒Dの感想)

・エコアイデアを考えよう (エコアイデア組)

低炭素社会の実現に向け、特に電力消費を抑えるという視点でエコアイデアを考えた。家庭や会社でできるエコを調べたり、電化製品別に消費電力量を調べたりしたことで、今後の生活に生かせることを見つけようとする姿が見られた。また、夏を乗り越えるためのエコグッズを調査し、さまざまな商品が開発されていることも学んだ。

図3 エコチャレンジシートの内容

電力使用量どこまで減らせるかチャレンジ

名前()

チャレンジ前の電気使用量

KW

チャレンジ開始!

	電気メーター数値	1日の使用量
6月11日(月)	KW	
6月12日(火)	KW	KW
6月13日(水)	KW	KW
6月14日(木)	KW	KW
6月15日(金)	KW	KW
		合計 KW

図4 生徒Eのポートフォリオの内容

家電の消費電力			
冷蔵庫（標準）	150-400W	ドライヤー	800-1200W
トースター（加熱時）	1000W	アイロン	1200W
電子レンジ	1200W	掃除機	1200W
電圧調整器（車上）	1200W	コタジ	600W
自動洗濯機	1300W	電気カーペット	500-800W
炊飯器	300-700W	ハロゲンヒーター	500-1000W
炊飯器（IHタイプ）	700-1300W	加湿器	300-500W
ホットプレート	1300W	液晶テレビ（20型）	150W
洗濯機	600W	プラズマテレビ（20型）	240W
自然乾燥	60W	蛍光灯	11W
エアコン	650W	LED電球	5W
炊飯器（圧力炊飯）	800-1000W	ブラウン管テレビ22型	230W
掃除機	1000W	デスクトップPC	130-300W
加湿器	30W	ノートPC	50-150W

	消費電力	1日3時間（1か月）円
エアコン	650W	1233.8円
扇風機	50W	94.9円

	消費電力	1日3時間（1か月）	電球2個（1か月）	電球3個（1年）	寿命
LED	5W	58円	1180円	14160円	40000時間
蛍光灯	11W	1311円	2620円	31440円	6000~12000時間
白熱電球	60W	713円	14260円	171120円	1000~2000時間

昼間は、エアコンの消費電力が一番多いことが分かったので節電したい。また、エコグッズは年々高性能になっているので、これを使えばこの夏は大丈夫。
（「エコアイデア組」生徒Eの感想）

イ「この夏を乗り切るエコ活動を考えよう」第25～27時
ここでは、前時までに3つのグループに分かれて調査したことを発表し合い、まず情報を共有した。その後、節電が叫ばれている夏を乗り切ることができるのか、乗り切る方法は何かということをし話し合うようにした（図4）。

・「徹底討論！エコで乗り切れるのか？今年の夏」（第27時）
この夏の節電目標は5%と言われていたため、それが可能かどうかという考えをもち、ポジティブ派とネガティブ派に分かれて討論を行った。

ポジティブ派の主な考え

- エコグッズを使えば、今よりも使う電気の量が減ると思う
- 消費電力や待機電力を減らすなどの努力をすれば大丈夫。電力消費のうち、待機電力が全体の7%もしめている
- 節電はやり方を知らなかったただけだから、実践していけば大丈夫

ネガティブ派の主な考え

- 去年は原発が多く動いていてもつらかったから、今年はずっとつらいはず
- 多くの人はエコ生活を継続できない
- 前から節電、エコだといっているけど全然変化が見られないから
- エコグッズはたくさんあるけど、学校や会社で使えないところも多い

話し合いでは、まずネガティブ派が3名発言した。その後、ポジティブ派を指名していった（授業記録①）。前半は、エコが継続的にできるかどうか話し合いの中心となった。ここでのポイントは、クラス全家庭で取り組んだエコチャレンジの結果がマイナス2.6%に終わったということだった。ここからエネルギーの現状について視点を設け、話し合いを深めたかったので、T13の教師の出を行った。（p.56 授業記録②）この日の数日前に大飯原発が再稼働したことで、この地域の節電目標は0%という発表があった。生徒たちはそのことを知らなかったため、T13でそのことを伝えた。すると、生徒たちは「よかった」ではなく、逆に意識を高めて「エコ活動の継続」の方向でまとまっていた。

その中で、C19のように、原子力発電の廃棄物について強い関心を寄せた生徒がいた。この生徒Fは、初めは原発推進派であり、昨年度の3月に行った「脱原発！あなたはどうか考える？」の討論では、原発がないと生活が維持できないという考えだった。ところが、原発についての調査活動とエコの取組について体験活動をしている中で、「自分たちにも何かできる」という手ごたえを得て、考え方が変わっていった。この生徒

<第27時の授業記録①>

C3：えっと私も今年の夏は乗り切れないと思います。理由は、だいぶ昔から節電だとか言っているけど全然変化がないし、昔よりも地球温暖化が進んでいるような気がするの、今年もみんながいきなり節電とかしないと思うので難しいと思います。

C4：なんか昨日の発表で聞いたように、気温は平年並みとかいっていて、私は去年、クーラーなしで死んじゃうんじゃないかというくらい限界でクーラーつけてしまったので、たぶん同じような人がたくさんいてみんなクーラーつけちゃうと、なんか電力不足になっちゃうんじゃないかなと思って、乗り切れないかなと思います。

T4：じゃあポジティブ派の人はどう。

C5：わたしは大丈夫派で、消費電力が一番多いのが、エアコンと照明機器で、それぞれ節電方法があるから、それをみんながやっていけば大丈夫だと思います。

C6：ぼくは、乗り切れると思います。なぜなら、家庭内でできる節電方法がいろいろあるので、それを一人一人がやっていけば、大丈夫です。

Fの考えこそ、未来世代との公平性や自分たちの責任性をとらえていると判断し、クラスに広めたいと思っていた。そこでC19の後、さらに詳しく語ってほしいと願い、問い返しをし、C20を引き出した。そして、「核廃棄物を地下に貯蔵する映像」の提示につなげた。この映像を視聴して、原発推進派であった多くの生徒に、原発に対する意識の変化が見られた。授業のまとめの段階で、意見が変わった生徒に問いかけをしたところ、生徒Gは持続性を視点にして考えが変化したことを語った。

<第27時の授業記録②>

T13：大飯原発が動いたよねえ。それに関係して、つい数日前、君たちが調べ学習しているときにこれまで削減目標、節電目標が5%ですよって言っとったのがなんと「0%」になりました。つまり、制限解除。もう5%もなしと発表されました。

C16：その中部電力が0%にしたこともだめだし、原発が、それは中部電力のことではないですけど、大飯原発つけてしまったこともやっぱりよくないと思います。せっかく今まで5%で頑張ろうって言ったのに、なんでいきなりその大飯原発がついて0%っていうのが、私的には本当に意味が分からなくて、なんか、せっかくここまでやってきたらこれからも節電って言うのを意識して暮らしていけばいいかなって思います。

C17：私もC16さんと一緒に、自分たちが頑張るとか0だからやめるとかじゃあなくて、ちゃんとやったほうがいいと思います。

C18：大飯原発が起動しても、起動したからって中電が5%から0%にしたことは許せないもんで。なんでかという東海地震とかが起きるもんで、原発が壊れてまた2011年と一緒になっちゃうもんで0%はやめた方がいい。新エネルギーとかで電気を蓄えた方がいい。

C19：原発を再稼働しても、電力はまかなえるかもしれないですけど、今は放射性廃棄物っていう世界中でどうしたらいいかわからないようなごみがあるわけで、それを今でもなんか再処理とかどうしようみたいな、結局は何も解決しないまま大飯原発も再稼働して、また放射性廃棄物を出すだけなので、もっと放射性廃棄物をどうするかっていうことを解決してからつけるならつけてもいいかなって思います。

放射線が、放射性廃棄物のごみになっても出続けるし、将来その放射線が何も出ない状態に戻るには100万年かかるって言われているので、今は自分たちでどうしようどうしようって言ってやってるけど、なんか後世の人たちに原発のごみを預けるだけで、その人たちは何も悪くないのに、今の私たちのために原発を作っているけど、未来の人たちは原発がついてたってことに関して何も得はないと思うので、ごみが増えるだけでだから良くないと思います。 (C20の生徒Fの考え)

ぼくはFさんの話を聞いて意見を変えました。今は原発を使っても仕方ないかもしれないけど、原発を稼働して電力を確保している中でも節電を頑張っていく必要は絶対にあると思います。それで、将来的には原発を使わなくてもいいようにしていけばいいと思います。 (ネガティブ派・原発推進派の生徒Gの意見)



映像資料視聴後の感想交流

こうして学年を接続して学びを進める中で、生徒たちは未来世代の人々との公平感や平等感を実感することができた。きっとこの子どもたちには、未来社会の姿が少しずつ見えてきたのだろう。そして、未来をつくるのは自分たちの行動次第なのだとその責任を実感することができたのではないかと考える。

学習はこの後、「伝説のスピーチをしたセバンスズキさんの思いと行動」について道徳で学び、「エコ宣言」で総括していく。義務教育の課程を終える生徒たちの少しでも多くが、確かな生き方キーワードを見つけてくれたらと願う。

(5) 評価について <パフォーマンステストの構成>

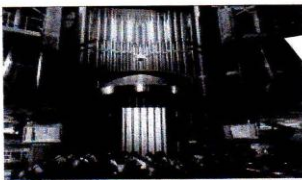
資料3 パフォーマンステスト設題1, 2

パフォーマンステスト (新香山中学校2年)

未来の地球のためにわたしたちができること

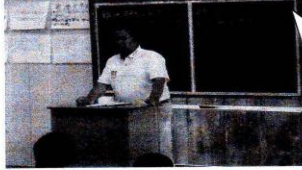
2年 生徒B

1 これまでの学習を振り返って、各問いに答えよ。



① 6月に見学した浜岡原子力発電所で知ったことを書け。

原子力発電をするためのエネルギーの中には危険なものもあって事故がおきた時には放射線などがもたらす危険がある。



②『企業の社会的責任』について知っていることを書け。

企業として活動していく上で、地域住民に迷惑をかけないように活動する責任がある。

(例) はいきガス・騒音・夜の明かりなど

*あなたが、職場体験で行った事業所のエコの取り組みでもよい。

2 裏の新聞の切り抜き(中日新聞3月1日)の内容をわかりやすくまとめて書け。

今中部電力浜岡原発は全面停止しており、同時に津波対策として巨大な防波壁の建設が急ピッチで進んでいる。使用済み燃料プールに関して中電は、「水の循環ができて低温に保てれば、放射性物質は放出されない」と考えている。浜岡原発は、ウラン燃費で千四百四十トンの使用済み燃料をプールに貯蔵しており、静岡県内の川崎町にある「燃料プール」に入れば安全というわけではないと述べる。その問題を解決するため、中電は水を長年安全に使用済み燃料を保管できる施設を開発すると公表した。住民からの声は、「そもそも核を残さずに処分してほしい」とのこと。

また、各電力会社の対策としては、非常時の電源や給水の確保はしたが、耐震補強やテロ対策はしていないとのこと。

岡崎市環境学習プログラムでは、エネルギー消費グラフの読み取りが設題となっている。

しかし、本校では、体験学習(社会見学・職場体験学習)やその振り返りの場が設定できたことから、それらの活動について問題を設定した。

〈設題1〉浜岡原子力発電所での聞き取り内容を記述することや職場体験学習後の振り返りの学習を想起させ、CSR(企業の社会的責任)の内容を設定した(資料3)。

〈設題2〉エネルギー供給に関する新聞記事の要約を問題化した。原子力発電の安全性の問題を報道されたものだが、この記事に対する意見や考えも聞くべきであった。学んだことを社会の事象と結び付けることは、生徒に学びを生活に生かす上で有効な問いであると言えるだろう(資料3)。

〈設題3〉環境家計簿の数値を例示し、エコと結びつけてアイデアを解答させる設題では、気仙沼市の中学校との数値比較した学習で使用した数値をそのまま提示し、改めて改善点などを考えさせるようにした。

資料4 パフォーマンステスト 設題3に対する回答

新香山中学校(8月ごろ) 唐桑中学校(8月ごろ)

① 気付いたことや取り組むとよいエコ(改善点)について自由に書け。

○唐桑中の方が灯油使用量が少いのでエコということができる。

○新香山中では電気使用量が少いので、学校や家で使っていない部屋の電気は消す、家を出るとき使っていないコンセントを抜くなどしているといいんじゃないかなと思った。

○東北の人たちは大家族なのに、お風呂に連続で入っていることが多かった。

② 唐桑中学校との交流で取り組んだエコアクションについて、今後どのようにしたらよいか、アイデアを書け。

○電気→携帯を必要以上に使わない。←充電するのが増えて、電力を多く使うから。

○水道→顔を洗うときに水を出しっぱなしにするんじゃなくてためて使う。

○ガス→ガスコンロの場合は火の量に火をつける。ゆでるためにお湯をわかすときはポットの湯を使う。

○ガソリン→車をなるべく使わない。

○ゴミ→家庭で食べ残しが多いため、食べた量だけを使って、余ったものを料理にリメイクする。

4 今年の夏は、「電力不足」が心配されるが、あなたが取り組める節電のアイデアを書け。

○たくさんの部屋でクーラーを使うんじゃなくて、1つの部屋にまとめて使う。

○寝るときクーラーはタイマーを使ってつけっぱなしにしない。

○なるべく扇風機を使うようにする。

○とにかく、あたりまえになるように毎日行う。

<生徒たちは、どう答えたか>

設題1に対する評価規準を次のように定めた。

① B: 原子力発電は二酸化炭素を出さない発電方法であることを理解している。

A: 原子力発電の効率性だけでなく、その安全性の課題も考慮しながらその対策を挙げることができる。

朱書き: 授業では、東北の人たちが大家族でも当たり前のように節電をしていることを見つけたね。この「あたりまえ」がエコには欠かせないキーワードであることに気付いたね。

② B：『CSR：企業の社会的責任』の内容を理解することができる。

A：『CSR』の具体的事例を挙げて、意義を理解することができる。

①の解答では、p. 57 資料3の生徒Bのように、キーワードを押さえて記述している生徒が多かったが、自分の体験と結びつけて答えられるようにするには、さらに条件や状況を設定して解答させるようにすることも大切であると感じた。また、②の解答では、具体例も挙げて答えることができている。このように職場体験学習での学びを生かして答える生徒もいたが、多くはCSRの語句の意味を答えることにとどまっていた。日常や社会の事象と結び付ける設題を心がけるとさらによいと感じた。設題3（p. 57 資料4）は、授業の中でも扱った内容なので、生徒たちの多くは、授業の時と同様に、電気使用量に着目していた。11月の授業では、東北の夏の生活は涼しく、エアコンを使わないなどの生活ぶりが焦点化されたものの、そこからねらいである「震災時でライフラインが不通であったときに感じたエネルギー消費の基盤に立った現代社会の生活の実感」までは、迫ることができなかった。ただ、今回のテストによって改めて数値を提示すると、生徒たちはそこからエコの取り組みを浮かび上がらせることができていた。

設題3の解答では、電気使用量の違いに目を付け、待機電力の低減アイデアをもった。この生徒のこれまでのポートフォリオを見直してみると、東北地方の暮らしを理解しつつも、震災によって必然的に節約志向が高まっていて、我々もそれを見習わないといけないと考えようになっていた。設題4の「とにかくあたりまえになるように毎日行う」という解答は、エコの継続性をキーワードとしてとらえることができたと判断して、朱書きによって押さえた。

<テスト後の展開（問題意識の連続）>

岡崎市環境学習プログラムは、このテストで年間計画を終了するが、社会見学や気仙沼の中学校との交流を3年生につなげるために、「エネルギー供給」に視点を当てた授業を構想した。

そして、その導入で行った1年間のエコの取り組みの振り返りの場面では、生徒はこのテストを持って授業に参加した。教師の朱書きが記入されたテストは、生徒たちが自信をもって発言をする上での支援となった。また、設題2で原子力の安全性についての個の考えを教師が把握していたために、「原子力は持続可能なエネルギーか」の話し合いでは、積極的な関わり合いの場が構成できた。このように指導と評価が一体化することが可能となるパフォーマンステストは、新しい評価の在り方となっている。

<新香山プラン「評価規準作成シート」による評価>

パフォーマンステストの設題や評価方法を確立するために、本年度より次頁の「評価規準作成シート」（p. 59 【資料】参照）を使用することにした。授業者が、シート右の空欄を埋めることで評価規準表を作成することができる。規準を目標や内容に合わせて作成することによって、適切な評価が実施できる仕組みである。さらに、身に付けたい力の難易度を目安にして評価規準を設けたり、パフォーマンステスト作成の参考にしたりもしている。

5 考察

私たちは、3年間の研究を通して、環境学習そしてESDのキーワードは「探究」であることが実感できた。さらに、学びが深まるにつれて「世代を超えた倫理観」を学ぶ道徳的な授業の必要性が高まってきた。また、私たちは、この実践を通して、学びのキーワードを「つながり」とした。さらに今後は、生徒の行動化のキーワードを「つづける」としていきたい。環境学習は、未来社会に視点を当てた学習だが、生徒の生活と行動は「すぐ先の未来」につながる。生徒の日頃の行動こそESDの検証場面であると考えている。

岡崎市環境学習プログラムでは、「大切なのは答えを教えることではなく、考え方を身に付けることである」とされている。私たちもその理念を踏まえ、よりESD的な発想と手法によって、「未来志向の生き方学習」として確立できるように、今後も研究を重ねていきたい。



トイレのスリッパをそろえることもESDの「真価」

【資料】

ESD新香山プラン 評価規準作成シート【1年生】		ESDで身に付けたい力	難易度	単元・〇題材・授業 評価規準
C A T C H	環境課題識別能力	地球規模で起きている環境破壊の現状を、身近な自然や生活の変化との結び付きを実感することができる。	①批判的思考判断する力 ③多面的総合的に考える力	★ 〇バイオリージョンマップの読み取り・報告会から、新香山の学区の環境変化を実感することができる。 〇獣害の原因は、地球温暖化による「森の変化」にあることを理解することができる。
	課題設定能力Ⅰ	事象から自分なりの追究テーマを設定することができる。	②未来像を予測して計画を立てる力	★★ 〇バイオリージョンマップの読み取り・報告会やゲストティーチャーのお話から、自分なりの追究テーマを設定することができる。
	課題設定能力Ⅱ	行動化に向けて自分の課題を設定することができる。	②未来像を予測して計画を立てる力	★★★ 〇地域の課題として「獣害」を問題視し、被害にあった人や状況に共感することができる。
	課題設定能力Ⅲ	個々のテーマから中心課題を見つけ、設定することができる。		
	思考力・判断力Ⅰ	身の回りにある様々な情報を選択し、判断することができる。	③多面的総合的に考える力	★★ 〇バイオリージョンマップ報告会やゲストティーチャーの話、話し合いでの友達の意見を取捨選択し、意思決定したり、判断したりすることができる。
A C T I O N	コミュニケーション能力	仲間やゲストティーチャー、地域の方と協力しながら活動の成果を出そうという態度をもつことができる。	④コミュニケーションを行う力	★ 〇獣害を問題視し、問題解決を目指して仲間や地域の人、ゲストティーチャーと意見交換することができる。
	自他の理解能力	活動の中で、友達の良いところや自分の成長に気付くことができる。	⑤他者と協力する態度 ⑥つながりを尊重する態度	★★★★★ 〇調査活動や話し合い活動を通して、友達の良いところを発見したり、メタ認知能力をもつことができる。
	活動環境整備能力	持続可能な社会づくりのために、様々な条件整備をする必要があることに気付く。	⑥つながりを尊重する態度	★★ 〇人と生き物との共生社会を考えようという意欲を高めることができる。
	思考力・判断力Ⅱ	活動を振り返り、価値判断や意志決定ができる。	③多面的総合的に考える力 ⑥つながりを尊重する態度	★★★ 〇獣害の学習を振り返り、共生社会実現のために、外来生物や希少生物をどうすべきか自分なりの考えをもつことができる。
R E F L E C T I O N	環境社会設定能力	社会的公正や経済などの幅広い見地から判断し、持続可能な社会にするためのプランを立てることができる。	③多面的総合的に考える力 ⑥つながりを尊重する態度 ⑤他者と協力する態度	★★★★ 〇生態系のバランスを維持するために、個体数調整が必要なことに気付くことができる。 〇共生社会をイメージし、人間の行動が大切であることに気付くことができる。
	ESD実践能力	将来のための持続可能な社会をイメージし、「生き方のキーワード」や「提言」を設定することができる。	②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的総合的に考える力 ⑥つながりを尊重する態度 ⑤他者と協力する態度	★★★★★ 〇駆除した害獣は、資源として考えるということを理解することができる。 〇共生社会実現のために自分のやるべきことを具体的に設定することができる。
	思考力・判断力Ⅲ	世代を乗り越えた倫理観で考えたり、判断することができる。		

実践 4

総合学科の特色を生かした E S D の取組

～生徒が夢を実現するために～

愛知県立豊田東高等学校 小瀧 逸子

1 はじめに

本校は創立 88 年の伝統校であるが、平成 19 年に新校舎移転とともに男女共学の総合学科としてスタートした。学科改編当初より、基本方針として「夢の実現」を掲げ、1 年「さがす」、2 年「ひろげる」、3 年「はばたく」をキーワードに、本校が目指す生徒像である、①自分を取り巻く社会を客観的に捉え、広い視野をもって柔軟な考え方ができる生徒、②コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、人間関係調整能力を有する生徒、③いつでもどこでも誰にでも挨拶ができる明るい生徒の育成を目指している。コミュニケーション能力の低下や人間関係の希薄さが社会的な問題となっている中、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」における、「聞く」「調べる」「まとめる」「発表する」という学習活動を通してコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、さらには人間関係調整能力等の育成を図っている。まさに「自ら学び、自ら考え、自ら行動する生きる力」をもった生徒を育てることを目指して、豊田東高校にしかできない総合学科の在り方を築き上げている。



学校（正門より）

また、これまで取り組んできた「環境教育」「国際理解教育」「地域連携教育」がユネスコスクールの理念に合致することから、平成 24 年 4 月にユネスコスクールに加盟が認められた。これを受けて、全職員体制で E S D に取組み、今後目指すべき方向性と取り組むべき内容を明確にする必要性を感じている。

2 研究の目的

総合学科は、普通教育及び専門教育の選択履修を旨として総合的に施す学科であり、高等学校教育の個性化・多様化を推進するために平成 6 年度より設置された。文部科学省は総合学科における教育の特色を「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること」とし就職・進学を双方を視野に入れた進路指導などのガイダンス機能の必要性を説いている。また「生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を得させながら学習に対する意欲の形成を図っていく」ことの重要性にも触れ、幅広い選択科目を開設し、生徒の個性を生かした主体的な選択や、実践的・体験的な学習を重視している。これを受け、1 年次に原則履修科目である「産業社会と人間」を 2 単位、2 年次に「総合的な学習の時間」を 1 単位、3 年次に「総合的な学習の時間」を 2 単位実施し、3 年後の成長を見据えたさまざまな取組は、キャリア教育にとって大変重要な役割を果たしている。さらに昨年 E S D の研究に取り組む、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」の学習内容や本校が目指す生徒像は、キャリア教育だけでなく E S D の概念や理念にかなり近いことが分かった。しかし、これまでの取り組みは「つながり」を意識しない単発的なものが多く見られたことを反省し、E S D の視点に照らし合わせて見直し、再構築してみることにした。また「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」の取組だけでなく、総合学科の特色である「プラン別学習」や「総合発表会」「環境教育」「国際理解教育」「地域連携教育」の取組がどのような能力や態度に結び付いているのか、国立教育政策研究所が示した視点表を用いて検証することとした。

3 研究の方法

本校における3年間の学びの体系づくりである、「『夢の実現』に向けてのキャリアガイダンス」「3年間の学びの流れ」についてESDの視点に立って整理し、見直しを行う。また、本校における特徴的な活動である地域環境研究、地域連携教育、総合発表会についてもESDの視点に立って整理し、ESDの視点表を用いて学校全体の教育活動の中でのつながりを分析する。

4 研究の内容

(1) 本校における3年間の学びの体系づくり

ア 「夢の実現」に向けてのキャリアガイダンス

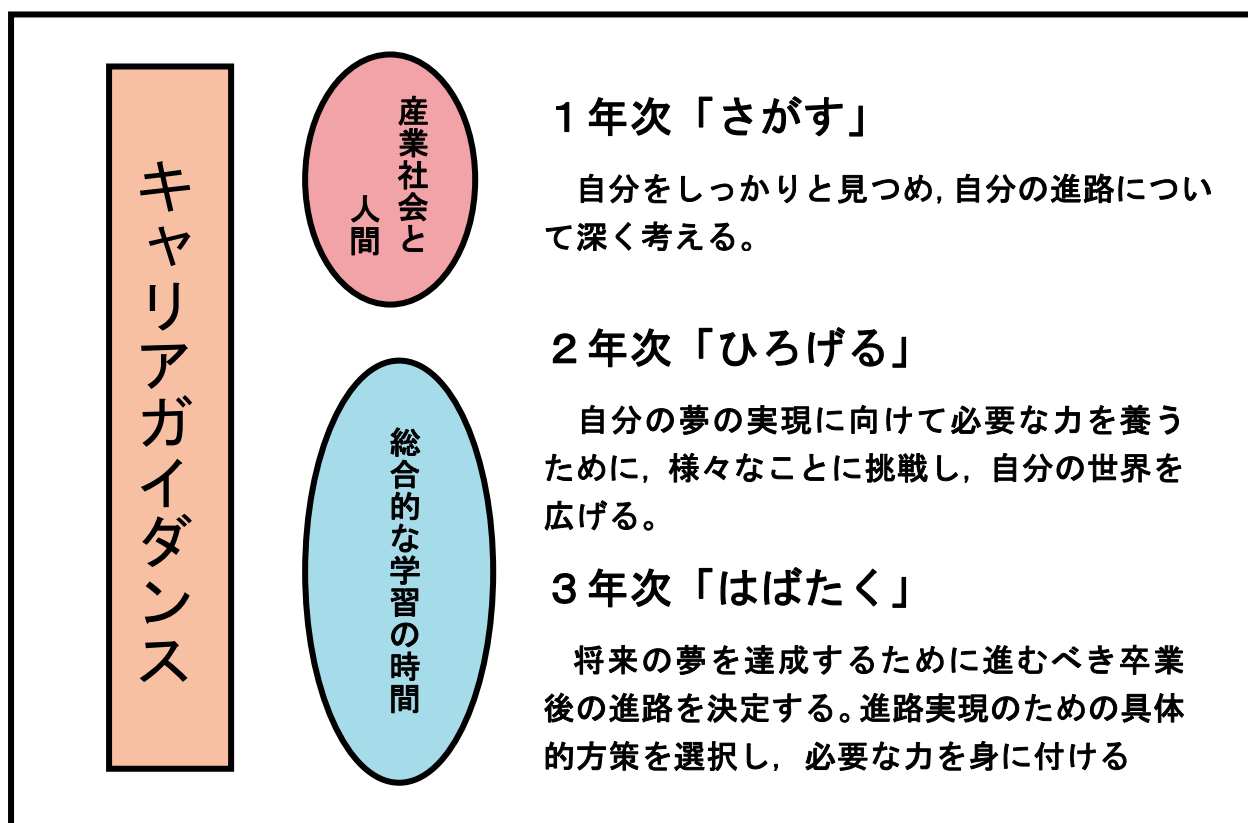
本校では教育目標を達成するために「夢の実現」という基本方針を掲げ、生徒の成長に合わせた3年間にわたるキャリアガイダンス、つまり「学習支援」や「進路支援」を行っている。これらは単年ではなく、3年間継続的に行われるもので、その学習活動としての位置づけが1年次の「産業社会と人間」、2・3年次の「総合的な学習の時間」である。(図1)

本校の教育目標

校訓「敬愛」の精神のもと人格の完成を目指し、自他の敬愛と協力により、生涯にわたる学習の基礎能力を養い、知・徳・体の調和のとれた心身ともに健全な人間を育成する。

- 1 学ぶことの厳しさ、楽しさを知り、自ら学ぶ習慣を培う。
- 2 自分を大切にし、心身を鍛え、強く正しく生き抜く力を培う。
- 3 礼節を重んじ、心豊かな生活を築く態度を育てる。

図1 「夢の実現」に向けてのキャリアガイダンス

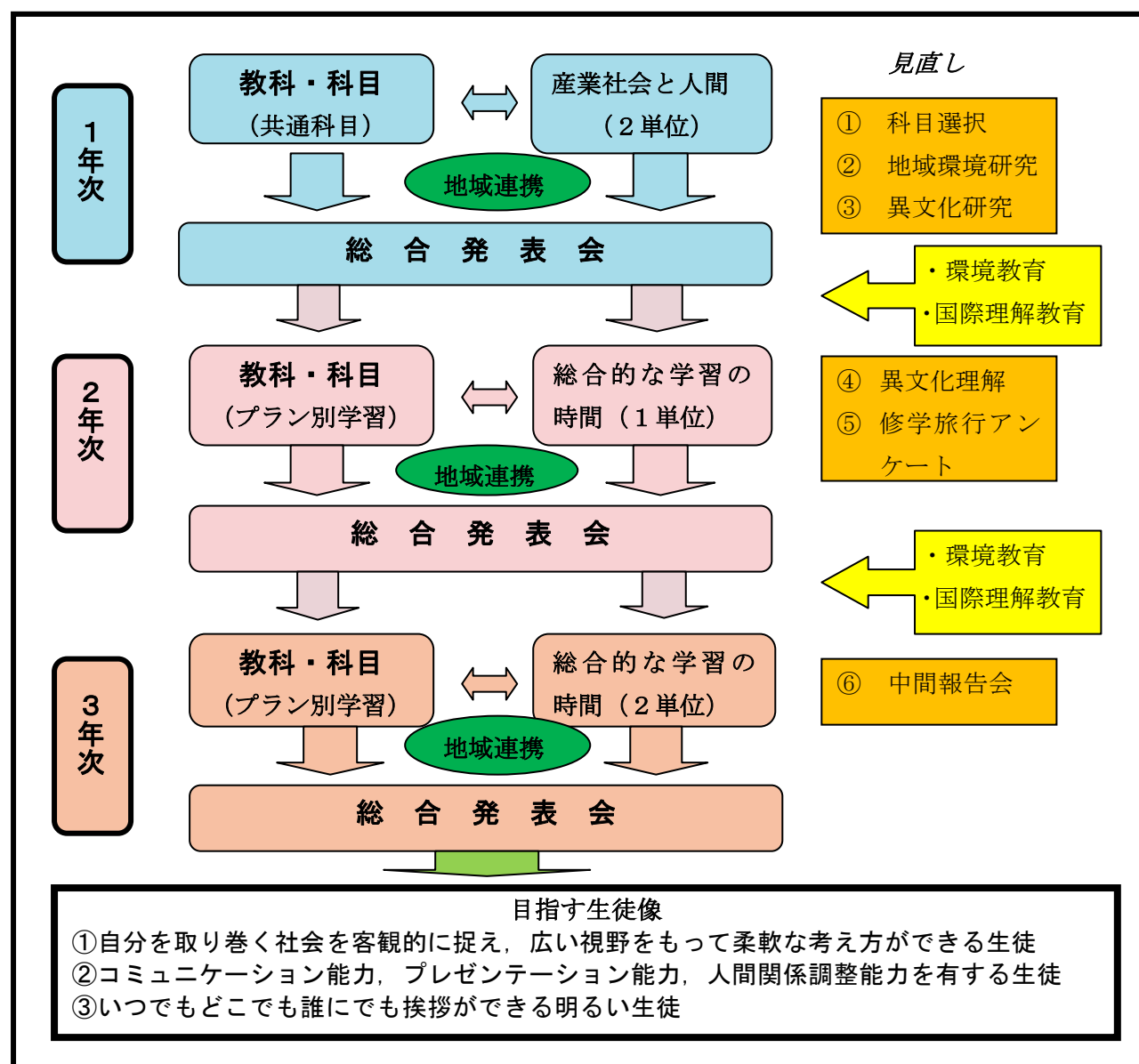


イ 3年間の学びの流れ

3年間の学びの流れは図2のようにになっている。教科・科目については、1年次は必修科目を中心とした共通科目を学ぶ。2・3年次は自分の興味・関心、適性・能力、進路等を考慮して選択する学習「プラン別学習」を行う。「プラン別学習」のためのプラン選択は1年次に行われるが、これについては後述する。教科・科目で学習した内容は「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」と相互に作用し、その学習効果を高め合っている。特に教科・科目の知識や技能は学年を経るとともにより専門的になり「総合的な学習の時間」において実施している横断的・総合的な学習や探究的な学習の質も高まっていく。それだけでなく、「環境教育」や「地域連携教育」において実践の機会を設けることで、価値観を創造する学びへと発展し、学び合う関係づくりにも発展する。

毎年2月には、全校で「総合発表会」を行う。これは本校にとって学びの集大成とも言える大切な発表会である。1年生の「産業社会と人間」や2・3年生の「総合的な学習の時間」の学習内容の発表だけでなく、特色ある科目や活動等の発表も行われる。昨年は初めて、近隣の中学校、総合学科のある高等学校の教員、保護者の皆さんなどにも見ていただくことができた。詳しい内容やアンケート結果の考察については後述する。

図2 3年間の学びの流れ



(2) ESDの視点に立った見直し

国立教育政策研究所はESDの視点に立った学習指導を展開するために必要な枠組みとして、「持続可能な社会づくりの構成概念」と「ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項」を示しているため、それを参考に「産業社会と人間」の年間計画の見直しを行った（表1）。

表1 1年生 「産業社会と人間」の年間計画

月	項 目	内 容
4	自分を知る	進路ガイダンス, 進路適性検査
5	働くことや学ぶことを知る	企業・キャンパス見学（準備、見学、発表）
6	履修計画	科目選択ガイダンス 
7		職業インタビュー
8		オープンキャンパス参加
9	社会を知る プレゼンテーション能力を身に付ける	社会を知る新聞作り 
10		クラス内発表
11	地域を知る・生き方を考える	地域環境研究, 職業・上級学校研究
12	生き方を考える	理想とする人物研究, 自分史づくり
1	異文化を理解する	異文化研究 
		ライフプラン作成・発表
2	まとめ	総合発表会
3		振り返り

ア 見直し① 科目選択ガイダンス

前述したように、本校では2年次より「プラン別学習」を行う。そのプランを考えるために5月中旬におけるPTA総会の学年懇談会においてまず保護者に説明会が行われ、その後5月下旬に今度は生徒対象の説明会が行われる。このときは教務主任の説明に加えて、各系列主任がプランや科目の説明を行う。一通りの説明の後には、担任との面談を繰り返し、保護者も加わった三者面談、複数の教員が参加して行う個別検討会を経て、予備調査、予備登録、本登録の流れでプランやプラン内の科目選択が決まっていく。本校では多様化する生徒の興味・関心を考慮して7つの系列、12のプランを準備している。

◆本校に設置する7つの系列

人文科学, 自然科学, 国際コミュニケーション, 生活科学, 福祉, 情報・ビジネス, 芸術文化

◆12のプラン

文プラン, 理プラン, 外国語プラン, 看護プラン, 調理・栄養プラン, 服飾プラン, 保育プラン
福祉プラン, ビジネスプラン, 情報処理プラン, 美術プラン, 音楽プラン

まず見直したのは、科目選択ガイダンス資料に主な進路先と卒業生からのメッセージを載せたことである。これは前年度の2月に行った「振り返り」によるもので、「プラン選択のアドバイス」と「進路実現に向けてのアドバイス」の2種類がある（p.76 資料1）。ガイダンス資料は中学校訪問の際にも配布しており、本校への入学を考えている中学3年生の参考資料にもなった。また現2・3年生の振り返りデータはプランごとにファイリングし、いつでも見ることができる。二つめの見直しは、プラン選択を考える際に時系列で考えさせたことである（p.77 資料2）。これまでの自分の考えを、時間を追って考えさせたことで、生徒の中には改めて自分の夢を見直したり、逆に自分が何を学びたい

かを明確にしたりすることができた生徒もいた。そして三つめは、ほぼプランや科目選択が決定した10月にアンケートを実施したことである（p. 78 資料3）。科目選択は生徒にとって3年間の学びの成否を決める大切なプログラムであるので、どの場面が決定に際して有効であったか、また誰の影響を受けているかなど知り、次年度以降の科目選択に役立てたいと考えている。さらに教員が生徒一人一人のプラン選択納得度を知り、実際にプラン別学習がスタートする2年生以降、納得度がどのように変化していくかを追跡調査し、納得度の変化を担当、教科担当者、各系列主任等と共有することで、入学から卒業まで生徒をサポートすることをねらいとしている。服部（2012）は「総合学科の在り方に関する調査研究」の報告書の中で、「手間暇かけて指導するのが総合学科であり、科目選択の指導は総合学科教諭の最も重要な仕事である。総合学科教諭はキャリア・カウンセラー的意識を高める必要がある」3）と述べている。

p. 78 資料3のアンケートを実施した結果、科目選択納得度の平均値は89.4であった。特に高い納得度を示したのは保育プラン選択者の96.0、次いで音楽プラン選択者の95.8で、いずれのプランも専門性が高いことから、それぞれのプランの科目に対する学習意欲が高いことがうかがえる。また科目選択において生徒が参考にしているのは「家族のアドバイス」、「科目選択ガイダンス」、「教員からのアドバイス」の順であった。科目選択のプロセスを重要視し、科目選択の満足度を高めることは、自己の在り方生き方をより深く考える態度を育てることにつながり、さらに主体的な進路選択につながっていくのではないかと考えている。

イ 見直し② 地域環境研究

これまでの地域環境研究は、地元のまちづくりに関わる方を外部講師に招いて講演会を行い、その後学校周辺の清掃ボランティアをするというものであった。そこで平成23年度は、あらかじめ生徒に「まちづくり提案」をする時間を確保し、そのデータを講演者に見てもらい講演会の際に生徒の提案についての意見を述べてもらう「つながり」を導入した。そして生徒が考えた豊田市のキャッチコピーを商工会議所主催のイベントで発表する機会をもらい、地域のこれまでの歴史を知るとともに、地域のこれからを考える機会とした。

今年度本校は、国土交通省、豊田市矢作川研究所、NPO法人矢作川森林塾などと連携して、学校近くの矢作川に整備されつつある「子どもと川の出会いの場（仮称）」で動植物や自然環境の変化を観察・記録し、子どもたちを対象としたイベントの企画・運営を行う計画を立て、写真科学部の科学班によって、植物等の継続的な観察を始めた。ESD-JではESDの視点を取り入れる工夫の中で「人と人のつながり」、「人と自然のつながり」、「人と社会のつながり」を重視しており、地域の資源、人、課題を題材に学びを創造する必要性を説いている。そこで矢作川という地域資源で流域の健全な生態系の保護と豊かな自然環境を後生に残すこと、「子どもと川の出会いの場」となる矢作川で触れ合いを大切にすることを、国土交通省、豊田市矢作川研究所、NPO法人矢作川森林塾などと協働して作り上げたいと考え、1年生の「産業社会と人間」の地域環境教育で取り上げることにし、次のような計画を立てた。

	内 容
地域環境研究①	講演会『「子どもと川の出会いの場」のこれまでとこれから』p. 65 写真 ゲストティーチャー：NPO法人矢作川森林塾、国土交通省
地域環境研究②	プランニング（個人）
地域環境研究③	プランニング（グループ）

地域環境研究④⑤	矢作川にて現地踏査 プランニングの見直し
----------	-------------------------

地域環境研究 2・3 時間目には講演会での内容を基に、このプロジェクトの名称を考え、「子どもと川の出会いの場（仮称）」を今後どのように活用するか、プランニングする予定である。そして 4・5 時間目を使って 1 年生 240 名が矢作川に行き、矢作川森林塾の塾長と国土交通省の方の指導のもと、清掃や川の観察、竹の伐採を行う計画である。現地踏査後生徒はプランを見直し提出する。提出したプランはゲストティーチャーが審査し、優秀なプランは 3 月に行われる矢作川ミニシンポジウムにて発表の機会が与えられることになっている。今年 9 月に行われた矢作川天然鮎感謝祭には多くの市民が参加し、その中には小さな子どもを連れた家族連れやお年寄りまで幅広い層の人々が参加していた。今回の地域環境研究がきっかけとなって、本校生徒が 5 年後、10 年後に同じように参加する姿を期待している。



講演会「子どもと川の出会いの場」のこれまでとこれから

ウ 見直し③④ 異文化研究

これまでの異文化研究は、ゲストティーチャーが諸外国の事情などについて講演をし、2 年生に修学旅行先の様子を伝えるという単発の内容であった。そこで、生徒が外国や異文化に興味・関心をもつことを考え、ゲストティーチャーは修学旅行先のマレーシアの人であること、ただ単にマレーシアの人というだけでなくマレーシアの文化と日本の文化の両方を体験している人という条件で探したところ、マレーシア国籍で日本在住で、専門学校でマレー語を教えている人が見つかった。ゲストティーチャーには 1 回だけでなく継続的に交流することを前もって依頼した。既にマレーシアについてグループ別に学習し始めていた生徒に「私が育ったマレーシア」という題で講演していただいた。生徒はゲストティーチャーがなぜ日本で生活することになったのか、また日本の生活で困ることはないかなど質問をしていた。そしてこのゲストティーチャーとの関わりは、2 年生の総合的な学習の時間に行われる講演会、さらにマレーシアの料理を知る講習会へと発展させた。実際に修学旅行でマレーシアに行き、自分が見てきたマレーシアの報告と疑問に感じたことを講演会でゲストティーチャーに伝え、学び合うというものである。今年度は、修学旅行から帰ってきた翌週にゲストティーチャーを招き、次のような質問を投げかけた。

- ・マレーシアにはさまざまな民族の人が暮らしていますが、宗教や民族の違いで困ることはありませんか。対立は起きませんか。信仰する宗教をもたない人もいますか。
- ・マレーシアでホームレスの人たちをたくさん見ました。貧富の差は激しいですか。日本でも貧富の差はありますが、マレーシアの貧富の差はどこから来るのでしょうか。
- ・マレーシアでは自転車を見かけませんでした。自転車には乗らないのですか。乗ってはいけない理由がありますか。それと、車やバイクがすごいスピードで走っていましたが、交通事故は起きないのですか。
- ・マレーシアの環境問題をどう思いますか。
- ・マレーシアの人が使う言葉は、基本は英語ですか。マレー語を話すときはありますか。英語は学校で習うのですか。
- ・マレーシアでは男女差別はありますか。

これらの質問に対するゲストティーチャーの答えの中で印象的だったのは、「多宗教ではあるが、自分以外の人の宗教については何も言わないし関わらない。それがマナーです」という答えであるが、多様性の概念を肌で感じる事ができた瞬間だと感じた。料理交流では調理・栄養プランの生徒とゲストティーチャーが、お互いの国の料理を教え合う。昨年、ゲストティーチャーはマレーシアのチキンカレーを、そして本校生徒は飾り寿司を作り、国籍を超えた学びあいの場となった。今年度はゲストティーチャーからそばカレーを教わり、本校生徒はきつねうどんを作る予定である。



マレーシアについての講演会

表2 2年生「総合的な学習の時間」の年間計画

月	項 目	内 容
4	異文化理解研究	マレーシアを調べよう
5		(ガイドブック作成)
6		日本を紹介しよう
7		(ピクチャーブック作成)
8	見直し⑤	外国の人とのコミュニケーションの方法を考えよう
9		(チェラス校との交流、自己紹介カードの作成、B & S
10		プログラムの作成) ゲストティーチャーによる講演会 修学旅行アンケート
11	生き方を考える	職業・上級学校研究, 料理交流
12	課題研究	研究したことを文章にまとめてみよう
1		
2	まとめ	総合発表会
3		振り返り

エ 見直し⑤ 修学旅行

2年生の「総合的な学習の時間」は10月の修学旅行に関する内容が多くなりがちであるが、修学旅行に行ったからといって、それが異文化理解になるということではないという考えの上に立って実施した。異文化理解研究では旅行先の生活や文化などを調査・探究し、異文化に対する理解を深める学習を行った。さらに修学旅行の目的を「①実際に海外に赴き、現地の人々との交流を通して異文化体験、異文化理解を進める。さらに異文化理解を通して日本文化を認識し、自分自身の理解を深める。②他国の文化を理解するとともに日本文化を深く理解し、その知識を広く外国に向け発信できる態度を養うと同時に外国文化を受容し理解できる力を養う。③現地の人々との交流を通して友好を深め、国際平和を願う心を育む。」としていることから、現地における交流計画や、交流の際に手渡しする「自己紹介カード」や「ピクチャーブック」の作成に重きを置いた(表2)。

また昨年度から修学旅行後のアンケートを見直し、自由記述として次の内容を追加した。

- ・修学旅行に行く前後での、自分自身のマレーシアに関するイメージを答えなさい。
- ・修学旅行でマレーシアに行く意味を、日本とマレーシアとの関係を考えて答えなさい。
- ・B & S プログラムで、現地の大学生と話した内容はどんなことでしたか。
- ・この修学旅行を通して、他国の相手を理解する上で、最も重要だと思うことを下記から選びなさい。また、選んだ理由も書きなさい。
 - ①国の言語を身に付けること ②他国の宗教を知ること ③他国の歴史を知ること
 - ④他国の習慣を知ること ⑤自国の理解を深めること

修学旅行の重点目標である、現地における交流に対して具体的にどのような話をしたのか、また相手を理解するために自分たちに必要とされることは何だったのかなど質問した結果、以下のような生徒の声を聞くことができた。また、他国の相手を理解する上で最も重要なことは「他国の言語を身に付ける」であった。まずは相手と話すことができなかった、こちらの気持ちも伝えられないし、相手のことも分かってあげることができないという理由が多かった。数は少なかったが「他国の習慣を知ること」が最も大切だと回答した生徒の中には、私たち日本人には当たり前のことでもマレーシアの人には受け入れられないこともあり、習慣を知らずにその国を訪問することは失礼であると理由を述べていた。生徒の感想から、海外修学旅行という貴重な異文化体験は、多様性や相互性の概念を理解させ、人や社会、国の関わりなど多面的・総合的に考える良い機会となった。

【アンケート自由記述回答の一例】

- ・他国の相手を理解するにはまず自国を理解することが必要だと思う。日本とマレーシアの違い（特に宗教や習慣）を理解し、認識することが大事だと思う。
- ・日本とマレーシアでは言葉も違うし宗教も違うけれど、相手が何を言いたいのか考えたり、自分の言いたいことをどうすればうまく伝えられるか考えたりすることができた。うまく言葉が話せなくても心は通じ合うことができることを学んだ。
- ・マレーシアにはマレーシアの宗教や習慣があるから、自分の意見だけを押しつけず、理解しようとする心がけが必要だと思った。
- ・同じアジア圏としてお互いに違う部分を探したり、共通点を見つけたり学ぶべきことが多くあった。実際に見て、体験することで詳しくより確かなものを見つけることが今回の修学旅行の目的だと思った。
- ・言葉が通じないことを経験し、言葉を伝えることの大切さと通じたときのうれしさを感じた。

表3 3年生「総合的な学習の時間」の年間計画

月	項 目	内 容
4	生き方を考える	将来像を実現するための職業・上級学校研究
5	課題研究	社会で起こる諸問題に目を向け、多角的に物事を見てみよう(ディベート)
6	テーマ研究 ↑ ↓	自分の進路から課題を見つけ、課題について研究を行う
7		
8		
9		
10		
11		中間報告会 

12		研究の成果をまとめる
1		4分間のプレゼンテーションをする
2	まとめ	総合発表会 振り返り

オ 見直し⑥ 中間報告会

これまでの中間報告会では、総合的な学習の時間の活動内容を報告し合っていたが、昨年度から、進学希望者を中心に行っている課題研究において、熱心な取組をしている生徒や、自分の将来像について熟慮できている生徒を中心に発表させたり、既に就職先から内定をもらっている生徒が全員の前で本番さながらの模擬面接を行ったりしている。これは本校が重点に置いている「プレゼンテーション能力」や「コミュニケーション能力」を育てることに大いに役立っている。また自分以外の人の話を聞くことを通して、意見や情報をよく検討・理解したり、自分の意見に他者の意見を取り入れたりする力となっている。さらに、発表者にとっては自分の意見をまとめて簡潔に伝える力も育てている（表3）。

(3) 本校における地域環境教育

本校では平成20～22年度、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）事業を活用し、外部研究機関と連携した自然科学教育を実践しており、本校の横を流れる矢作川で外来生物であるカワヒバリガイの調査を経年観察で行ってきた。今年度は「持続可能な社会を考える ～矢作川流域の人工林の健康診断～」というテーマで里山の森林生態系について取り組んでいる。これは豊田市矢作川研究所、NPO法人矢作川水系森林ボランティア協議会、名古屋大学大学院環境学研究科、東京大学大学院農学生命科学研究科などと連携して、講演、野外調査、見学などにより、さまざまな人工林の様子を知り、自然と人間の共生の仕方を考えるもので、地域連携の構築を目指した環境教育である。

ア これまでに実施した内容

(ア) 講演会「森の健康診断 ～市民と協働研究者による愉快的森林調査～」

総合学科2年生全員を対象に、豊田市矢作川研究所の主任研究員をゲストティーチャーに招き、豊田地域のスギ・ヒノキ人工林の現状と自然環境を学習する講演会を実施して、日本の林業が持続不可能な現状に陥っている現状について考察を深めた。野外活動に参加する生徒は、時間的・物理的な制約上、一部に限定せざるを得ないが、学年全体を対象とした講演会を実施することにより、知識と意識の共有化を図ることを目指した。



(イ) 森の健康診断①【豊田市桑田和町】

間伐遅れの人工林は一見すると緑豊かであるが、中に入るとうっそうとして光が差し込まないため、地面にはほとんど植物がなく、土がむき出しになっている。いわゆる「緑のダム」機能が崩壊し、土砂崩れの危険性のある人工林について、



講演会の様子

植生調査、土壌調査、植栽木の樹高や密度などを理プラン選択の生徒17名で調査した。また調査地の人工林を提供していただいた山の所有者にも同行していただき、生徒たちとの「対話」を行った。

(ウ) 森の健康診断②【豊田市梨野町】

豊田市足助地域で個人として持続可能な林業を営む山の所有者と連携し、理プラン選択の生徒から選抜した6名の生徒により、森の健康診断を追加実施した。さらに、東京大学大学院生態水分学研究所の協力のもと、土壌の透過性を測る調査等を併せて実施することにより、健全な人工林の指標を比

較検討した。

(エ) 講義・野外見学

理プラン選択の 17 名を対象に、瀬戸市にある東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林生態水文学研究所において、豊田市猿投山の変遷、森の平壤化作用および森林の公益的機能について講義を受けた。また、研究施設や演習林を実際に観察したり、野外実習後の講師との「対話」をしたりして、森林の在り方、日本における林業の持続可能性について理解を深めることができた。

イ 今後実施する予定の内容とねらい

(ア) 講義・討論

森の健康診断②に参加したグループを対象に、豊田市里山暮らし体験館「すげの里」において、同施設の設計に携わり現地調査を行っている名古屋大学の講師の解説の下で、その研究室の大学院生たちと対話を行う。自然エネルギー100%で運営する施設の仕組みを学習し、小水力らせん水車発電やバイオガス施設の運用状況を確認することで、持続可能な社会について理解を深める。

(イ) 事後学習

野外調査の結果をまとめるとともに、諸活動で交流した講師やNPOの方々、山の所有者たちの言葉を「聞き書き」として文書化する。また、発表準備を行う際には前年度先行調査を行った生徒を同席させ、対話を行うことを企画している。一連の活動において重視したのは「対話」である。新学習指導要領では言語活動の充実がうたわれているが、対話型の授業展開はその方策として注目されている。

(4) 本校における地域連携教育

本校では地域社会に主体的に関わり、地域社会を創っていく担い手の育成を目指して地域連携活動に取り組んでいる。きっかけとなったのは、平成 21 年度ビジネス研究部の活動において、地域の抱える課題に取り組み、地域経済の活性化を研究するために市街地活性化事業に参画したことである。その後は学校という組織が主体となって地域連携に関わることの必要性から、総合推進部が中心となって取り組むことになった。平成 24 年度は前年度に引き続き、中心市街地活性化事業と協働し、商店街活性化事業に参画した。協働する桜町本通商店街は学校から近くまちづくりに熱心に取り組んでいる。具体的な活動内容は、「ふれ愛フェスタ 2012」への参加、商店街アーケードのバナー（宣伝用の旗）の製作、八日市のお手伝いなどである。八日市のお手伝いではボランティアチーム「チーム八日市」を結成し学校が休みの土・日曜日と八日市が重なったときには参加している。また、昨年美術プランの生徒が、商店街の宣伝用の旗（バナー）を 19 店舗分作成したが、その旗を見た警察署の方から、交通安全啓発運動用ののぼりの作成を依頼され、今年度作成した。さらに、



高校生グルメ甲子園

に参加した。F 級の F は「ふるさと」、「未来 (future)」を表しており、高校生が地元の食材を使



交通安全用のぼり

一昨年、昨年と実施した地元の特産品を利用した商品開発にも取り組んで

おり、今年度は昨年に引き続き「米粉」を使った商品開発に 2・3 年生調理・栄養プランの生徒が関わっている。活動は校内にとどまらず、校外においても積極的に参加しており、11 月には静岡県三日市で開催された「第 2 回高校生 F 級グルメ甲子園」

って商品開発することを応援するコンテストである。このコンセプトは本校が取り組む地域連携のコンセプトに通じるものがあり、昨年に引き続き応募したところ、予選を通過し調理・販売できることになった。

このような地域連携では、高校生が地域社会活動に主体的・継続的に関わり、企画・運営・評価の一連の活動を行うことによって、自己の将来を考えるとともに、地域を見直し、地域社会を自分たちで担っていくという公共の精神を高め、コミュニケーション能力や調整力など社会参画のスキルを身に付けることを目指している。今年度の実施内容は表 4 のとおりである。12 月 8 日の桜町本通商店街の八日市では、本校吹奏楽部が青空コンサートを行った。また商店街のアーケード用の旗はビジネスプランの生徒がスタンダードと歳末セール用の 2 種類の図案を作成した。更に商工会議所との連携で行っている地元の特産品を利用した商品開発は、12 月に行われる商工会議所主催のイベントにおいても出店した。

表 4 今年度実施した地域連携活動

	概 要	本校の参加生徒	備 考
H24 4. 8	チーム八日市 青空コンサート（箏曲部）	希望者（13 名） 箏曲部	桜町本通り商店街の八日市のお手伝い 青空コンサート
5. 27	桜町本通商店街 ふれ愛フェスタ 2012 ＊子どものためのイベント	3 年保育プラン（13 名） 写真科学部・科学班（5 名） 美術部（5 名） 家庭部（26 名） JRC 部（24 名） 調理・栄養プラン（9 名） 服飾プラン（6 名）	保育プラン：紙芝居、ゲーム 科学班：おもしろ科学 美術部：手作りジグソーパズル 家庭部：模擬店（焼きそば等） J R C 部：ゲーム 調理・栄養プラン：模擬店 服飾プラン：フリーマーケット
7～9 月	交通安全のぼり製作	美術プラン・美術部	交通安全立哨活動用ののぼり
7. 8	チーム八日市 青空コンサート（合唱部）	希望者（15 名） 合唱部	桜町本通り商店街の八日市のお手伝い 青空コンサート
8. 8	チーム八日市	希望者（8 名）	桜町本通り商店街の八日市のお手伝い
9. 8	チーム八日市	希望者（9 名）	桜町本通り商店街の八日市のお手伝い
10. 8	チーム八日市 調理・栄養プランの模擬店	希望者（19 名）	桜町本通り商店街の八日市のお手伝い 模擬店



チーム八日市



青空コンサート



青空コンサート



ふれ愛フェスタ
(家庭部模擬店)



ふれ愛フェスタ
(JRC部ゲームコーナー)



ふれ愛フェスタ
(美術部ジグソーパズル)

【ふれ愛フェスタに参加した生徒の感想】
私は保育プランで、今回は「あたってクルクル」というゲームをしました。参加してくれた子どもたちが喜んでくれてうれしかったです。

【八日市に参加した生徒の感想】
これまで、参加したいと思っていましたが部活動と重なってできませんでした。やっと参加できました。朝市に来るお客さんに、五平餅を渡すお手伝いをしました。

こうした地域におけるさまざまな活動は、生徒が地域に行きそこの住む人たちと出会い、挨拶や言葉を交わし地域の存在を自分の目で見つめる、つまり現実に出会う場となっている。

(5) 本校における総合発表会の役割

ア 内容

「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」での学習内容の発表、「プラン別学習」の成果の発表また特色ある活動等の発表の場として行われている。平成23年度の発表一覧は以下の通りである。



総合発表会



総合発表会

- 1年「産業社会と人間」・・・ライフプラン
- 2年「異文化理解について」
- 3年「総合的な学習の時間」・・・課題研究、模擬面接
姉妹校訪問団報告
野外調査活動報告（理プラン）
知の探求講座報告 地域連携実践報告
特色ある授業
- 外国語プラン「異文化理解」
- 保育プラン「巨大ペープサート」
- 調理・栄養プラン「フルコース実習、お弁当実習」
- 服飾プラン「ファッションショー」

イ 効果

総合発表会は、各学年・各教科の代表発表者が自らの体験や学習内容をまとめて伝えることはもちろん、他者の体験や考え方にも耳を傾けて、学びの共有を図ることができる貴重な機会である。特に3年生が下級生に対して、自らの学びを発表することで下級生は学びの目標を知り、プレゼンテーション能力に違いがあることに気付き、自らも成長しなければいけないことを再認識する。そして先輩たちの学びを引き継ぎ、さらに発展させようとする意欲にも結び付いていく。平成24年2月15日に行なわれた総合発表会は、はじめて外部の方に公開した。全学年がそろそろ3回目の発表会となったが、3年生が総合司会を務める中で大変中味の濃いすばらしい発表であった。本校において総合発表会は生徒が学んできた知識や体験の共有であると同時に意識の共有にも役立っていることが分かった。

ウ 感想・アンケート結果および分析

先に述べたように、昨年は初めて近隣の中学校、総合学科のある高等学校の教員、保護者の皆さんなどにも見ていただくことができた。外部の方の評価は気になるところであるが、おおむね良い評価をいただくことができた。本校生徒の感想、本校職員の感想、外部の方のアンケート結果を項目別にまとめてみた（各項目の回答数に対する割合を「割合」の欄に百分率で示してある）。

対 象		項 目	割合
生徒 (回答数 521)	1	発表自体の評価	16%
	2	自身の目標、活力、刺激、期待感	50%
	3	東高への活動の興味、発見、誇り	23%
	4	自己啓発、自己発見、自己肯定感	11%
職員 (回答数 23)	5	発表自体に関する評価	13%
	6	発表の計画、準備、設営、運営に関する評価	32%
	7	生徒の発表状況、活動状況、活動内容に関する評価	21%
	8	学校・職員の指導体制に関する評価	9%
	9	東高校、総合学科の在り方に関する評価	13%
	10	開催時期に関する意見	5%
	11	当日日程、プログラムに関する意見	7%
参加者 (回答数 32)	12	生徒の活動、能力、成長に関する評価	6%
	13	東高校の総合学科に関する評価（教育課程、専門性、特性）	58%
	14	発表内容に関する評価	23%
	15	発表会の運営に関する評価	13%

生徒の主な感想・意見を項目別に示す。

○生徒の感想

1 発表自体の評価

- ・保育プランの発表は子どもの心をつかむ工夫がされていて、見ていて楽しかった。声の出し方も上手ですごいと思った。（1年）
- ・今年の発表会は3年間で一番観て聴いて楽しめる発表会だった。（3年）

2 自身の目標、活力、刺激、期待感

- ・発表を見て、エネルギーをもらった。来年度への意欲がわいた。（1年）
- ・3年生の先輩の模擬面接や課題研究の発表では、学ぶことが多く来年度に生かしていきたい。（2年）

3 東高の活動の興味、発見、誇り

- ・発表を見て、東高校に来て良かったと感じた。東高校にいることを誇りに思えた。（1年）
- ・発表者として舞台上がったとき、鑑賞者の態度の良さに驚いた。（2年）

4 自己啓発、自己発見、自己肯定感

- ・発表会で強く感じたのは、みんなそれぞれ夢があってそれをかなえるために東高でがんばってきたことである。東高には恵まれた学ぶ環境があって、みんなの夢の幅も広がると思った。（3年）
- ・発表することが多かったこの1年で、人前で話すことを少しだけ楽しめるようになった。（1年）

上記の結果から、生徒は発表そのものの評価よりも発表を通して活力や刺激を感じ取っていることが分かる。また同級生や上級生の発表を見て、このような発表ができる生徒と学んでいることに誇りをもつ生徒が多く見られる。さらに発表した生徒には自己肯定感も見られた。外部の参加者は46人のうち32人から回答が得られた。東高の総合学科に関する教育課程や専門性、特性に対する評価が58%と高い数値を示しており、今回の発表会が総合学科としての集大成と理解されたからではないだろうか。アンケートの中には「これから総合学科がどの方向に進んで行くのか興味深い」「今後豊田東がどう進化するかぜひ見てみたい」など高い関心を寄せている意見も見られ身の引き締まる思いである。一方、職員は発表内容よりも運営側の問題点や課題に評価が多く見られることはうなずける。平成24度は、平成25年2月14日に、各学年の発表に加えて、4つの特色ある活動、7つの特色ある科目やプランが発表を行った。

(6) ESDの視点表を用いた分析

「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」（国立教育政策研究所）の最終報告書においてESDの視点に立った学習指導の目標を設定している。そこで示されている「持続可能な社会づくりのための構成概念（何を学ぶか）」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（どういう力をつけたいか）」によるESDの視点表を用いて、本校のESDさまざまな取組を分析した。これまでの取り組みには○を、今回見直したのものには◎を記した（表5）。

表5 ESDの視点表

学 年	学 習 活 動	構成概念						重視する能力・態度						
		I	II	III	IV	V	VI	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1 年	産業社会と人間（見直し①）	○	◎	○		◎	○	◎	◎	◎	○	◎	○	○
	国際理解教育（見直し③）	◎				◎		◎		◎	○			
	環境教育（見直し②）	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	○	◎		◎	○
	地域連携					○					○			○
	総合発表会	○	○					○	○	○			○	
2 年	総合的な学習の時間（国際理解教育（見直し④⑤）	◎	◎		○			○	○	◎	◎	◎	◎	○
	環境教育	○		○				○		○				
	地域連携					○					○			○
	総合発表会	○	○					○	○	○			○	

3 年	総合的な学習の時間（見直し⑥）	○			◎			◎		○	◎		○	
	地域連携					○					○			○
	総合発表会	○	○					○	○	○	○	○	○	○
	○◎の合計	9	5	3	2	6	2	9	6	9	9	3	7	7

【構成概念】

【重視する能力・態度】

- I 多様性 II 相互性 ① 批判的に考える力 ② 未来像を予測して計画を立てる力
 III 有限性 IV 公平性 ③ 多面的・総合的に考える力 ④ コミュニケーションを行う力
 V 連携性 VI 責任性 ⑤ 他者と協力する態度 ⑥ つながりを尊重する態度
 ⑦ 進んで参加する態度

E S Dの視点表を用いた分析から、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」だけでなく地域連携、環境教育、国際理解教育、総合発表会等の積み重ねによって、多様性や連携性などの構成概念を捉えるとともに、批判的に考える力や多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力など、本校が目指す生徒像に近づく能力や態度が積み重ねられていることが分かった。文部科学省の「高等学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」では「総合的な学習の時間」の目標を「自己の在り方、在り方生き方を考えることができるようにする。」としている。さらに充実の方向性を「①探求的な学習②協同的な学習③体験活動の重視④言語活動の充実」としていることから、本校の取組は望ましい方向にあると言える。

5 研究のまとめと今後の課題

総合学科に学科改編されて6年が経過し、その都度見直されてきた「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」であるが、今回E S Dの視点で見直すことにより、より総合学科としての特色を生かす活動になったと思われる。見直した内容をE S Dの視点表で評価したところ、「構成概念」においても「重視する能力・態度」においても本校が目指す方向に沿っていることが分かった。これまでキャリア教育を中心に取り組んできた「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」は、新学習指導要領の柱である「生きる力」につながっており、E S Dの理念にも通じる。今回の研究を通して、一つ一つの学習活動がE S Dにつながっていることを確信することができた。これまで生徒が記したレポートや講演会後の感想などから、3年間にわたる学習の中で生徒たちは、ものの見方や考え方、積極性、コミュニケーション能力などの力を身に付けていることは明らかである。今年度は残念ながら実施できなかった在校生や卒業生の「総合学科に関するアンケート」を、来年度こそ実施し、さらに生徒が夢の実現に近づける学習活動を展開したいと考えている。

平成21年度から積極的に取り組んでいる地域連携は、今後も地元の商店街である桜町本通商店街と商工会議所、さらに平成24年度からNPO法人矢作川森林塾と積極的に関わり地域資源を題材にした学習活動を展開していきたいと考えている。参加体験型の手法や人や地域の可能性を最大限に活用した手法を生かして、地域をベースに地域資源を使った教材となる「まちづくり」や「子どもと川の出会いの場づくり」を通して、学校と地域がつながる取組は「教材のつながり」「人のつながり」「能力・態度のつながり」へと発展している。

学校全体としてみたとき、E S Dの視点に立った教科指導はまだこれからであるが、現在国際コミュニケーション系列の科目「異文化理解」では英語で世界遺産について読み、内容を理解するだけでなく、そこから浮かび上がる問題に目を向けた授業や、行事や残したい伝統・町の宝物を題材にグル

ープ研究やフィールドワークにも取り組んでいる。また生活科学系列の科目「ファッションデザイン」では「衣服の循環の今と昔を知る」をテーマに昔と今の衣服の循環について学んだり、地域のお年寄りから洗い張りの様子や衣服を大切に扱ってきたお話を聞いたりし、今の自分たちにできることとして、現在リメイク作品の制作に取り組んでいる。今後E S Dの視点に立った学習指導が多くの教科で進められることを期待している。

昨年一年間E S Dの研究をしていて気付いたことは、E S Dについて語り合える仲間が学校にいないことであったが、今年度はE S Dについて語れる仲間が少しではあるが増えたことに喜びを感じている。また、様々な企画をする際に、これまでやってきたこと、現在やっていること、そしてこれからやろうとしていることに「つながり」が必要であると伝えてきたことが、今、先生方の中に少しずつではあるが受け入れられてきていることも実感している。今後、さらに学校全体にE S Dが広まるように努めたい。

参考文献・資料

- 1) 「E S D教材活用ガイド」 財団法人ユネスコ・アジア文化センター編 2009 3. 19
- 2) 「次世代の市民を育む学びのために」 持続可能な開発のための教育の10年推進会議(E S D - J) 編
- 3) 「総合学科の在り方に関する調査研究」 報告書 2012 3. 30 研究代表者東京女子体育大学特任教授 服部次郎

資料 1

「3年生より後輩へのアドバイス」の主なもの（抜粋）

<文プラン>

＊進路実現に向けてのアドバイス（学習法、資格、ボランティア活動等）

- ・定期考査以外も勉強し、1，2年次から学習習慣をつけるべき。（同様含 計 11 名）
- ・英検等の資格をとるべき。（10）
- ・部活動も続けるべき。（7）
- ・オープンキャンパスに1，2年から多く行くべき。（3）
- ・勉強法、テキストは先生の助言を参考にする。（2）
- ・夏休みは補習に出て、勉強のきっかけを作る。（2）
- ・3年からでは遅い。1年から勉強癖をつけたものは、勝ち組。（2）
- ・ともに頑張れる友達、ライバルの存在が大きい。（2）
- ・授業、課題、考査をしっかりとやれば後々かなり楽。（2）
- ・授業が大切。
- ・放課を無駄にしない。（単語等を覚える）
- ・やろうと思ったことはすぐにやるべき。
- ・目標が定まらなくても一生懸命勉強することが大切。成績が上がれば、選択肢が増える。
- ・センター試験まではある程度の英単語量で対応できるが、国立2次は対応できない。早めの対策を。
- ・ボランティアもやっという方が有利。
- ・トワイライト、ウィークエンド学習を利用するといいい。
- ・1つでも自分の得意科目をもつと（入試で）有利。
- ・国公立を目指すなら数学をしっかりとやるべき。
- ・センター試験の勉強をしっかりとやれば、私大の問題も勝手に解けるようになる。早くから私大に絞る必要はない。
- ・看護の専門学校や大学のほとんどが面接試験を行っているので、医療関係の本を読むととても役立つ。3年生は夏休みがチャンス。（看護専門学校進学者）
- ・就職だからといって勉強を怠ると大変なことになる。資格もとるべき（就職者）
- ・得意科目を作り、苦手科目をカバーする。
- ・とにかく最後まであきらめない。（何よりも大切）
- ・南山は問題にくせがあるので、過去問を解きまくる。英国世1セットを25回位やった。その際、時間を計ること。やり直しが大切。・・・（合格者より）
- ・先生にいっぱい頼った。（春からプリントをもらい毎日やった。）
- ・春から英単語を覚え、人より早くスタートできた。（速読英単語、ターゲット）
- ・自分が集中できる施設を早めに見つけ、学校が終わったら毎日通った。
- ・志望校に行きたいと思い続け、公言しまくった。
- ・受験では全く手応えがなく、落ちたと思ったが、受かった。
- ・努力は人を裏切らない。

資料 2

進路希望を、時系列で考えよう

⑥ になりたい自分像

将来自分は
になって、

↑

⑤ 「になりたい自分像」に近付くために

↑

東高 卒業

↑

④ そこでやりたいこと

↑

③ 2 年次からのプラン

プラン

↑

② 東高を志望した動機

↑

① 幼いころの自分の夢

1 年 組 番 氏名

科目選択に対するアンケート

1 ブラン選択をするうえで参考になったことは何ですか。
参考になったことに○を、特に参考になったことに◎をつけてください。複数回答可。

企業・キャンパス見学

☐

科目選択ガイダンス

☐

担任面接

6月 予備調査前

☐

9月上旬 面接週間

☐

9月中旬～下旬 面接

☐

オープンキャンパス

☐

職業インタビュー

☐

時系列で考えよう調査用紙

☐

その他 () ←記入

☐

2 影響を受けたアドバイスはだれからのアドバイスでしたか。参考になったことに○を、特に参考になったことに◎をつけてください。複数回答可。

教員(担任・教科担任等)

☐

家族

☐

先輩

☐

友人

☐

本校卒業生

☐

外部講師

☐

その他 () ←記入

☐

3 ブラン選択を終えての自分の選択に対する納得度をパーセントで表すと何%ですか。理由とともに教えてください。

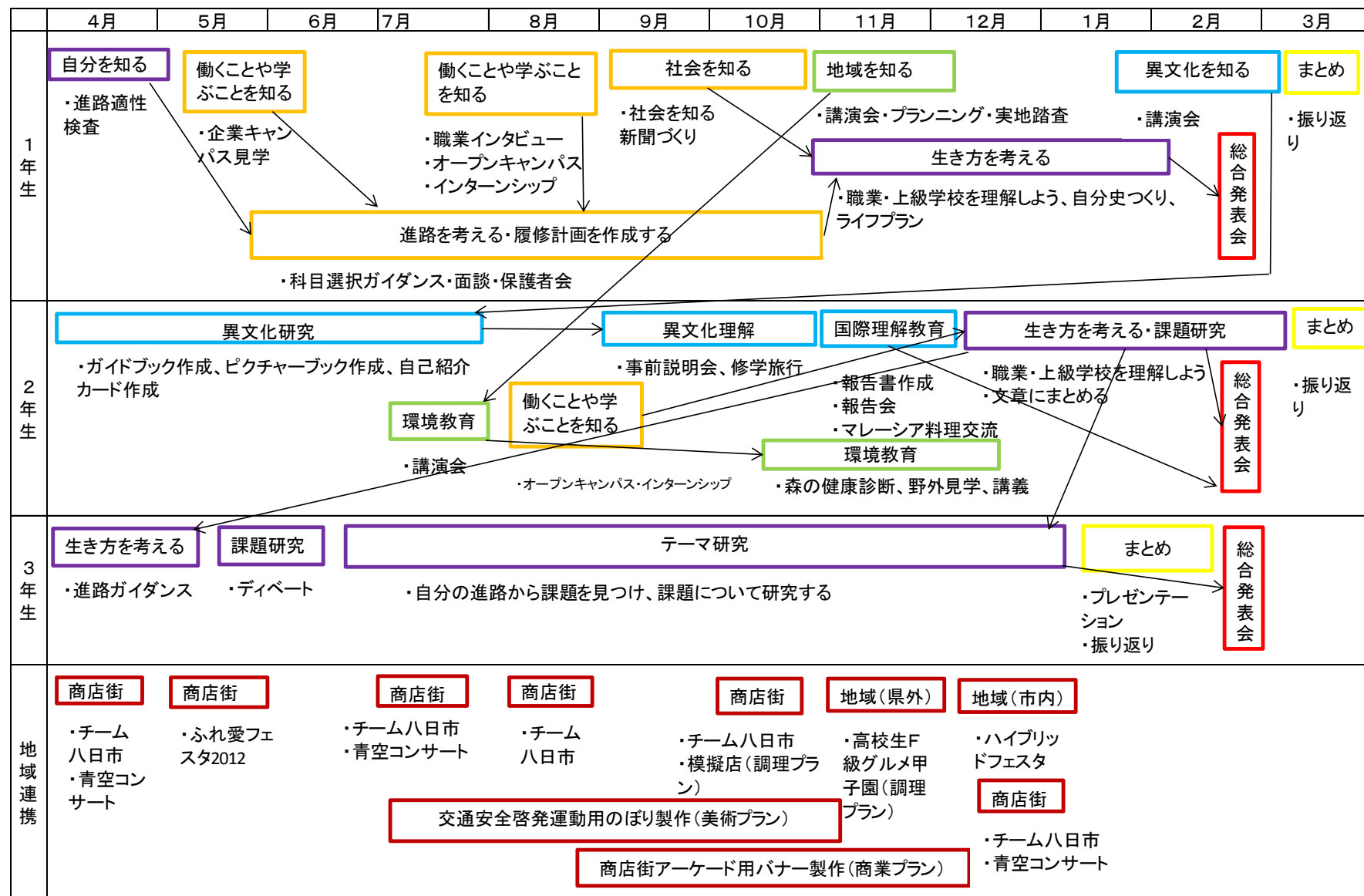
→
理由

4 科目選択にあたりもっとも悩んだこと、迷ったことは何ですか。

1年 組 番 氏名

平成24年度ESDカレンダー

愛知県立豊田東高等学校



実践 5

伝統行事を見つめ、地域を考える生徒の育成

ー祝い餅づくりを通したE S Dの取組ー

一宮市立葉栗中学校 宇佐美 徹

1 はじめに

開かれた学校づくりを進めるために、家庭や地域と協力し、連携を深めることが重視されている。また、生徒の育成に関しては、自分の生まれ育った地域を理解し、地域や社会に貢献しようとする能力や態度を培うことが重要な課題である。そこで、連携や能力・態度の育成を図るために、E S Dの視点を学習に取り入れ、自分との関係を重視しながら地域事象を理解させ、地域に生きる人々の願いや思いにまで迫ることが必要であると考えた。

本校では、昭和 22 年の学校創立以来続く「祝い餅づくり」という伝統行事があるが、長年続くがゆえに、田植えや餅つきなどの活動面が重視され、地域との連携や、地域の理解を促すという視点が軽視されがちとなっていた。E S Dの視点を取り入れることにより、生徒の学びをより主体的なものとするなどして「祝い餅づくり」を見直すことが地域連携、地域理解につながるものとする。

2 研究の目的

本校では、昭和 22 年の学校創立以来、感謝と卒業の祝いの気持ちを込めて、2 年生が卒業生に紅白の餅を贈る行事が続いている。学校創立時には、校庭がまだ整備されておらず水田であったため、その水田を利用し、餅米作り・餅つき・紅白の祝い餅作りが行われ、今日まで伝統的な行事として続いている。そこで、地域を巻き込んだ伝統的な行事である「祝い餅づくり」を、田植えや餅つきなどの活動面を重視するだけでなく、E S Dの視点を取り入れ、その目的や意義、卒業生や地域の人々の願いなどを生徒に考えさせ、理解させたいと考えた。そして、「祝い餅づくり」を中心に据えた学習活動を通して、地域社会の良さを考える生徒の育成を目指すことを本研究の目標とした。

3 研究の方法

(1) 「祝い餅づくり」を捉えなおした実践計画作り

行事のみに終わるのではなく、教科との連携を図りながら年間計画を立て、E S Dの視点を位置付けることとした。実践計画の作成にあたっては、以下の項目を重視した。

- ア 「祝い餅づくり」を中心に据え、教科との連携で問題解決的な学習を取り入れる。
- イ 地域とのつながりを重視した計画を作成する。
- ウ 外部へ発信することによって、自らの活動を見直す。

(2) E S Dの視点を取り入れた授業構成

国立教育政策研究所が提示したE S Dの視点表を用いて授業を構成し、実践を行う。行事を中心とする体験活動だけに終わらないように、問題を見つけ、調べ、解決していく過程を取り入れるように、以下の項目を重視した。

- ア 体験活動を重視しながら、活動に関する主体的な調べ学習を取り入れる。
- イ 地域の人々と関わらせることから生まれる、新たな気づきや発見を大切にする。
- ウ 他教科との連携により、新たな課題設定を行う。

4 研究の内容

(1) 「祝い餅づくり」を捉えなおした実践計画作り

ア 昨年度の「祝い餅づくり」

下の表のように、従来の「祝い餅づくり」を見直し、改善すべき点をもとにE S Dの視点を取り入れた実践計画を立てることとした。

＜従来の「祝い餅づくり」＞

(1) 目的

- ・卒業生に餅を贈ることによって、感謝の気持ちや卒業を祝う気持ちを伝える。
- ・「祝い餅」作りを通して、米作りの喜びや苦労を味わう。

(2) 活動計画

5月 もみまき（実行委員） 6月 田植え（2年全生徒） 8月 草取り（実行委員）
10月 稲刈り（2年全生徒） 3月 祝い餅つき、祝い餅贈呈式（2年全生徒）

(3) 活動の様子

P T Aの委員や、地元の農家の方に指導をいただきながら、もち米作りから餅つきまで行い、活動を終えた。活動後に簡単な感想を書かせて、行事のまとめとしていた。

＜改善すべき点＞

- ① 「祝い餅づくり」の意義を考えたり、伝えたりする場面設定がなされていない。
- ② 米作りに関して調べたり、農家へ取材に行ったりすることが行われておらず、米づくりの苦労や喜びなどを学ぶ場面が設定されていない。
- ③ 先輩から後輩への行事を引き継ぐ場面が設定されておらず、学年間のつながりが無い。
- ④ 学年の行事として捉えており、体験活動中心となるため、その活動の意義を考えさせ、地域を見つめさせる場の設定がなかった。
- ⑤ 他教科との関連を図ったり、主体的に問題解決を行ったりする場面の設定がなかった。

イ 本年度の実践計画

昨年度の改善すべき点を生かし、先に示された「E S Dの視点表による整理」「E S Dの視点に立った学習指導を進める上での留意事項」をもとに、以下のように計画を立てて実践を行った。

題材名 「葉栗を見つめよう」														
学習内容 地域社会を理解し、地域の活動に主体的に関わろうとする態度を養う。														
持続可能な社会づくりの構成概念							E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度							
I	II	III	IV	V	VI	VII	① 批判的に考える力	② 未来像を予測して計画を立てる力	③ 多面的・総合的に考える力	④ コミュニケーションを行う力	⑤ 他者と協力する態度	⑥ つながりを尊重する態度	⑦ 進んで参加する態度	⑧ その他
多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性	その他								
多様	相互 ○	有限 ○	公平	連携 ○	責任	他	批判	未来	多面 ○	伝達 ○	協力 ○	関連 ○	参加 ○	他

<第2学年 「葉栗を見つめよう」実践計画>

時期	学 習 活 動	E S Dの留意事項
5 月	・「祝い餅づくり」について考える（学活1時間） ・苗田作り・もみまきを通して農家との交流（総合2時間）	C B
6 月	・田植えの手順について（学活1時間） ・田植えを通して農家の人との交流（総合2時間） ・ケーブルテレビ番組「葉栗連区」の視聴（学活1時間） （内容：葉栗連区の祭り、伝統芸能など） ・地域に残る祭り，施設，行事，「祝い餅」などについての聞き取り	B B A A・C
7 月	・地域調べ 祭り，「島文楽」，「祝い餅」の歴史調べなど	C
8 月	・水の管理，除草などを通しての農家との交流（授業外2）	B
9 月	・地域調べのまとめ，意見交換，外部発信（ウェブページへ） ・稲作，農業調べ（社会3時間）	C A・B
10 月	・稲刈り（総合2時間），脱穀11月（総合2時間） ・明るい人生「七宝の里」（道徳4-（8）郷土愛） ・稲作，農業調べのまとめ，意見交換（社会1時間）	B A・B C
2 月	・「伝統」について考える（総合1時間） ・餅つきの手順について（学活1時間） ・明るい人生「校門を掘る子」（道徳4-（7）愛校心）	B・C B A・B
3 月	・祝い餅つき（総合5時間） ・「祝い餅」渡し（総合1時間）	B B

※E S Dの留意事項

A：教材のつながり B：人のつながり C：能力・態度のつながり

(2) E S Dの視点を取り入れた授業構成

ア 祝い餅作りの見直し（学活1時間）

5月の学活の時間を利用し、「祝い餅づくり」について考えさせる時間を設定した。2年生生徒全員に、「祝い餅づくりはなぜ行うのか」という質問をした。すると、「葉栗中の伝統行事だから」「3年生の卒業を祝うため」「先輩もやっていたから」などの回答があった。「祝い餅づくり」についての活動は予想できているものの、「続いているからやる」という意見が多く、その歴史や卒業生、地域の人々の願いについて考えることができなかった。そこで「祝い餅づくり」について、卒業生がどのような思いで「祝い餅づくり」に取り組んだのかを聞き取り調査し、行事を見直すことでその意義を考えさせたいと考えた。

資料1 聞き取りの質問事項

「祝い餅つき」について知ろう。

- 1 聞いた人
- 2 何年前に卒業したか
- 3 田植え・稲刈りの思いで
- 4 餅つきの思いで
- 5 祝い餅づくりをどう思うか
- 6 葉栗で残したい行事や祭りは

生徒は身近な人へ聞き取り調査を行った（資料１）。「あまり覚えていない」という回答がほとんどであったが 30 年以上前に体験した人たちからの聞き取りも含めて回答があった。集められた回答の中には、「卒業生のために…」「伝統的な行事だから…」という言葉も見られたが、やはり当時の苦労や楽しかった思い出が多く見られた（資料２）。

生徒に調査の結果を紹介し、「どんな思いで祝い餅づくりを行ったのだろうか」と問いかけたところ、30 年以上も前の卒業生の感想に驚きながらも「卒業生のことを真剣に思っている」「伝統を守ろうと思っている」などの意見が聞かれた。そこで、「伝統とは何か」という課題を設定し、「祝い餅づくり」を通して考えていくことを確認して授業を終えた。

イ 稲作

（ア）苗田つくり・田植え

地域の人々との交流を図りながら、体験活動を進めるために、PTAの委員や、地元の農家の方に指導をいただきながら、種まきや田植えを行った。以前は苗田に直に種まきを行っていたが、ここ数年は育苗箱に種をまき、苗田で育てる方法をとっている。予想以上に難しい作業で、種のまき方についても、熱心に保護者に聞きながら作業を進めていった。特に田植えについては苗が多すぎないように注意したり、列がゆがんでいないかを農家の人に確認したりしながら進めていった。苗田作りや田植えを、地域の人々との協力で行うことで、地域との関連を意識させることができた。



地域の人から種まきの指導



苗田作り



田植えの様子

（イ）稲刈り

PTAの委員の方やボランティアの保護者の方々に協力していただき、10 月の下旬に稲刈りを行った。鎌を触ったことがない生徒がほとんどであったが、持ち方や使い方の説明を受け、稲刈りを進めることができた。また、刈り取った稲の干し方や、最近は乾燥機で乾燥させることも多いことなどを教えていただくこともできた。体験を終えた生徒の感想には、作業に対して、先輩に対して、保護者

資料２ 聞き取り調査の結果

< 3・4 の回答 >

- ・あまり覚えていないが、餅を食べたことは覚えている。
- ・男子が餅つき、女子が餅を丸める係だった。
- ・田植えと稲刈りがたいへんだったけど、ついた餅は美味しかった。
- ・田植えの時は泥だらけになっても、餅ができた時はうれしかった。
- ・田植えは前半クラス、稲刈りは後半クラスだった。など

< 5 の回答 >

- ・卒業する 3 年生を送りだす、大切な行事だった。
- ・伝統に触れられた気がしてうれしかった。
- ・餅をもらうことよりも、稲作や餅作りの方が思い出に残っている。
- ・これからも、多くの中学生に体験してほしい。
- ・餅の様に粘り強く生きてほしいという願いが込められている。 など

の方々に対しての思いなどが綴られていた（資料3）。



保護者の方による準備



稲刈り



稲木へ干す様子

資料3 稲刈り後の感想

稲刈りを終えて

稲刈りはとても良い体験になりました。田植えのとき、まだ小さい稲が、とても大きく成長していました。自分達で作った米を先輩方にあげられると思うと、とてもわくわくします。

稲を刈った後の稲穂拾いは、田に落ちている稲穂がもったいなく感じて特に一生懸命にやりました。

……稲刈りも、稲穂拾いも、とても大変な作業でしたが、先輩方から教わったように、丁寧にやりました。稲刈りも、稲穂拾いも、とても大変な作業でしたが、先輩方から教わったように、丁寧にやりました。

……稲刈りも、稲穂拾いも、とても大変な作業でしたが、先輩方から教わったように、丁寧にやりました。稲刈りも、稲穂拾いも、とても大変な作業でしたが、先輩方から教わったように、丁寧にやりました。

ウ 地域調べ

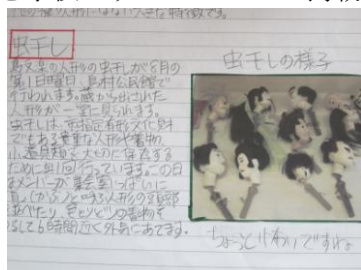
地域社会に愛着をもち、主体的に関わろうとする態度を育てるために、地域の文化や伝統について調べさせ、地域を理解させたいと考えた。

(ア) 課題の設定

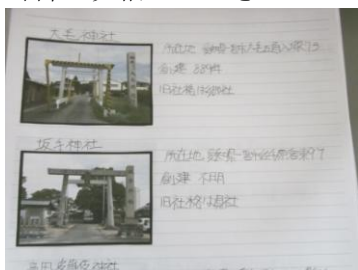
葉栗の地域の特徴を大まかに理解させるために、ケーブルテレビの番組「葉栗連区」を視聴させた。番組の内容は、葉栗連区に残る祭りやその歴史の紹介、葉栗中学校の「祝い餅づくり」の紹介、伝統芸能の紹介などであった。視聴後の生徒の感想は、「色々な祭りがあるので驚いた」「祭りに近所の人が出ていた」などの感想のほか、「歴史のある祭りが多い」「伝統芸能は続けられるのか」などの感想もあった。それらの感想や、聞き取り調査6（p.82 資料1）での結果を受けて、地域について詳しく知りたい項目を設定させた。この項目を課題として、夏休み中の調べ学習へと進めていった。

(イ) 調べ学習

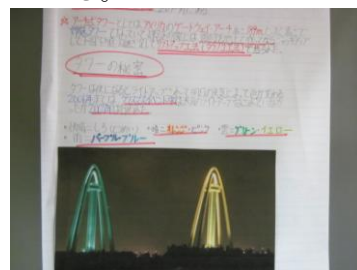
夏休み中に生徒に調べ学習を行わせた。課題を各自追究させ、簡単なレポートを書かせたところ、地域に関するさまざまなレポートが提出された。個々のレポートにより、地域の施設や歴史などについて、今まで気付かなかったことも再発見することができた。簡単な発表会を行ったが、今後調べた内容を学校のウェブページに掲載し、外部へ発信していきたいと考えている。



島文楽について



地元の神社について



138タワーについて

エ 他教科との関連

他教科との関連を図りながら、地域社会を見つめ直したり、日本全体に関わる、新たな課題を見つけ出させたりしたいと考えた。

(ア) 2年生の実践

2年生では稲作づくりの体験学習をもとに、社会科の時間で日本の農業の現状について調べ、日本や世界の食糧事情にまで迫りたいと考えている。また、道徳の時間との関連を図り、内容項目「郷土愛」や「愛校心」の資料を基に話し合い、地域を思う気持ちを育みたい。

(イ) 3年生の実践

地域を社会事象から見つめ直すだけでなく、自然事象の面から地域社会をとらえ直すことによって地域理解を深めるとともに、新たな課題を見付けさせたいと考えた。

3年生の理科の授業に身の回りの環境について考える単元があるため、土の中には小動物がどれだけいるのか調べたり、葉栗連区の空気の汚れを知るためにマツの葉の気孔の汚れについて調べたりした。

土の中の小動物については、家の周りから採ってきた土を観察した。その結果、小動物が全く見つかることのできなかった土もあり、生徒からは、「土が汚れているんじゃないか」「雑草が生えていなかったから除草剤がまいてあったのではないか」などの意見が出された。

マツの葉の気孔の観察では、葉栗連区から班ごとにマツの葉を採取し、気孔の汚れについて予想を立てさせ、それぞれ気孔の観察を行わせた。交通量の多い場所では汚れているという意見が多かったが、予想よりも気孔の汚れは少なく、環境を汚さないために自動車のエンジンにも工夫がされているという意見も出てきた。

また、葉栗の環境の様子から、名古屋はもっと汚れているのではないか、採取した時期に138タワーでイベントがあったため交通量が増えて気孔が汚れたのではないかなど、環境についてしっかりと目を向けて考えることができた。継続して調べ、みんなにもっと知ってもらおうという意見があり、調査結果を分布図にまとめることになった。



道徳の授業の様子



土の中の小動物の観察



マツの葉の気孔の汚れ分布

5 研究のまとめと今後の課題

体験活動を軸としてESDを展開することは、地域社会に関する多くのテーマを設定することが可能となり、学校のある地域を理解し、再発見するのに大変有効であったと思う。行事としての体験活動であった「祝い餅づくり」に、ESDの視点を取り入れることにより、さまざまな要素が絡み合い、「伝統とは何か」という追究課題を設定することができた。そして、その後の地域調べの学習へとつ

ながら、生徒に調べさせたり、考えさせたりする活動を通して、地域理解へとつなげることができた。

今後の課題として、次の4点が挙げられる。

- ①学年・学校全体の年間計画や単元目標づくりの必要性
- ②課題を自らの問題として捉えさせる工夫
- ③評価規準の設定
- ④学校、地域との協力体制の確立

年間の計画については、年度の途中からの実践であったため、学校全体を巻き込んだ学習計画が立てられなかった。また、2学年の計画についても大まかな計画でスタートしたため、学習活動の目標が明確でなく、教科との関連をはっきりもたせることができず終わってしまい、1年を通した大きなテーマの設定がなかなかできなかった。平成25年度に向けて作成したESDカレンダー（p.87 資料4）をさらに検討し直し、身に付けさせたい能力や態度を明確にした上で、年間を見通した学習活動の関連を図ることが重要な課題であると考ええる。

また、さまざまな事象を自分自身の身近な問題として捉えさせることが十分にできなかった。そのため、活動に深まりがなく、能力や態度の育成についての評価も不十分であった。身近な問題と捉えさせるために、身近なテーマの設定だけでなく、話し合いの時間を十分に確保する必要がある。そして、話し合いをさらに深めるために、ポートフォリオを作成するなどの手立てが大切であると考ええる。

さらに、生徒に目標とする能力や態度が身に付いたかどうかを検証するために、評価規準を学校全体で話し合い、設定していくことが必要である。地域をどれだけ見つめ直すことができたのか、地域に対する思いがどのように変化したのかなどを把握するため、アンケートなどを準備する必要があると感じている。

そして、今までの実践を通して、持続可能な社会を築く取り組みについて、生徒にどのような力を付けることが必要であるのかを、現在設置されている「コミュニティースクール」の組織を活用し、学校だけでなく地域も巻き込んで考え、そのための具体的な手立てを学校・地域体制で確立していく必要があると感じた。

本研究は、3月まで継続することになるが、実践できていなかった学習を実践し、不十分であった学習を補足していきたいと考えている。「伝統とは何か」について話し合うことで、地域の人々の思いや願いが伝えられるのではないかと考えている。その願いが伝わった時に、本当の意味での地域理解につながり、地域への愛情や地域行事への積極的な参加が可能になるのではないかと思う。

＜資料４＞ 平成 25 年度 第 2 学年 「葉栗を見つめよう」ＥＳＤカレンダー

教科等	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	2 月	3 月
総合的な学習 の時間		苗田づくり もみまき	田植え	水の管理 除草	水の管理 除草		稲刈り	「伝統」について考える	祝い餅つき 祝い餅渡し
上段・・・体験 下段・・・調査	「祝い餅づくり」 オリエンテーション 聞き取り、発表			地域調べ	地域調べ	地域調べ発表 外部発信（ウェブページ）			
学活		苗田づくり もみまき作 業手順の確 認	田植え・除草作業手順の確認 ケーブルテレビ視聴 地域調べテーマ決め				作業手順の確認		
社会科						「日本の農業調べ」 ・農業の現状と食糧問題			
理科						「動物の生活と生物の進化」 ・植物と動物の細胞の観察			
家庭科								「地域の食文化を知ろう」 ・地域の食材と調理、地産地消、 地域の食文化、郷土料理、行事食	
道徳						「七宝の里」（明るい人生） 4-（8）郷土愛		「校門を掘る子」（明るい人生） 4-（7）愛校心	
重視する能力・態度	・伝達 ・関連 ・参加	・協力 ・参加	・協力 ・参加			・多面 ・伝達 ・協力 ・関連 ・参加		・多面 ・協力 ・関連 ・参加	

実践6

高等学校における地域をフィールドとした実践的マーケティング活動の展開

—E S Dの視点で見直したミツバチプロジェクトの取組—

愛知県立愛知商業高等学校 梶原英彦

1 はじめに

本校は、大正8年創立の県立高校で、創立93年を迎える商業高校である。校訓に「文武両道」を掲げ、専門高校として生徒の自立する心や、創造力、主体性を育み、実社会で活躍できる実践力、専門性のある職業人を育てることを目標としている。学習への熱意を通し、地域社会の活性化のために貢献できるような人材の育成も目標としている。また、クラブ活動を通して人間性を育成するため、技術を高めることだけに終始せず、礼儀や挨拶をはじめ人間としての心のもち方や姿勢を指導することにも重きを置いている。

商業専門高校としての責任を負う本校では、学校独自の工夫されたカリキュラムをもっている。生徒の進路を実現させるため、四つのコースを設定し、生徒は自分の興味や必要性から幾つかの教科・科目を選択できるようになっている。さらに、本校では生徒に対し、さまざまな技術・仕事に必要な資格を取得するための手助けを行っている。これらの資格を取得することで、生徒は就職や大学進学の際に生かすことができている。

また本校の特色の一つである総合的な学習の時間の代替科目「課題研究」では、さまざまな講座が開設されている。本研究では、商業教育における「課題研究」を一層充実させることにより、自ら考え、自ら行動し、自ら解決していく態度と考え方を涵養することを目的として、上記の研究テーマを設定し、E S Dの考え方、視点で見直す取組を実践することにした。

2 研究の目的

本校では、学習指導要領における商業科の教育内容である地域等の諸問題を発見する探究力・論理的思考力・表現力を育成するために、科目「課題研究」の選択講座として「マーケティング研究」を開講し、大学や企業等と連携し、地域に根ざした実践を展開してきた。これまでの活動を振り返ってみるとE S Dの活動と重なる部分も多い。E S Dは、子どもたちが直面している「環境」「経済」「社会」に関わるさまざまな課題に向き合い、先人の知恵を学びながら、互いに協力し合って取り組んでいく協働プロセスである。E S Dは、地域に暮らすさまざまな立場の人々によって、地域をはじめあらゆる場面で展開されるものであり、総合的に学び、実践することが大切である。本講座では、「環境」「経済」「社会」といった多面的な視点から問題を追究し、その問題に対して自ら学び、考え、具体的な行動を実践する商業を学ぶ生徒を育て、さらにはさまざまな主体との協力によって、「環境」「経済」「社会」のバランスがとれた持続可能な社会の構築に貢献できる生徒を育成することを目指して、本研究をスタートさせた（p. 89図1）。



学校（正門より）



活動風景（養蜂）

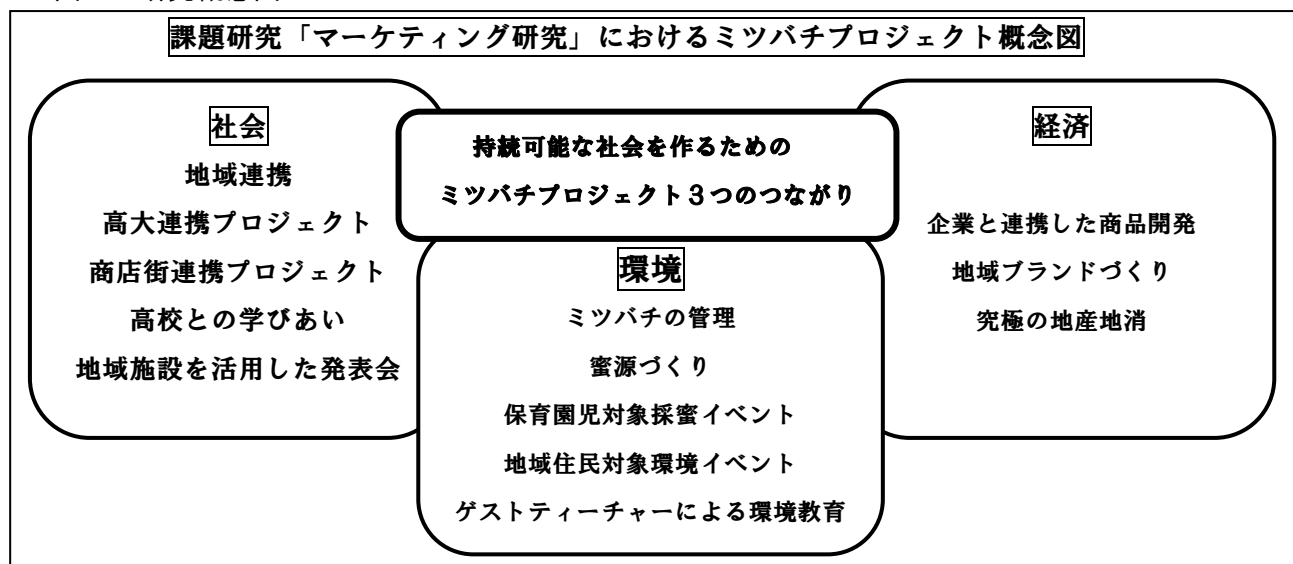
【参考】E S D（Education for Sustainable Development）とは、「持続可能な発展のための教育」の英語訳で、持続可能な社会可能な社会づくりのための、あらゆるレベルの教育や相互の学び合いを意味する。

自然環境，経済環境，社会環境の調和のとれた発展のために必要な知恵や考え方を，人々が互いに学び育むこと，それが，「持続可能な発展のための教育（E S D）である。

※環境＝自然・経済・社会

（中部E S D拠点がめざす持続可能な地域づくり「中部E S D拠点のアクションプラン」より）

図1 研究概念図



3 研究の方法

(1) チェックシートによる分析

本講座の取組であるミツバチプロジェクトを「環境」「経済」「社会」をチェックシートに当てはめて分析する。さらに，E S Dへのアプローチを明確にするため，追加できる視点をチェックシート（国立教育政策研究所の提示したもの）に加える（表1）。

表1 実践と内容・方法との関係

環：環境 経：経済 社：社会

方法（技能） 内容（概念）	①批判的思考	②システム思考	③未来志向思考	④問題対処のスキル	⑤行動のスキル	⑥コミュニケーションのスキル
I 人間の尊厳		○社			○社	○社
II 将来世代への責任			●社	●社	●社	○社
III 自然との共存	●環	○環	○環	○社	○環	○環
IV 経済的社会的公正	○経	●経				●社
V 文化の多様性の尊重					○社	○社

○は従来からの視点，●は改善点として加えられた視点

E S Dカレンダーとチェックシートによる分析に沿って，各実践を行った。体験活動だけの学習にならないように，E S Dの視点を明確にする。

(2) ESDの視点で見直した課題研究「マーケティング研究」のカリキュラム（ESDカレンダー）
づくり

課題研究「マーケティング研究」を中心に、教科商業との関連を意識しながら年間計画を立て、それぞれの学習活動に年間計画を位置付ける（表2）。

- ① これまでの課題研究「マーケティング研究」におけるミツバチプロジェクトの活動を「環境」「経済」「社会」の3つの視点で整理する。
- ② それぞれの活動に関わるESDの視点を、ESDカレンダーに記載する。
- ③ ESDの視点で見直し、よりESDの方向性と合致するように学習活動を改善する。

表2 ESDの視点を入れた年間計画

ESDの視点	環境	経済	社会	
4月	ミツバチの世話、採蜜作業 飼育活動・体験的活動 校内に花を植えて、ミツバチの蜜源づくりとなる「ミツバチ花壇づくり」 栽培活動・体験的活動・主体的思考	徳川園内にあるレストラン・カフェへの蜂蜜販売・商品化 主体的活動・体験的活動 採れた蜂蜜のブランド化を目指し、ゲストティーチャー（日本弁理士会東海支部）の継続的な支援をうけ、知的財産教育を実践 主体的活動・体験的活動	ガイドボランティアによる文化のみち街歩き体験 地域連携	名古屋学院大学地域連携センター主催「ミツバチ学習会」参加 地域連携・多様な立場の人との学び合い
5月	ビオトープづくり 体験的活動		地域住民連絡協議会、東区役所などへのプレゼンテーション実施 体験的活動・地域連携	
6月	保育園児を対象として採蜜イベント実施 体験的活動・主体的思考		ミツバチ高大連携・名院大生よりオリジナルパンの商品化講座受講 主体的活動・地域連携	
7月	大学生と連携した環境イベント実施（徳川園） 体験的活動・主体的な思考	企業と連携した蜂蜜を活用した商品開発 体験的活動・主体的な思考や行動		
9月	大学生と連携した環境イベント実施（白鳥庭園） 体験的活動・主体的な思考や行動		・東区ガイドボランティア報告会に参加・発表 多様な立場の人と学ぶ	・東日本大震災支援バザーへの出店 地域連携 ・名古屋陶磁器会館において取組内容を展示・発表 人・施設のつながり
10月	ゲストティーチャーによる環境教育 自然環境教育			
11月			・銀座ミツバチプロジェクトでの発表・交流 多様な立場の人と学び合い	
12月				
1月				
2月				
3月	課題研究発表会			

4 研究の内容

(1) 目指す生徒像とミツバチプロジェクトの概説

目指す生徒像を以下のように設定した。

- ・自立した社会人・職業人として、地域への愛情と誇りをもって、地域の発展に積極的に貢献できる生徒。
- ・環境に関する知識とそれを守り育てる技術を身に付け、自然との共生を図ろうとする生徒。

持続可能な社会にしていくためには、経済・環境・社会のバランスがとれていないといけない。これらの学びがE S D、持続可能な社会をつくるための学びになっていると考えられる。以下、活動を通して環境、社会、経済の3つの視点に照らし合わせながら考察していく。

本校（名古屋市東区徳川）周辺には、「白壁・主税・檀木町並み保存地区」を中心に、西は名古屋城付近から東は尾張徳川家ゆかりの庭園「徳川園」まで江戸時代から明治、大正へと続く名古屋の近代化の歩みを伝える貴重な歴史的建造物が多く残されており、このエリアは「文化のみち」と名付けられている。平成23年度からは、名古屋の中でもより自分たちのキャンパスに近い地域で活動を展開していこうと考え、名古屋のモノづくりの歴史や伝統を知ることができる「文化のみち」に着目し、調査を実施した。調査結果からブレインストーミングを重ねた結果、生徒たちの間ではいくつかのキーワードがあがったが、その中でも市街地での養蜂を通じて生態系向上やハチミツを使った商品開発などで地域活性化を目指す「都市養蜂」に最も興味を示す生徒が多数いた。本講座では、まちづくりへの貢献を目的として「なごや文化のみちミツバチプロジェクト」を立ち上げ、校舎の屋上でミツバチ育成の実証実験を開始した。

これまでの課題研究「マーケティング研究」におけるミツバチプロジェクトの活動を「環境」「経済」「社会」の3つの視点で整理してみる。



名古屋2大庭園はちみつ対決

(2) 環境的側面からみたミツバチプロジェクト

受粉を行うミツバチの存在は、生物多様性や環境問題の観点から、非常に重要な問題と認識されつつある。ミツバチの生態やハチミツの効用などの学習を通して、自然や生態系への理解を深めようと飼育下でしか分からないミツバチの生態を観察してもらい、生き物を通して生態系や地域の環境について感じてもらうきっかけにしておこうと未就学児を対象とした環境教育「ミツバチ観察会&採蜜体験」を数回実施している。この活動では、巣枠観察・ミツバチクイズ・遠心分離機体験などを通して、飼育下でしか分からないミツバチの生態を観察しており、地域の環境について考えるきっかけとなっている。また、近隣の住民を招き、本校近くにある尾張徳川家ゆかりの庭園「徳川園」で「ミツバチがつなぐ名古屋2大庭園（徳川園・白鳥庭園）はちみつ対決」イベントを開催、この企画は「なごや文化のみちミツバチプロジェクト」チームと名古屋学院大学「みつばちプロジェクト」チームが合同で行い、徳川園と白鳥庭園のハチミツの味比べを通して、来園者の方々に楽しみながら、環境問題や生物多様性を感じてもらうことをねらいとして実施した。イベント後には「蜂蜜を通して、環境や地域経済のことを総合的に考えていて頼もしい」「この地方の自然と活性化のために頑張っていて欲しい」などのコメントもいただき、大変好評を得ることができた。

このような環境コミュニケーションは、ミツバチと共生するまちづくりを、蜂蜜や受粉といった生態系サービスの観点から改めて認識するよい機会となっている。各イベントにおけるアンケート調査によると、この取組をきっかけとして自然環境への意識が高まったなどの回答があり、生物多様性の啓発活動としても成果が上がっている。



校舎屋上での作業の様子



保育園児対象ミツバチ観察会



ゲストティーチャーによる環境教育

(3) 経済的側面からみたミツバチプロジェクト

ミツバチから、蜂蜜という恩恵・サービスをもたらっていて、それを使って商品化するというマーケティング活動の展開について考えたい。

ア 究極の地産地消

文化のみちで採れた蜂蜜は、文化のみちでしか味わえない、まさに究極の地産地消である。そこで、採れた蜂蜜をこの地域独自の新たなブランドにしようと考えた。そしてその名称を、学校の所在地が東区徳川であることと「文化のみち」に数多く点在する歴史的建造物が尾張藩徳川家との関わりが深いことから、この活動を通じて多くの人に尾張徳川家の歴史についても知ってもらいたいという思いも込めて、「徳川はちみつ」と名付けた。

ミツバチの主な蜜源とみられている徳川園では、素敵な景色とともに、蜂蜜の味覚も楽しんでもらおうと、園内のレストランやカフェにおいて、本校の「徳川はちみつ」を使用した様々な料理を提供していただいた。メニューには生徒の取組内容が記載されており、お客様からは大変好評を得ることができた。その他、文化のみちエリアにある洋菓子店などにも「徳川はちみつ」を提供し、数多くの「Made in 徳川」の商品化が実現した。生徒のアイデアを取り入れた商品開発のほか、店頭には生徒が作成したPOP広告を置かせていただくなど販売促進活動の体験学習も併せて行った。

調査の結果、蜂蜜を提供する店舗では売上の増加はあまり見られなかったが、来店するお客様とのコミュニケーションについては「今まで以上に増加した」と答えた店舗がほとんどであった。この他にも、「地域でとれた蜂蜜を使うことで新規のお客様が増えた」「常連のお客様とも、蜂蜜を通じて会話が弾むようになった」などのうれしいコメントも各店舗から数多くいただいた。また、「蜂蜜を使った新たな商品を開発している」「学生が蜂蜜を届けに来てくれるのが待ち遠しい」といったように、蜂蜜を使った商品開発・品揃えに対する意欲への貢献度も向上したという声も多かった。これは、蜂蜜を用いた「食ビジネス」が地域のコミュニケーションツールとして、また、店舗の新商品開発や品揃えに対する意欲向上のきっかけとして活用されたという証明であり、まちづくりを目指すこれからの活動に生徒は自信をもつことができた。

イ 企業と連携した持続可能な商品開発

名古屋名物である「ういろう」を若い世代にも親しまれるスイーツにしようと、株式会社電通中部

支社の指導と名古屋の老舗和菓子メーカー青柳総本家の全面協力を得て、「徳川はちみつ」とサツマイモを使った「若者に好まれるういろう研究プロジェクト」を実践した。このプロジェクトは工場での学習会、市場分析、アンケート項目作成・調査実施・集計データの活用法、グループワークを通して商品コンセプトや商品イメージづくり・パッケージデザイン案・ネーミング案の検討、試食会実施、メーカーへの最終プレゼンテーションといった商品開発の一連の流れを実践的に学ぶ取組である。

これらの活動を通して、常に生徒に意識させていることは、高校生であるという甘えは捨てることと、社会的な責任をチームで負わせ、計画的にプロジェクトを実行させることである。高校生が地域や企業と関わりながら取り組むこの活動では、計画通りに行かなかったり、チームとして機能しなかったりと失敗することも多々ある。こうした経験を積み重ねることによって、少しずつであるが失敗を恐れないというメンタル面でたくましさも感じられるようになってきた。また、生徒に対して行ったアンケート結果からも「責任感が生まれた」、「地域に貢献できた」「地域の方々に認められた」という実感をもつ生徒も多く、誇りのもてる活動となっている。現在、この「ういろう」は、商品名「はにーも ういろう」として発売に向けて準備がすすんでいる。



企業と連携した商品開発



提供されているスイーツの一例



地域イベントでの販売活動

(4) 社会的側面からみたミツバチプロジェクト

地域連携、大学との連携、他の高校との連携による学び合い、そして、消費者とのつながりを考えたい。

ア 高大連携プロジェクト

都市養蜂の活動にあたっては、平成22年からミツバチプロジェクトを実践している名古屋学院大学経済学部「地域活性化研究室」の協力を仰ぎ、高大連携プロジェクトをスタートさせることにした。このプロジェクトでは、講義や実習を通じて、大学のもつノウハウや知識を伝授していただきながら、本校周辺の環境を生かした活動を行っている。大学からは、都心での養蜂の心得や高校生によるビジネスモデル構築に向けてのマーケティング理論、蜂蜜パン作りの商品化などについて継続的に指導を受けている。

今後は、指導を受けた商品開発の手法を生かして、地域の店舗に商品開発を提案し、実際の商品化を目指していく。

イ 商店街連携プロジェクト

名古屋におけるミツバチを媒体とした地域のネットワークが着実に広がっており、名古屋学院大学を中心として、名古屋の四つの商店街（柳原商店街、笠寺観音商店街、桜山商店街、日比野商店街）が名古屋市商店街連携支援事業として合同勉強会や新たな商品開発採蜜イベントの開催な



イベントでの異なる世代の方々との交流

どを内容とする「なごや商店街ミツバチ連携プロジェクト」を実施している。本校も参加させていただき、異なる世代の方々との交流を通して、生徒は多くの学びの機会を得て着実に成長している。

ウ 木曽川高校×愛知商業高校 被災地応援プロジェクト

本校で採取した蜂蜜を活用し、木曽川高校の生徒がクリームパン「徳川はちみつ入りもっこう（木高パン）」の商品開発を行うといった他校との連携プロジェクトも推進している。木曽川高校の生徒は、びさいまつり（一宮市開催）、愛知商業の生徒は、布池教会バザー（名古屋市開催）とファームエイド銀座（東京・銀座開催）にて販売、収益金は全額、東日本大震災復興支援のために寄付した。E S Dの視点を取り入れた高校と高校の連携による商品開発は新たなつながりを生み、学びの場となっている。自分一人だけで考え、実践する成果は小さいが、皆で考え、実践することは大きな成果に変わっていく。そんな気付きのある取組に変わってきた。



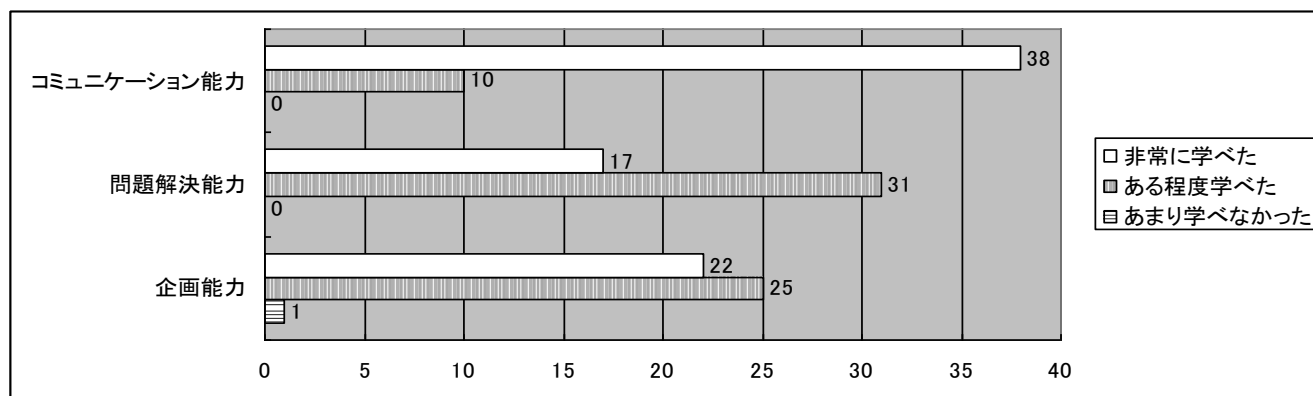
東京・銀座ミツバチプロジェクトでの
研究発表（ファームエイド銀座2012）

科目「課題研究・マーケティング研究」講座を選択した生徒に対するアンケート結果

質問1：コミュニケーション能力について

質問2：問題解決能力について

質問3：企画能力について



活動を終えた生徒の感想

- ・活動を通して、ミツバチが生態系維持のためにとっても重要な生き物であることを知った。
- ・ミツバチを通してたくさんの人たちと出会う事ができ、幅広い世代の人たちと関わっていく中で、コミュニケーションをとることが以前よりも得意になった。
- ・自分たちで提案し合い、議論を深めることは大変だったけど、社会人の方と話すことで勉強になった。
- ・地域の方々や大学生との出会いを通して、いろいろな考え方を知ることができ、人生の価値観が変わった。

また、生徒に対して行ったアンケート結果ではほかにも「責任感が生まれた」「地域に貢献できた」「地域の方々に認められた」という実感をもつ生徒も多く、E S Dの視点を取り入れたことで誇りのもてる活動となっていることがうかがえる。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 実践の成果

- ・ミツバチプロジェクトを通して学ぶことで、地域の文化や経済、環境とのつながりについても関心をもつようになった。
- ・ミツバチプロジェクトを通して、地域の自然に触れ、地域の自然・環境について興味・関心を高めることができた。また、地域の自然・環境が豊かであることを知り、守っていきたいという意欲を高めることにつながった。
- ・地域の人々などとの触れ合いを通し、地域に暮らす人々への関心が高まるとともに、その人々の思いや願いに気付くようになった。
- ・ミツバチプロジェクトを通して、学校教育と地域の連携が深まった。
- ・地産地消の大切さを実感させることができた。
- ・ミツバチプロジェクトを通して、地域の特徴を理解し、環境を保全する態度を養った。



地域住民を対象としたはちみつ試食会

(2) 次年度への課題

- ・地域の人材、地域素材、地域連携などを見直すことで、教員のE S Dへの意識高揚を図りたい。
- ・保護者、地域の方々にE S Dの理念を広め、連携のさらなる具現化を図りたい。
- ・他の高校と連携してE S Dを推進していきたい。
- ・課題研究（総合的な学習の時間）だけでなく、さらなるE S Dの推進に向けて、どのような活動が必要か、全教育活動を見直した計画を立てること。
- ・E S Dの取組に地域人材に協力してもらう体制ができてきたが、今後も活動の幅を広げるために新たな人材の発掘が課題である。
- ・E S Dカレンダーを基に、ミツバチプロジェクトを他教科との連携・協働した実践とすることで、学校全体の取組とする。

7 おわりに

今回の研究で、現在の取組にE S Dの視点を少しでも取り入れることで新しい展開ができることや学びが深まることが分かった。また、この研究を通して、E S Dの基本的な考え方として、物事を総合的に見るということであり、経済的な側面、社会的な側面、環境的な側面を総合的に見ていくことが重要であるということ学んだ。

今後は「持続可能な社会に貢献できる人材を育成する」意味においても学校全体でE S Dに取り組むことが大切であることを改めて実感している。

ミツバチプロジェクト（p. 97 資料 1 参照）がスタートして、2年目を迎えた。立ち上げ当初は、ミツバチを学校の屋上で飼育して安全面は大丈夫か、名古屋都心でどの程度、蜜が採れるかなど心配は尽きなかった。しかし今では、歴史と伝統を大切に守り続けてきたこの地域で蜂蜜を採り、その採れた蜂蜜で地域と連携し、この地域ならではのさまざまなしかけが可能だということを実体験することができた。さらに、このプロジェクトを通して持続可能なまちづくりへの新しいアプローチが少しずつ



東区役所での研究発表（歩こう！文化のみち
プレイベント・ガイドボランティア報告会）

つ見えてきている。今後もE S Dの視点を大切にしながら、ソーシャルビジネスを取り入れた高校生による新しいビジネスモデルの開発を継続的な活動として、他地域での活性化モデルとなるようにしていきたい。また、この取組を通じて、生徒を夢中にさせる舞台を設定することも教師の役目であり、経験豊かな地域の方々と教員が連携することで、生徒を成長させることができると考えている。以上のことを念頭に置きながら、今後も地域に根ざし、地域から信頼されるこの地域ならではのE S Dを展開していくとともに、ミツバチという一つの生物から環境教育、地域交流、マーケティングなど多分野にわたって学んでいきたい。

※参考文献

- ・「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究 最終報告書」国立教育政策研究所 2012. 3
- ・「中部E S D拠点がめざす持続可能な地域づくり」 中部E S D拠点のアクションプラン

「なごや 文化のみち ミツバチプロジェクト」について

2011年6月より愛知商業高等学校校舎屋上において
ミツバチの飼育を開始しました！



「なごや 文化のみち ミツバチプロジェクト」とは

☆愛知商業マーケティング研究グループは、本校キャンパス周辺に広がる名古屋近代化の歴史遺産が数多く残るエリア「文化のみち」の地域活性化を目指して、みつばち育成の実証実験を開始しました。

☆“文化のみちで採れたはちみつは、文化のみちでしか味わえない”をコンセプトに「なごや 文化のみち ミツバチプロジェクト」を立ち上げ、この地域で採れた貴重なはちみつを活用した高校生による観光まちづくりの新しいアプローチを模索しています。

☆運営主体は、3年生の授業「課題研究・マーケティング研究」みつばちチームです。



社会貢献活動

近隣の保育園・幼稚園児をお迎えして、みつばち観察＆採蜜体験イベントを随時開催しています。



布池教会で開催された東日本大震災支援バザーや「歩こう！文化のみち」に出店、徳川はちみつを使った商品を販売するなど地域の活動にも積極的に参加しています。



「徳川はちみつ」で地域のお店と商品開発

採れたはちみつをこの地域の新たなブランドにしようと、学校の所在地（東区徳川）とこの地域が尾張藩徳川家にかかわりが深いことから歴史と文化の香りがする「徳川はちみつ」と名付けました。最近では、その貴重なはちみつを白壁ロールで有名な洋菓子店「パティスリー・リムーザン」や徳川園内にある「ガーデンレストラン徳川園」などに提供、私たちのアイデアが詰まったスイーツの商品化が実現しています。



愛商みつばち「とくがわハッチ」の蜜源



主な蜜源は、愛知商業キャンパス周辺に広がる徳川園や建中寺公園、名城公園そして町並み保存地区の庭園にある花々です。



問い合わせ先

〒461-0025 名古屋市東区徳川一丁目12番1号
県立愛知商業高等学校 電話番号 (052) 935-3480【代表】
課題研究「マーケティング研究」グループ(担当教諭 梶原英彦)

実践 7

問題・課題解決能力を育む ESD の実践

ー総合的な学習の時間の ESD 化を通してー

愛知県立刈谷高等学校 渡邊 芳隆

1 はじめに

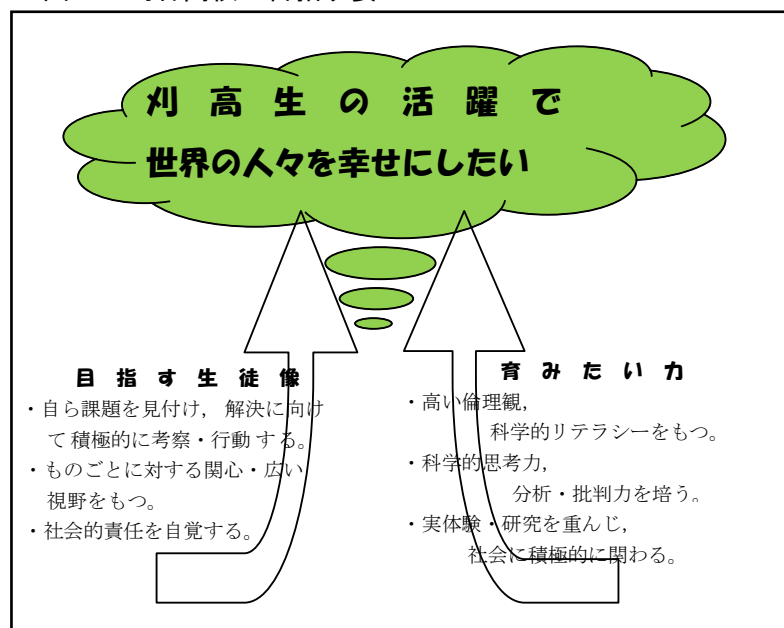
「持続可能な開発は、人類にとって唯一の選択肢だ。実際に作り上げていくのが我々の責任だ」、平成 24 年 6 月に開催されたリオ+20 における成果文書「The future we want (我々が望む未来)」の採択に際し、国連事務局長・潘基文はこう述べた。しかし、新興国や発展途上国は「共通だが差異ある責任」という文言を成果文書に盛り込むことにこだわっており、先進国との軋轢は否めない。ともあれ、20 世紀の自然破壊を伴う経済成長をこれからも継続することはできない。我々人類はどのように歩んでゆけばよいのか。高等学校の教育現場に身を置く我々の使命は、未来社会を担う人材、具体的には、自ら課題を見つけ、その解決に向けて積極的に取り組むことができる人材を育成することである。

本校はまもなく創立 100 周年を迎える伝統校であり、校訓「質実剛健」の下、多くの生徒が文武両道に励み、大学進学を経て社会の中核となる人材を輩出している学校である。そして、何よりも平成 23 年度よりスーパーサイエンスハイスクール（以下SSH）の研究の指定を受け、その中心とする考え方に持続発展教育を据え、「総合的な学習の時間」を学校設定教科「ESD」として取組を進めてきた。そして、平成 24 年 8 月にユネスコスクールに認定された。

2 研究の目的

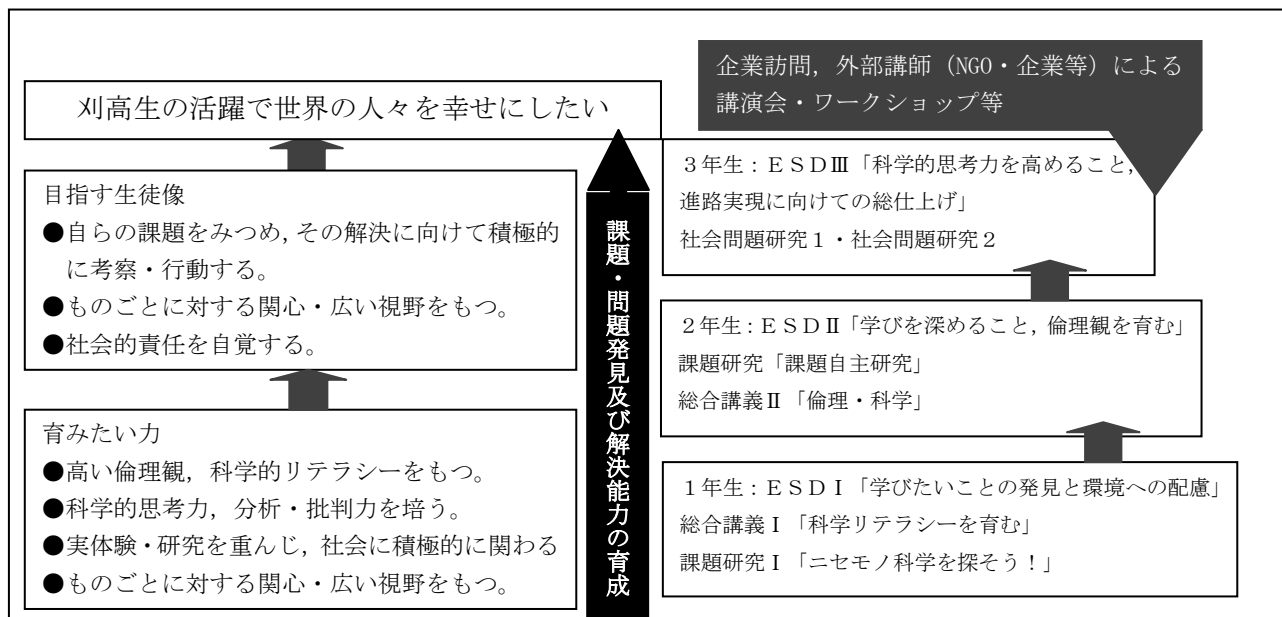
ESD は、人類が地球レベルで直面するさまざまな課題を解決するために、環境・開発・人種・平和・多文化・共生・ジェンダー・国際理解・福祉と多岐にわたる分野で持続可能な未来を創造する力を育むための教育である。このことは本校のSSH事業の目標とまさに合致している。本校では理数教育の充実とともに「刈高生の活躍で世界の人々を幸せにしたい」をスローガンに、国際社会に貢献できる科学的リテラシーや国際的教養やコミュニケーション能力、課題解決力を備えた人材育成を目指すカリキュラム開発を行っている（図 1）。その中心となる本校の学

図 1 刈谷高校の目指す姿



校設定教科「ESD」（総合的な学習の時間に相当）の改善そのものが研究である。世界で活躍できる素養をもった人材を育成していくことを目的として学校設定教科「ESD」の改善を図った。その実践スキームを図 2 に示す。

図2 刈谷高校のESD実践スキーム



ESDそのものは非常に幅の広い概念・分野をもっている。そうした中で、ESDであれ、SSHの教育であれ、中核に据えたいことは「現在、世の中が抱えている課題を発見し、その解決に向けて主体的に考えて考察することができる生徒を育む」ことである。こうした力を育むため、学校設定科目「ESD」をどのように改善するかが研究の主題である。

3 研究の方法

学校設定科目「ESD」の年間指導計画の分析をしたうえで、新たなESDの視点を導入し、課題解決に向けて、生徒が主体的に取り組むことができる展開に改善する。特に、2年生の「自主課題研究」について、生徒が課題に強く迫ることができるような手立てを工夫する。

4 研究の内容

(1) 学校設定科目「ESD」の年間指導計画

はじめに本校におけるESDの計画を提示する（図3～5）。

図3 1年生「学びたいことの発見と環境への配慮」

育みたいもの	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1基礎基本の定着	ESDガイダンス 図書館オリエンテーション オリエンテーション合宿				学校祭準備				租税教室		
2進路研究 未来との関わり	進路研究1（学部学科研究） ESD講演会				進路研究2（文理選択） 課題研究1 テーマ 「ニセモノ科学を探そう！」 7月に身の周りにあるニセモノ科学を紹介し、夏休みに各自で見つけさせる。2学期に入ったところで、各クラスで報告する。				フェアトレード講演		
3倫理観 科学リテラシー	総合講義1 「科学リテラシーを育む」 外部講師を招いたり、校内での講義を重ねることで科学的に物事を考える姿勢を学び、身に付ける。				修学旅行研究1 （原爆について学び、考える）						
4科学的思考力 分析・批判力											
5実体験・研究 社会との関わり					デンソー企業見学 環境と関わる最先端技術を学ぶ。						

図 4 2年生「学びを深めること、倫理観を育む」

育みたいもの	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1基礎基本の定着	E S Dガイダンス 修学旅行研究 2 (しおり作成、萩の町・秋芳洞を学ぶ)				学校祭準備						
2進路研究 未来との関わり	進路研究 3 (大学入試のシステムを学ぶ)				進路講演会 大学模擬授業 (学部・学科への知識を深める)				進路研究 4 (受験生に向けて)		
3倫理観 科学リテラシー					課題研究 2 「自主課題研究」 歴史、政治、経済、環境、医療、最先端 技術など自分の興味・関心のある分野に ついて、知識を深めて考察をする。 まずは昨年度の優秀作品を紹介し、研 究・レポートの基礎をガイダンスする。 夏休みにレポートを完成させ、2学期各 クラスで発表する。				総合講義 2 テーマ「倫理・科学」 文系の生徒は理系の 教員から、理系の生徒 は文系の教員から講 義をうけ、幅を広げる		
4科学的思考力 分析・批判力											
5実体験・研究 社会との関わり	修学旅行				デンソー 国際貢献プロジ ェクト				自主課題研究優秀作品発表会		

図 5 3年生「科学的思考力を高めること、進路実現に向けての総仕上げ」

育みたいもの	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1基礎基本の定着	E S Dガイダンス				学校祭準備				センター試験事前指導 卒業への準備		
2進路研究 未来との関わり	進路ガイダンス				大学模擬授業 大学にむけての書類など諸準備 担任との面談をより密にする。						
3倫理観 科学リテラシー											
4科学的思考力 分析・批判力	総合講義 3 テーマは教員・生徒と もに自由に設定・選択				社会問題研究 2 1とは異なるテーマを選択し、 考察する。幅広い識見をもつこ とをねらいとする。						
5実体験・研究 社会との関わり	社会問題研究 1 課題研究、総合講義で学んだこ とを活かし、地球的問題へ解決 策を自分なりに考察する。										

計画の中で目玉となるのが、課題研究、総合講義、社会問題研究である。それぞれの特色について触れておくと、まず課題研究は、これまで自主課題研究として生徒自身がテーマを自由に決めて、情報収集・分析・考察を行ってレポートを提出する形式のものである。これは「現在世の中が抱えている課題・問題を発見し、その解決に向けて主体的に考えて考察することができる生徒を育む」ことの根幹となる部分である。

次に総合講義について、1年次は環境というテーマで各教科の教員からオムニバス形式で講義を受けて理解を深めるもので、2・3年次は教員が自由に設定したテーマを生徒が選択受講する形式のものであり、幅広い知識や視野をもつことによってより高度な課題解決能力の素養を身に付けさせるものである。さらに3年次には社会問題研究で、政治・経済・福祉・教育・環境・先端技術・医療など

幅広く現代社会が抱えている問題について学び、考え、最後に小論文をまとめるものである。

いずれも生徒の主体的な活動の場となるものではあったが、E S Dの視点を踏まえてより一層発展させた計画をここで提示してみた。具体的には、課題研究では自主課題研究という形式は2年次のみとし、1年次では科学リテラシーをもつために、世に流通している商品などに潜んでいるニセモノ科学を探索すること（要は宣伝・効用などの虚をあばくこと）にテーマを統一した。また2年次の総合講義では、先端科学や科学的思考力を身に付けるだけでなく、それを用いる者の倫理観を育むことを重視し、テーマを「倫理・科学」と設定した。

その他の特徴としては、進学校の授業ではとかく座学に終始してしまい、実体験やディベート・ワークショップの機会が少ないという嫌いがある。それを総合的な学習の時間の中で補うため、刈谷市に本社があるデンソーに協力してもらい、生徒に実体験の場面を提供する。またE S Dでは人権教育も大切な一側面である。そこでフェアトレード講演を開催する。この講演ではワークショップを交えながら、フェアトレードとは何か、世界経済の一実態を生徒に考えさせる。

その他としては、ガイダンス類・進路研究・大学模擬授業である。前者・中者は、どこの高校でも類するものを展開しているので、詳述するまでもない基本的な事項である。また大学模擬授業は、大学教授を招いて講義をしてもらい、生徒が大学での学びとは何かを先取りして体験させ、あわせて進路意識の高揚を図るためのものである。

以上、E S Dの年間指導計画について簡単に説明したが、このような整理をせずに従来の形式で本校の「E S D＝総合的な学習の時間」は、昨年度からスタートした。そこで不十分な所が出てきたため、今回一試案として計画を立案してみたところである。したがって、この計画は、未実施の部分が多い。そこで、計画実現に近付けるためにどのように実践をしていくのかということが大切である。ここが今回の研究の骨子となるので、そのことは次の(3)で述べることにする。

(2) チェックシートによる分析

この理想形の年間指導計画を国立教育政策研究所が提示したチェックシートで分析してみると、以下ようになる。○を記したところが、その活動における重点項目である（チェックシートを見やすいように改変した）。

ア 持続可能な社会づくりの構成概念（表1、2）

表1 実践と構成概念の関係1

	総合講義	課題研究	社会問題研究	企業訪問	企業プログラムへの参加	N G O 講演会	大学模擬授業
《多様性・相互性》	○	○	○		○	○	○
《有限性》		○	○	○			○
《連携性》		○	○		○		
《公平性》		○	○	○		○	
《責任性・その他》	○	○	○	○		○	

《多様性・相互性》…地球には多くの生命が存在し、各地に各様の風景・歴史・文化・社会が存在する。しかし、自然開発や都市化、グローバル経済といった様々なうねりの中で大きく変動しようとしている。地球には多様な世界・生命が存在し、それが自分たちの行動で損なわれることが

ないように経済成長や先端技術の開発をしていかなければならない。

《有限性》…20 世紀における経済、工業、技術の発達、地球上の限りある資源の利用によって支えられてきた。しかし、21 世紀に向けて資源の枯渇という大問題に直面している。そこで、限りある資源を未来世代が利用できるような持続可能な経済成長、資源利用、技術革新を図らなければならない。

《連携性》…自分の行動が地球につながっていく。また自分 1 人の行動だけでなく、地域社会、企業、世界各国の人々など周囲、世界を巻き込んで問題に取り組んでいくことが必要である。

《公平性》…南北問題・南南問題だけでなく、各国内での経済格差も大きな課題である。また児童労働など子どもの人権を守るという問題もあり、これらは我々の日常の消費生活や日常生活と不可分のことでもある。こうした国内外の問題解決に取り組むことで、公平性のある社会の実現を目指す必要がある。

《責任性》…高い倫理観をもち、次世代に向けて地球生命が共存できる社会を構築する責務を担っており、それにむけて主体的に取り組み、課題を解決していかなければならない。

イ ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度

表 2 実践と能力・態度の関係

	総合講義	課題研究	社会問題研究	企業訪問	企業プログラム への参加	NGO 講演 会	大学模擬授業
《批判・総合》	○	○	○				○
《対話・協力》		○	○	○	○	○	○
《未来 ・つながり》		○	○	○	○		○
《参加》					○		
《その他》	○					○	

《批判・総合》…基礎知識を活かし、考察とともに客観的な批判を加えることで高度な分析力をもつこと。

《対話・協力》…対話・ディスカッション・ワークショップの中で考察を深め、ものごとを進める態度。

《未来・つながり》…学習で得た知識・考察を未来・社会へ還元させる力。

《参加》…座学や調べ学習に終わらず、実体験を重視する態度。

《その他》…高い倫理観・規範意識をもつこと。

(3) 今年度の研究の骨子

以上のように、本校が学校設定科目「ESD」の年間指導計画の分析をしたうえで、今年度は2年生を対象に1年生で行う内容も加えての実践を行った。今年度実施の年間指導計画は以下のもの（図6）である。図4（理想の年間計画）との違いを吹き出しで示した。

図 6

育みたいもの	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1基礎基本の定着	ESDガイダンス 修学旅行研究 (しおり作成, 広島と原爆, 萩の町・秋芳洞を学ぶ)				学校祭準備						
2進路研究 未来との関わり	進路研究 (大学入試のシステムを学ぶ)				進路講演会 大学模擬授業 (学部・学科への知識を深める)				進路研究 (受験生にむけて)		
3倫理観 科学リテラシー	フェアトレード講演 (含 事前のワークショップ)				課題研究 「自主課題研究」 7月にテーマ設定, 夏休みに課題研究を すすめる, 9月の始業式に提出。各自の発表は11月2日より順次おこなう。 優秀者を選ばし, 1月に発表させる。				ESDの視点を入れた 総合講義 自分の興味・関心, 問題意識から, 各担当教員が設定した講座を選択し, 幅広い視点と考察力を高める。		
4科学的思考力 分析・批判力	1年生の内容										
5実体験・研究 社会との関わり	修学旅行				夏休み=SSH研究, 各種体験講座				デンソー国際 貢献プロジェクト (有志) 自主課題研究優秀作品発表会 SSH発表会		

ア 2012年度2年生「E S D II」

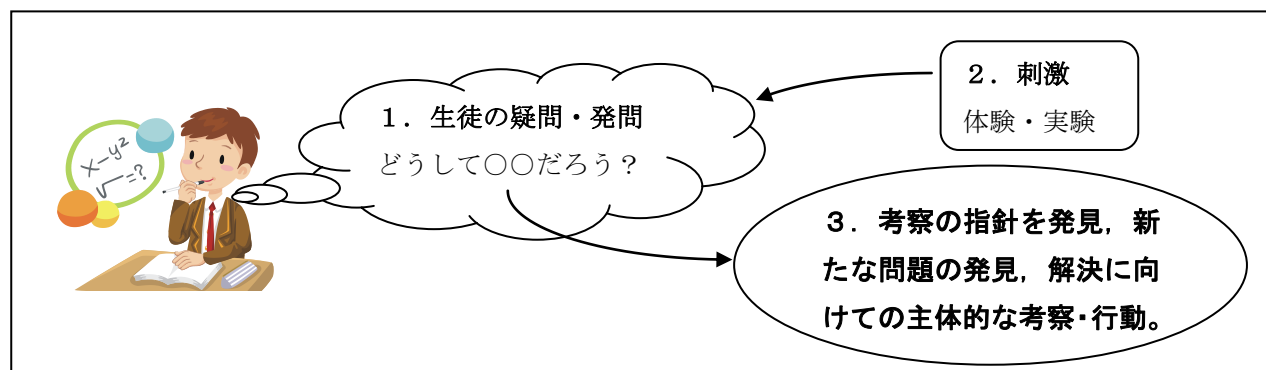
(ア) 課題研究Ⅱ「自主課題研究」

本校では次に挙げる18のテーマ(表3)から生徒は自由に分野を選択し, 各自課題研究を進めていく。課題研究といっても, 辞書やインターネットでの調べ学習のみではE S D の視点に立った学習とは言えない。そこで, 下記のようなチャート(図7)が実現できないかと考えた。「自主課題研究」であるがゆえに, 主体的・課題解決的な考察や課題への取り組みが求められる。生徒が何を問題とし, 何を考えるのかを待つことが大切であり, 生徒に課題を与えるのではなく, 「2 研究の目的」のところで述べたように, 研究だけでなく現場での実体験を生徒にさせ, そこから学習意欲や興味・関心, 問題意識や新たな課題の発見をさせる。つまりは, 生徒に問題意識を喚起したり, 価値観を揺さぶったりするような講演や実験・体験の機会を提供することで, 課題を考察させることを目指した。

表 3 自主課題研究の分野一覧

1 言語・文学 2 哲学・思想 3 伝統文化・各国文化 4 歴史 5 法・経済・社会 6 生活一般
7 社会問題 8 文化・マスコミ 9 学校問題 10 国際問題・国家 11 数学・コンピュータ 12 宇宙・天文・気象
13 科学技術・化学 14 生物 15 生理・健康・スポーツ 16 医学・薬学 17 環境
18 心理学 (19 防災 *防災は設定していなかったが, 2名の生徒が新たに取り組んだため, 今回は便宜上「19 防災」と設定した。)

図 7 自主課題研究のチャート



(イ) 実験, 体験, 講演などの機会の提供

S S Hの事業で, 東京大学, 名古屋大学はじめ研究機関と連携してさまざまな研究のプログラムを提供しているが, 本校では2年次に生徒は文理選択を終え, 文系の生徒はS S Hの研究プログラムとは縁遠くなる。そのため, 文系の生徒へのS S Hの事業, E S Dの事業に, 外部講師や企業訪問による知識・情報提供, 実験, 体験等の機会を提供することとした。

a 外部講師によるフェアトレード講演会「貧困とは何か〜ワークショップ」

世界貿易, 経済の在り方, 公平性といった課題研究に取り組む生徒が出てくことに期待し, 今年6月に学年全体を対象にフェアトレードに関する講演会を実施した。ゲスト・ティーチャーを招き, 「貧困とは何か」をテーマにワークショップ(具体的には, 6人程度のグループで貧困から連想することを列挙してつなげていくもの)を実施し, その後講演を行った。

講演後に行った生徒アンケートの結果は以下になった。アンケート項目3, 5において「とても」, 「やや」に○をつけた生徒は, 文理を問わず70%以上ある。

1. 以前からフェアトレードを知っていましたか

	文系男子		文系女子		理系男子		理系女子	
内容を理解していたし, 商品を購入したこともある。	3人	5.8%	1人	1.1%	4人	2.9%	3人	4.5%
内容はあまり理解していなかったが, 商品を購入したことがある。	0人	0.0%	4人	4.6%	6人	4.3%	2人	3.0%
内容は理解していたが商品を購入したことはない。	7人	13.5%	20人	23.0%	26人	18.8%	10人	14.9%
知らなかった。	42人	80.8%	62人	71.3%	102人	73.9%	52人	77.6%
有効回答数	52人		87人		138人		67人	



講演会

2. 講演の内容はとても興味深かったですか。

	文系男子		文系女子		理系男子		理系女子	
とても	13人	26.0%	22人	25.6%	27人	19.3%	23人	33.8%
やや	23人	46.0%	58人	67.4%	69人	49.3%	39人	57.4%
あまり	11人	22.0%	6人	7.0%	36人	25.7%	3人	4.4%
いいえ	3人	6.0%	0人	0.0%	8人	5.7%	3人	4.4%
有効回答数	50人		86人		140人		68人	

5. フェアトレードの考え方を伝えたいと思いますか。

	文系男子		文系女子		理系男子		理系女子	
とても	12人	23.1%	24人	27.6%	19人	13.5%	20人	29.4%
やや	28人	53.8%	56人	64.4%	80人	56.7%	44人	64.7%
あまり	8人	15.4%	7人	8.0%	36人	25.5%	4人	5.9%
いいえ	4人	7.7%	0人	0.0%	6人	4.3%	0人	0.0%
有効回答数	52人		87人		141人		68人	

3. フェアトレードに興味をもてましたか。

	文系男子		文系女子		理系男子		理系女子	
とても	12人	23.1%	29人	33.3%	31人	22.0%	20人	29.4%
やや	27人	51.9%	52人	59.8%	63人	44.7%	46人	67.6%
あまり	10人	19.2%	6人	6.9%	38人	27.0%	2人	2.9%
いいえ	3人	5.8%	0人	0.0%	9人	6.4%	0人	0.0%
有効回答数	52人		87人		141人		68人	

6. 今後フェアトレードの商品を購入したいですか。

	文系男子		文系女子		理系男子		理系女子	
とても	10人	19.2%	37人	42.5%	25人	17.7%	23人	33.8%
やや	30人	57.7%	44人	50.6%	67人	47.5%	36人	52.9%
あまり	8人	15.4%	6人	6.9%	41人	29.1%	9人	13.2%
いいえ	4人	7.7%	0人	0.0%	8人	5.7%	0人	0.0%
有効回答数	52人		87人		141人		68人	

4. フェアトレードが理解できましたか。

	文系男子		文系女子		理系男子		理系女子	
とても	11人	21.2%	19人	21.8%	34人	24.1%	20人	29.4%
やや	25人	48.1%	55人	63.2%	70人	49.6%	38人	55.9%
あまり	13人	25.0%	13人	14.9%	31人	22.0%	10人	14.7%
いいえ	3人	5.8%	0人	0.0%	6人	4.3%	0人	0.0%
有効回答数	52人		87人		141人		68人	

7. ESDに関して, さらに興味がわいてきましたか。

	文系男子		文系女子		理系男子		理系女子	
とても	7人	13.5%	8人	9.3%	10人	7.2%	8人	11.9%
やや	21人	40.4%	52人	60.5%	60人	43.5%	41人	61.2%
あまり	17人	32.7%	23人	26.7%	52人	37.7%	15人	22.4%
いいえ	7人	13.5%	3人	3.5%	16人	11.6%	3人	4.5%
有効回答数	52人		86人		138人		67人	

b 企業訪問「フジイ化工株式会社工場見学」

生徒が課題を選択する際の15の分野の一つに「環境」がある。この分野は, 「持続可能な社会づくり」には関わりが深く, 昨今の省エネやエコブームは東日本大震災により一層関心が高まっている。したがって, 生徒はこの分野に興味・関心をもっているだろうし, また彼らに有益な実体験の機会を提供することができれば, 環境に関する生徒の課題研究に役立つ。そこで, 学校の近隣にある企業とタイアップして環境に関する機会を提供することに決め, 安城市にあるプラスチックの再生企業であるフジイ化工株式会社の工場見学を生徒に提示した。

会社概要を説明すると, 自動車の内装などのプラスチックを再利用・再加工であるが, この技術を生かしてエコキャップの回収にも取り組んでいる。エコキャップの再利用は利益があがらない事業で

あるが、再利用の作業過程が障がい者の授産事業になること、またエコキャップの回収がワクチン事業に寄与すること、といったCSR事業になることから積極的に取り組んでいる。リサイクルの現場体験、CSR事業及び企業の責任、地元の中小企業の実態など生徒にとっていろいろな素材を提供してくれる企業である。

以上より、今回課題研究で「環境」を選んだ生徒にとって、フジイ化工(株)の工場見学が有益であると考え実施した。

エコキャップの回収は中学校でも盛んに行なわれていたようで、生徒にとって馴染みのある事業であった。しかし、それがリサイクルとしてはどのような過程で何に変わっていくのかは初めて見ることであり、生徒は積極的に現場体験に取り組み、工場の人にも多くの質問をしていた。

見学後のアンケートに、「授産事業になっていること」「エコキャップの回収を少しでも多くできるために、本業のプラスチックのリサイクルでの利益をたくさん出すことを目標とすること＝企業の社会責任」があり、生徒にとっては大きな発見があったようだ。また理系の生徒には、プラスチックの強度検査の説明がより強い印象を与えていたようである。



工場見学の様子

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

今年度当初の生徒が選択した「自主課題研究」のテーマ分野別登録数は下記のようになった。

1. 言語・文学	9	11. 数学・コンピュータ	18
2. 哲学・思想	10	12. 宇宙・天文・気象	30
3. 伝統文化・各国文化	24	13. 科学技術・化学	23
4. 歴史	16	14. 生物	33
5. 法・経済・社会	12	15. 生理・健康・スポーツ	55
6. 生活一般	12	16. 医学・薬学	16
7. 社会問題	6	17. 環境	9
8. 文化・マスコミ	14	18. 心理学	61
9. 学校問題	2	19. 防災	2
10. 国際問題・国家	7		

フェアトレード講演会のテーマである「5 法・経済・社会」「7 社会問題」「10. 国際問題・国家」、企業見学のテーマである「17. 環境」を選んだ生徒の研究主題は下記のようになった。

5	法・経済・社会	ミャンマーの GDP	10	国際問題・国家	領土問題
		経済コンサルタント			戦争
		東京都知事・大阪市長から学ぶ思想			ギリシャ
		日本の産業と世界の産業の関係			戦争と紛争の原理
		ディズニーランドの秘密			アラブの財政状況について
		ユニクロ			国と国との協力
		衝動買い			児童労働

5	法・経済・社会	流通・経済について	17	環境	地球温暖化※
		SAMSUNG の人気にせまる			地球温暖化※
		黒点から見る経済の未来			エネルギー問題について
		地方政党はなぜ躍進したのか？			分別について
		欧州危機での日本への影響について			蚊のいないクリーンな世界を目指して
7	社会問題	高齢者の交通事故について			Recently Eco
		薬物乱用			電気自動車の仕組み
		オウム真理教の目的			環境※
		ゆとり教育とゆとり世代			環境※
		よりよい仕事をするために			※異なる生徒が同一タイトルのレポートを作成した。
		日本人の幸福度			

5の「流通・経済について」の課題研究の内容はマーケティングについてであった。フェアトレードに関連したテーマである「児童労働」を挙げた生徒が1名いた。この生徒のレポートは、貧困・環境・法律が守られないこと・途上国に不利な貿易の仕組みという児童労働の原因の整理から始まり、カーペット業者に売られてしまったイクバル・マーシーの事例、このイクバルの講演に影響を受けたアマンダ・ルースが友人たちとともに寄付金を募ってパキスタンのNGO組織に寄付したことなどの事例をまとめていた。その他、金属工場で働いて重度の火傷をおった少女、裸足のまま針が散乱する床の上で注射器を選別する少女など、過酷な児童労働の実態を調べあげた。この生徒はレポートの最後に、「学校に行って、勉強して、部活をして、ごはんを食べて…って私の毎日は何も変わってないし、何か変わることを想像することもできない。結局、私は（多分他の人も）児童労働がどれだけ残酷なことを全く理解できていないのだと思った。本やパソコンには、“もっとたくさんの人が児童労働について知り、フェアトレードの商品を買ったり、キャンペーンを行ったりすることが大切！”と書いてあったけど、本当にそれだけでいいのかと考えてみた。子どもを支配してお金に目がくらんでいる愚かな大人を、そんな大人を生んでしまっている社会を、どうにかするためには、その社会を生んでしまっている社会をどうにかするためには、その社会を作り出している先進工業国が、もっと我慢することが大切なんじゃないか。…」と考えを述べている。レポートは、調べ学習と自分の考えやあるべき倫理観の発見で終わっており、具体的にどのようにアクションするのか、どう社会があるべきかという考察までには達していないので、今後いかにして発展させていくか、それは課題研究の段階であるのか、3年次の社会問題研究において実現するべきか、という点は次年度以降の研究課題とする。フェアトレード講演会によって1名の生徒であったが、生徒の問題意識の喚起につながったことが把握できる。

一方、フジイ化工(株)の工場見学に参加した8名の生徒のうち、「環境」を選んだ生徒は1名であった。生徒のレポート名は「Recently Eco」である。この生徒のレポートも本やインターネットを利用しながら、2部構成でバイオマスとエコキャップ運動についてまとめていた。バイオマスに関しては、生徒自身が興味・関心をもっている環境に関する分野を自ら掘り下げて調べ、考察を重ねた内容であった。調べ学習という色合いが強いが、こちらも自分で興味・関心のあるテーマを探し、調べ、問題点を発見して考察を深めるという過程を十分に踏んでいると言える。エコキャップについてはまさに工場見学から派生した内容であり、内容的にはエコキャップ運動の概略をまとめたに過ぎないが、最後に生徒が、「エコキャップ運動について、送料がかかる点や、キャップを集めるためにたくさんペットボトル飲料買って飲むなんてエコじゃないし本末転倒である。それなら買うのを我慢して、浮いた150

円分をワクチンにすればいいや、といった部分も考えられる。しかし、ペットボトル飲料は需要が膨大にある。だからどんどん生産されどんどん購入されていく。それならば、毎日出ているキャップのゴミはどうすれば良いのか。エコキャップ運動が無くても、ごみ処理業者にきちんと回収され、リサイクルされる。そうであるのならエコキャップ運動を行い、すこしでもそのキャップがワクチンにかわるこの運動はいいものではないか。この運動は寄付だけが目的ではないと考える」と記していることに注目したい。この結論を膨らませる考察や資料収集ができればなお良かったが、生徒がエコキャップ運動の問題点や矛盾点を発見し、自分の意見を提示してきたのは自主課題研究における目標の一つを達成したといえる。

これらの学習の結果から、フェアトレード講演会、工場見学が4の(3)で提示したチャート(p.103 図7)の「2. 刺激」になったといえる。生徒のレポート内容は、調べ学習の枠の中ではあるが、講演会・実体験の場を提供することが生徒の主体的な学習への取り組みに寄与したことに関しては及第点が与えられると評価できる。次年度にむけての課題として、多種多様な課題研究が出てくるなか、多くの生徒のニーズに沿ったもの、あるいは体験・講演が課題研究とつながるような方向性や指導の在り方を整えていく必要性を痛感した。

(2) 評価について

さて、本研究の目的は「問題・課題解決能力を育むこと」である。今年度はそのために課題研究を実施し、それをサポートするために講演会や企業の工場見学の機会を提供した。そこで、今回の過程で、生徒に問題・課題解決能力をどのくらい育むことができたのか、について資料1の評価シートを用いて、生徒の課題研究を評価する。評価の規準は、課題探究力では意欲だけでなく、結論の実証や論証がしっかりできているかということ、資料活用では参考文献とともに論拠となる具体的なデータが付してあるかどうか、表現力や発表力では自分の考えをまとめるだけでなく、仮説・実証・結論という研究発表の形態を整えられているか、という点である。

筆者が評価を担当する17名の生徒の評価は以下のようになった。

	課題探究力	情報活用能力	表現力	発表力
◎	2	0	3	1
○	13	14	14	12

若干名の生徒を除き、概して良く調べ、良くまとめられた課題研究であったといえる。ただし、情報活用に関してはインターネットによる情報検索が多いようであり、情報リテラシーや研究におけるソースの扱い方も指導しなければいけない。それから、評価の数値には表れていないが、実際の発表を目の前にしたところ、生徒のプレゼンテーション能力が身に付いていないため、発表内容を十分に表現できていないと感じた。この点は教科「情報」の教員と連携して改善していきたい。また「課題探究力」においては◎となる生徒が増えるような指導やカリキュラムの開発にも取り組む必要がある。

(3) 今後の課題

本校の「E S D＝総合的な学習の時間」は従来の授業カリキュラム形式を基礎に昨年度よりスタートした。平成24年度のE S D実践は、試行錯誤しながら実践する過程で不十分なところを改善し、一試案として計画を立案し実施してみた。したがって、この計画は、まだ未実施の部分が多い。そこで、計画の完全遂行に近付けるためにどのように実践をしていくのかということが今後の検討課題である。

「総合的な学習の時間（E S D）」の評価について

1 評価

評価は3段階とする

特に優れている

優れている

普通程度である

評価規準は別に定める。

…◎

…○

…空欄

※前提として、マイナス評価はしない

2 評価の観点

(1) 課題探究力（探究心）

…知的関心、探究心が旺盛かどうか

(2) 情報活用能力

…参考資料の活用能力が優れているかどうか

(3) 表現力

…文章表現力が優れているかどうか

(4) 発表力

…自分の考えを発表する力が優れているかどうか

(5) その他

※ (1) ～ (3) については、レポートが提出されたときに分野別担当者が評価する。

(4) については、分野別発表の時に評価する。

(5) その他には、特に優れていた面があれば、記述的に評価する。

(以下、評価シート)

総合的な学習の時間（E S D）の学習評価表 記入例

2 年 組 番氏名

評価の欄は、◎、○を含めて2つ以上記入する。

自主課題研究テーマ		(分野別担当者が記入する。)		
自主 課題研究	評価の観点	概 評		評価
	課題探究力	◎知的探究心はきわめて旺盛であった。 ○知的探究心は高かった		◎
	情報活用能力	◎資料活用能力は特に優れていた ○資料活用能力は優れていた		
	表現力	◎文章表現力は特に優れていた ○文章表現力は優れていた		
	発表力	◎発表能力は特に優れていた ○発表能力は優れていた		○
	その他		※総合 評価	A

※総合評価は、A・B・Cの3段階評価